

堀切沢(2)遺跡 II 堀切沢(3)遺跡 II

一般国道45号上北道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告一

2012年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成20年度から平成23年度にかけて一般国道45号上北道路建設事業予定地内に所在する堀切沢(2)遺跡、堀切沢(3)遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、堀切沢(2)遺跡では縄文時代前期前葉以前の竪穴住居跡、溝状土坑などの遺構や、縄文時代前期前葉の土器、石器などの遺物が発見されました。また、堀切沢(3)遺跡では、縄文時代早期と思われる土坑、溝状土坑などの遺構や、縄文時代早期中葉の土器、石器などの遺物および、古代の竪穴住居跡や、土師器、土製品などの遺物が発見されました。

本報告書は、これらの調査成果をまとめたものであります。

この成果が、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北整備局青森河川国道事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、ご指導・ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成24年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 松田守正

例　言

- 1 本書は、国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所による一般国道45号上北道路建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成20年度から平成23年度にかけて発掘調査を実施した六戸町堀切沢(2)遺跡、堀切沢(3)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は、堀切沢(2)遺跡が1,632m²、堀切沢(3)遺跡が11,585m²である。
- 2 堀切沢(2)遺跡および堀切沢(3)遺跡の所在地は、青森県上北郡六戸町大字犬落瀬字堀切沢で、青森県遺跡番号は堀切沢(2)遺跡が405029、堀切沢(3)遺跡が405030である。
- 3 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所が負担した。
- 4 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成20年度	平成20年10月8日～10月31日
	平成21年度	平成21年7月1日～7月31日
	平成22年度	平成22年5月6日～10月15日
	平成23年度	平成23年5月10日～5月27日
整理・報告書作成期間	平成23年度	平成23年4月1日～平成24年3月28日

- 5 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、能代谷文化財保護主幹、平山文化財保護主査が担当した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。執筆と編集の担当は以下のとおりである。

(遺構) 堀切沢(2)遺跡：平山、堀切沢(3)遺跡：平山
(遺物) 堀切沢(2)遺跡：平山、堀切沢(3)遺跡：平山
(写真図版：遺構) 堀切沢(2)遺跡：能代谷、堀切沢(3)遺跡：能代谷
(写真図版：遺物) 堀切沢(2)遺跡：平山、堀切沢(3)遺跡：平山

- 6 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した（敬称略）。

航空写真撮影	株式会社シン技術コンサル
石器の石質鑑定	青森県立郷土館　島口　天
黒曜石の産地同定	株式会社パレオ・ラボ
放射性炭素年代測定	株式会社パレオ・ラボ
遺物写真撮影	シリバーフォト、フォトショップいなみ

- 7 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

- 8 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た。

六戸町教育委員会

- 9 本書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「犬落瀬」・「三沢」を複写して使用した。

- 10 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。

- 11 挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。

- 12 全体図等の縮尺は、各挿図毎にスケール等を示している。
- 13 遺構については、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺構に使用した略号等は、以下のとおりである。
- SI- 竪穴住居跡 SK- 土坑 SN- 焼土遺構 SV- 溝状土坑 Pit- ピット（柱穴）
- 14 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 15 遺構実測図の縮尺は、原則として竪穴住居跡のカマド跡は1／30、竪穴住居跡・土坑・溝状土坑は1／60、焼土遺構は1／30に統一し、各挿図毎にスケール等を示した。
- 16 遺構実測図に使用した網掛けの指示は以下のとおりである。

粘土（崩落）

粘土（カマド袖）

焼土（火床面）

- 17 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。
- 18 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記等には、新版標準土色帖 2008年度版（小山正忠・竹原秀雄）を使用した。
- 19 遺物については、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、以下のとおりである。
- P- 土器 S- 石器 C- 炭化物 土- 土製品
- 20 遺物実測図には、遺構毎に1から通しの図番号を付した。
- 21 遺物実測図の縮尺は、原則として縄文土器・土師器・土製品は1／3、剥片石器は2／3、礫石器は1／3に統一し、各挿図毎にスケール等を示した。
- 22 遺物実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。

黒色処理

黒色物質付着範囲

- 23 遺物観察表には、出土地点・法量・諸特徴等を示した。（ ）内の数値は現存値である。
- 24 遺物写真には、遺物実測図と共通の図番号を付した。
- 25 遺物写真の縮尺は不同である。

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次・写真図版目次

第1章 調査の概要.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査方法.....	1
第3節 調査の経過.....	3
第2章 遺跡の環境.....	9
第1節 遺跡周辺の地形・地質.....	9
第2節 基本層序.....	13
第3節 歴史的環境.....	14
第3章 堀切沢(2)遺跡.....	17
第1節 遺跡の概要.....	17
第2節 検出された遺構と遺物.....	17
1 穴状住居跡	17
2 土 坑.....	22
3 溝状土坑.....	22
4 ピット(柱穴)	24
第3節 遺構外出土遺物.....	24
1 繩文土器.....	24
2 石 器.....	29
第4章 堀切沢(3)遺跡	31
第1節 遺跡の概要.....	31
第2節 検出された遺構と遺物.....	31
1 穴状住居跡.....	31
2 土 坑.....	36
3 溝状土坑.....	39
4 焼土遺構.....	51
5 ピット(柱穴)	51
第3節 遺構外出土遺物.....	53
1 繩文土器.....	53
2 石 器.....	57
3 古代の土器.....	59
4 土製品.....	59
第5章 自然科学分析.....	60
第1節 堀切沢(2)遺跡、堀切沢(3)遺跡における放射性炭素年代(A M S測定)	60
第2節 堀切沢(2)遺跡出土黒曜石製石器の産地推定	63

第6章 総括	66
第1節 繩文時代	66
第2節 古代	67
引用・参考文献	71
写真図版	77
報告書抄録	94

図版目次

図1 遺跡位置図	33
図2 路線図	4
図3 調査区域図	8
図4 三沢市周辺の段丘区分図	10
図5 基本層序図	12
図6 堀切沢(2)遺跡遺構配置図	16
図7 第1号竪穴住居跡(1)	18
図8 第1号竪穴住居跡(2)	19
図9 第1号竪穴住居跡(3)	20
図10 第2号竪穴住居跡	21
図11 土坑・ピット(柱穴)	23
図12 溝状土坑・出土遺物	25
図13 A区遺構外遺物出土状況	26
図14 遺構外出土遺物(1)	27
図15 遺構外出土遺物(2)	28
図16 遺構外出土遺物(3)	29
図17 堀切沢(3)遺跡遺構配置図	30
図18 第1号竪穴住居跡(1)	32
図19 第1号竪穴住居跡(2)	33
図20 第1号竪穴住居跡(3)	34
図21 第1号竪穴住居跡(4)	35
図22 土坑	38
図23 溝状土坑(1)	40
図24 溝状土坑(2)	44
図25 溝状土坑(3)	48
図26 溝状土坑(4)	50
図27 焼土遺構・ピット(柱穴)	52
図28 B区・C区遺構外遺物出土状況	54
図29 遺構外出土遺物(1)	55
図30 遺構外出土遺物(2)	56
図31 遺構外出土遺物(3)	57
図32 遺構外出土遺物(4)	58
図33 遺構外出土遺物(5)	59
図34 繩文土器出土状況	69
図35 土師器出土状況	70

写真目次

写真1 遺跡全景	79
写真2 調査前風景・基本層序	80
写真3 堀切沢(2)遺跡竪穴住居跡	81
写真4 堀切沢(2)遺跡土坑・溝状土坑	82
写真5 堀切沢(2)遺跡遺構内出土遺物・ 遺構外出土遺物(1)	83
写真6 堀切沢(2)遺跡遺構外出土 遺物(2)	84
写真7 堀切沢(3)遺跡竪穴住居跡	85
写真8 堀切沢(3)遺跡土坑(1)	86
写真9 堀切沢(3)遺跡土坑(2)・焼土 遺構	87
写真10 堀切沢(3)遺跡溝状土坑(1)	88
写真11 堀切沢(3)遺跡溝状土坑(2)	89
写真12 堀切沢(3)遺跡遺構内出土遺物	90
写真13 堀切沢(3)遺跡遺構外出土 遺物(1)	91
写真14 堀切沢(3)遺跡遺構外出土 遺物(2)	92



番号	遺跡名	遺跡番号	時代	種別	都宮町村	番号	遺跡名	遺跡番号	時代	種別	市区町村
1	堀切沢(2)遺跡	405029	縄文	散布地	六戸	14	春日台(7)遺跡	207120	縄文(前)	散布地	三沢
2	堀切沢(3)遺跡	405030	奈良	集落跡	六戸	15	高森(2)遺跡	405021	平安	散布地、集落跡	六戸
3	犬落瀬柳沢遺跡	405062	縄文	散布地	六戸	16	西木(3)遺跡	405025	平安	集落跡	六戸
4	根古橋遺跡	405061	平安	集落跡	六戸	17	内金矢(1)遺跡	405026	平安、中世	集落跡、城館跡	六戸
5	堀切沢(1)遺跡	405028	縄文(後)	散布地	六戸	18	内金矢(2)遺跡	405027	平安	集落跡	六戸
6	堀切沢(4)遺跡	405031	縄文(前)	散布地	六戸	19	高森(1)遺跡	405020	奈良、平安	集落跡	六戸
7	堀切沢(5)遺跡	405032	縄文、平安	散布地	六戸	20	古間木(6)遺跡	207051	弥生(後)	散布地	三沢
8	春日台(1)遺跡	207041	奈良、平安	散布地	三沢	21	古間木(5)遺跡	207052	縄文、奈良、平安	散布地	三沢
9	春日台(2)遺跡	207042	奈良、平安	散布地	三沢	22	古間木(7)遺跡	207053	縄文	散布地	三沢
10	春日台(3)遺跡	207043	奈良、平安	散布地	三沢	23	古間木(8)遺跡	207054	奈良、平安	散布地	三沢
11	春日台(4)遺跡	207044	縄文	散布地	三沢	24	古間木(9)遺跡	207055	奈良、平安	散布地	三沢
12	春日台(5)遺跡	207045	縄文(前)、奈良、平安	散布地	三沢	25	古間木(10)遺跡	207056	縄文(後)	散布地	三沢
13	春日台(6)遺跡	207046	縄文(早・前)	散布地	三沢	26	上久保(1)遺跡	207057	縄文(前)、弥生、奈良、平安	散布地	三沢

図1 遺跡位置図

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

一般国道45号上北道路は、第二みちのく有料道路や百石道路へのアクセス向上、一般国道45号線の交通混雑緩和や事故の減少、沿道環境の改善を目的として計画された六戸町大字犬落瀬から東北町大字大浦に至る全長7.7kmのバイパスである。

当該事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについての協議は、国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所（以下、青森河川国道事務所）から工事予定地内の埋蔵文化財包蔵地の有無について、青森県教育庁文化財保護課（以下、文化財保護課）に照会がなされたことに始まった。

平成19年に青森河川国道事務所と文化財保護課及び青森県埋蔵文化財調査センター（以下、埋蔵文化財調査センター）による現地踏査・協議の結果、事業予定地内には犬落瀬柳沢遺跡、根古橋遺跡、堀切沢(2)遺跡、堀切沢(3)遺跡の所在が明らかになり、発掘調査の条件の整った遺跡から順次調査することとなった。平成20年に埋蔵文化財調査センターが堀切沢(3)遺跡の確認調査を実施したところ、遺構・遺物を検出したことから、翌年から本発掘調査を実施することになった。

土木工事等のための発掘に関する通知書は、堀切沢(2)遺跡は平成21年3月および平成23年4月、堀切沢(3)遺跡は平成20年7月および平成23年4月に青森河川国道事務所長から提出され、埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の実施は、堀切沢(2)遺跡は平成21年3月および平成23年4月、堀切沢(3)遺跡は平成20年7月および平成23年4月に青森県教育委員会教育長から指示された。

第2節 調査方法

(1) 発掘作業の方法

平成2年度に埋蔵文化財調査センターが実施した隣接地の調査において、縄文時代の遺構・遺物及び古代の遺物を検出しているため、縄文時代、古代の遺構調査に重点をおいて調査を進めた。

測量基準点・水準点の設置・グリッド設定

測量原点は、工事用の既存基準点を使用した。レベル原点も、既存基準点を与点として、調査区域内にレベル移動を行い、適宜設置した。

グリッドは両遺跡全てを覆うように設定した。グリッドの起点は、公共座標値X = 72100、Y = 43500をA A - 00とし、1グリッド4m四方として、南から北にアルファベット二文字、西から東に算用数字を付して、その南西隅の組合せで呼称した。アルファベットはA～Yまでの25文字でZは使用せず、A Yの次はB Aとしている。

基本土層

遺跡の基本土層については、表土から順にローマ数字を付して呼称した。同じ層の中でさらに層が分かれる場合はIV a層のようにアルファベットを付した。

表土等の調査

平成2年度に埋蔵文化財調査センターが実施した隣接地の調査において、表土から古代の遺構確認面までは遺物が希薄であることが分かったので、重機を併用して掘削の省力化を図った。出土した遺

物は、適宜地区単位で層位毎に取り上げた。

遺構の調査

検出遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には4分割又は2分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図は、簡易遣り方と(株)CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図や竪穴住居跡に伴う炉等の平面図、出土遺物の形状実測図等は、簡易遣り方測量で縮尺1/20の実測図を作成した。

遺構内の出土遺物については、遺構単位・遺構内地区単位で層位毎に、又は堆積土一括で取り上げたが、床面(底面)や炉・カマドの出土遺物については、トータルステーションや簡易遣り方測量により、必要に応じて縮尺1/20のドットマップ図・形状実測図等を作成した。

遺物包含層の調査

遺物包含層の調査は、上層から層位毎に人力で掘削した。遺物はグリッド単位で層位毎に取り上げたが、遺物が集中する箇所では、トータルステーションによりドットマップ図等を作成した。

写真撮影

写真撮影には、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及びデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況・精査状況等について記録した。また、業者に委託して、ラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を行った。

(2) 整理・報告書作成作業の方法

調査の結果、堀切沢(2)遺跡においては、竪穴住居跡(縄文時代)2軒、土坑1基、溝状土坑3基、ピット(柱穴)2基を検出し、堀切沢(3)遺跡においては、竪穴住居跡(古代)1軒、土坑6基、溝状土坑16基と、焼土遺構1基、ピット(柱穴)3基を検出した。遺物は縄文時代および古代の土器・石器合わせて段ボール22箱分出土した。縄文時代及び古代の集落の時期・構造等を解明するため、竪穴住居跡をはじめとする各遺構の構築時期と集落の変遷、遺物包含層の形成過程等の検討に重点を置いて整理・報告書作成作業を進めた。

図面類の整理

遺構の平面図は、トータルステーションによる測量で作成したものについては、整理作業ではこれを原則として縮尺1/20で図化し、簡易遣り方測量で作成した堆積土層断面図やカマドの付属施設の実測図等との図面調整を行った。また、遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

写真類の整理

35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

遺物の洗浄・注記と接合・復元

縄文時代及び古代の遺構出土遺物及び包含層出土遺物を優先的に洗浄し、接合・復元作業を進めた。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等の整理を行った。

報告書掲載遺物の選別

遺物全体の分類を適切に行なった上で、所属時代（時期）・型式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

遺物の観察・図化

充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、観察表・計測表等を作成した。

遺物の写真撮影

業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

自然科学分析

放射性炭素年代測定による竪穴住居跡の廃棄時期の推定と、出土した黒曜石製石器の産地同定を株式会社パレオ・ラボに委託して行った。

遺構・遺物のトレース・版下作成

遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、トレースペンを使用した手作業と（株）CUBIC製「トレースくん」およびアドビシステム社「イラストレイター」を用いたデジタルトレースを併用した。実測図版・写真図版等の版下作成についても、紙図版による手作業とパソコンによるデジタルデータ加工作業を併用した。遺構内出土遺物のうち、竪穴住居跡のカマド出土遺物等については、原則として遺構の平面図にそのドットマップ図・形状実測図等を掲載した。

遺構の検討・分類・整理

各遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係等に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

遺物の検討・分類・整理

遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

調査成果の検討

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代と古代の集落の時期・構造・変遷等について検討・整理した。

第3節 調査の経過

(1) 発掘作業の経過

堀切沢(2)遺跡および堀切沢(3)遺跡は複数年度にわたり発掘調査が行われていることから、発掘作業の体制及び経過を年度毎に記載する。

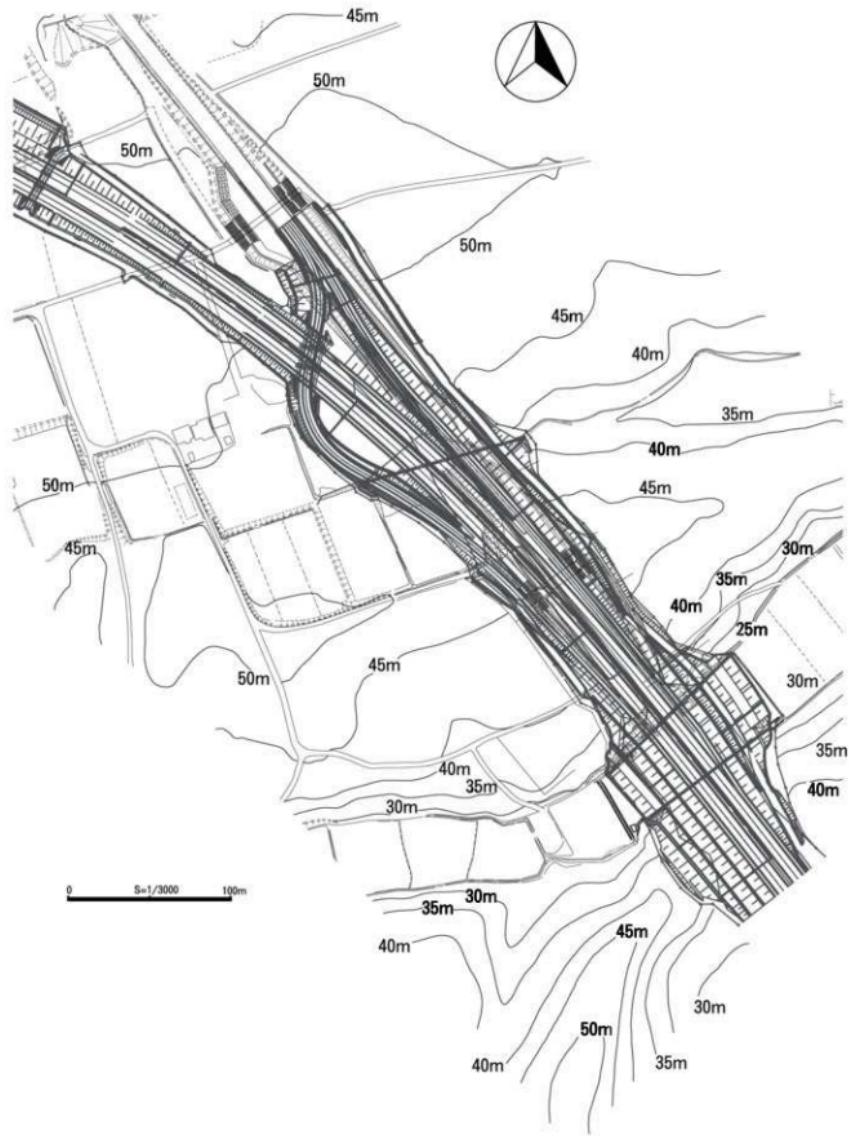


図2 路線図

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

(平成20年度) 所長 伊藤 博文 (平成21年3月転出)
 次長 工藤 大 (平成22年3月退職)
 総務GM 桜庭 孝雄 (平成21年3月退職)
 調査第二GM 島山 昇 (平成23年3月退職)
 文化財保護主査 佐藤 智生
 文化財保護主査 大平 哲世
 調査補助員 渡辺陽一、阿保るみ、成田明日美、鳴海賛美

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員 村越 潔 国立大学法人弘前大学名誉教授(考古学)

調査員 高島 成侑 前八戸工業大学教授(建築学)

同 三浦 圭介 北里大学非常勤講師(考古学)

同 山口 義伸 青森県立浪岡高等学校教諭(地質学)

- 9月中旬 事業者、文化財保護課と調査前の打合せを行い、発掘作業の進め方等について確認を行った。
- 10月上旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前準備作業を行った。
- 10月8日 発掘調査器材等を現地へ搬入し、環境整備を行った後、堀切沢(3)遺跡の発掘作業を開始した。
- 10月中旬 検出した遺構の精査を行いながら、順次トレレンチの掘削を行った。
- 10月31日 安全対策のための埋め戻しを終え、調査を終了した。その後、発掘器材・出土品等を搬出し、現地から撤収した。

(平成21年度) 所長 新岡 銃浩 (現:青森県総合社会教育センター所長)
 次長 工藤 大 (平成22年3月退職)
 総務GM 木村 繁博
 調査第一GM 成田 滋彦
 文化財保護主幹 中村 哲也
 文化財保護主事 澤田 恭平 (平成22年3月退職)
 調査補助員 鈴木貴仁、木村崇志、佐々木香澄、大谷望

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員 村越 潔 国立大学法人弘前大学名誉教授(考古学)

調査員 高島 成侑 前八戸工業大学教授(建築学)

同 三浦 圭介 北里大学非常勤講師(考古学)

同 山口 義伸 青森県立浪岡高等学校教諭(地質学)

- 6月下旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前準備作業を行った。

- 7月1日 根古橋遺跡の調査と並行して、発掘調査器材等を現地へ搬入し、環境整備を行った後、堀切沢(3)遺跡の発掘作業を開始した。
- 7月上旬 調査区内の表土除去を重機を用いて行った。
- 7月中旬 順次検出した遺構の精査を開始した。
- 7月下旬 検出した遺構の精査を行いながら、順次トレーナーの掘削を行った。
- 7月31日 安全対策のための埋め戻しを終え、調査を終了した。その後、発掘器材等を搬出し、現地から撤収した。

(平成22年度)	所長	新岡 翔浩 (現:青森県総合社会教育センター所長)
	次長	畠山 昇 (平成23年3月退職)
	総務GM	木村 繁博
	調査第一GM	成田 滋彦
	文化財保護主幹	能代谷 征則
	文化財保護主事	岩田 安之 (現:青森県教育庁文化財保護課)
	調査補助員	奈良亜矢子、太田雄、古川紗緒里、福田南

専門的事項に関する指導・助言

- 調査指導員 村越 潔 国立大学法人弘前大学名誉教授 (考古学)
- 調査員 高島 成侑 前八戸工業大学教授 (建築学)
- 同 三浦 圭介 北里大学非常勤講師 (考古学)
- 同 島口 天 青森県立郷土館主任学芸主査 (地質学)
- 4月中旬 事業者、文化財保護課と調査前の打合せを行い、発掘作業の進め方等について確認を行った。
- 4月下旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前準備作業を行った。
- 5月6日 発掘調査器材等を現地へ搬入し、環境整備を行い、堀切沢(3)遺跡の調査を開始した。
- 5月中旬 堀切沢(2)遺跡の調査を開始した。
- 9月15日 株式会社シン技術コンサルに委託して、遺跡および調査区全体の空中写真撮影を行った。
- 9月17日 島口調査員より地質の現地指導を受けた。
- 10月7日 村越調査指導員、高島調査員、三浦調査員より現地指導を受けた。
- 10月15日 全ての発掘作業を終了し、発掘器材・出土品等を搬出し、現地から撤収した。

(平成23年度)	所長	松田 守正
	次長	成田 滋彦
	総務GM	木村 繁博
	調査第一GM	中嶋 友文
	文化財保護主幹	能代谷 征則
	文化財保護主査	浅田 智晴

調査補助員 笹秀仁 奈良岡幸子 東海林心

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員 村越 漢 国立大学法人弘前大学名誉教授（考古学）

調査員 関根 達人 国立大学法人弘前大学人文学部教授（考古学）

同 山口 義伸 前青森県立浪岡高等学校教諭（地質学）

同 島口 天 青森県立郷土館主任学芸主査（地質学）

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

4月上旬 事業者、文化財保護課と調査前の打合せを行い、工事の優先箇所や発掘作業の進め方について確認を行った。

4月下旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前準備作業を行った。

5月10日 堀切沢(2)遺跡の調査を開始した。

5月下旬 堀切沢(3)遺跡の調査を開始した。

5月27日 全ての調査を終了し、事業者と発掘現場終了確認を行った。その後、発掘器材・出土品等を搬出し、現地から撤収した。

(2) 整理・報告書作成作業の経過

平成20年度から平成23年度までの発掘調査で堀切沢(2)遺跡においては、縄文時代の竪穴住居跡2軒、溝状土坑3基と土坑1基、ピット（柱穴）2基を精査し、堀切沢(3)遺跡においては、古代の竪穴住居跡1軒と縄文時代の溝状土坑16基、土坑6基、ピット（柱穴）3基、焼土遺構1基を精査し、遺物が22箱（段ボール箱）出土した。報告書刊行事業は4ヶ年分をまとめて平成23年度に実施することとなり、平成20年度と平成21年度に行った調査の整理作業は、各々翌年度に写真類や遺構図面など一部の作業を行った。平成22年度に行った調査の写真類の整理作業等は発掘調査終了後の平成22年11月に、平成23年度に行った調査の写真類の整理作業等は発掘調査終了後の平成23年6月に終了している。この他の整理・報告書作成作業は、平成23年4月から平成24年3月までの期間で行った。

平成23年度の整理・報告書作成体制は以下のとおりである。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

文化財保護主幹 能代谷 征則（報告書作成担当者）

文化財保護主査 平山 明寿（報告書作成担当者）

調査補助員 古川紗緒里 佐々木隆治 三上祐賀子

整理作業員 根川恵 橋口真弓

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

平成20年度 平成20年度調査分の写真、遺構図面の整理作業と出土した遺物の洗浄・注記作業を行った。

平成21年度 平成21年度調査分の写真、遺構図面の整理作業を行った。

平成22年度 平成22年度調査分の写真の整理作業と出土した遺物の洗浄・注記作業を行った。また、炭化物のサンプル等を整理して放射性炭素年代測定を委託した。

平成23年度

- 4月上旬～ 遺物の接合・復元作業を進めた。石器類の選別作業を行い、石器の実測作業を開始した。
- 6月上旬 今年度の発掘調査で出土した遺物も洗浄・注記作業を行い、すべての土器類等の接合・復元作業が終了したため、報告書掲載遺物の選別作業を行った。
- 6月下旬～ 選別した報告書掲載遺物の実測・拓本等の図化作業を進めた。
- 10月下旬 黒曜石の産地同定分析を依頼した。
- 12月上旬～ 遺物実測図のトレースを行った。トレースが終了したものについては、印刷用の版下を作成した。この間に、シルバーフォト、フォトショップいなみに委託して報告書掲載遺物の写真撮影を行った。
- 1月中旬 調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。
- 1月下旬 原稿・版下等が揃ったので、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。
- 3月28日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。最後に、記録類・出土品を整理して収納した。

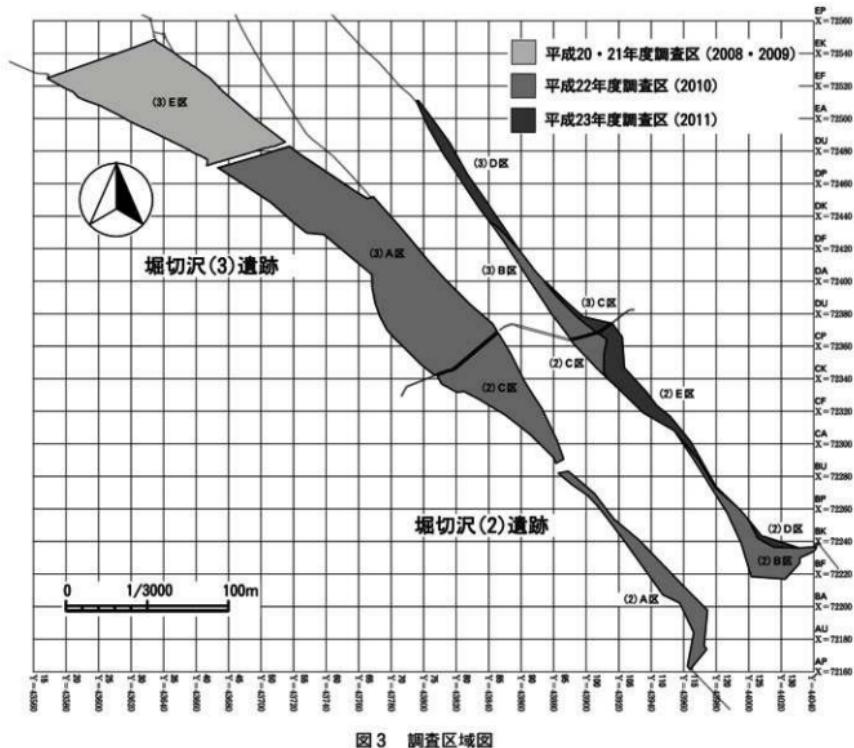


図3 調査区域図

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の地形・地質

青森県立郷土館 島口 天

遺跡周辺地域の地形・地質

堀切沢(2)および(3)遺跡がある上北郡六戸町は、青森県東部に広がる上北平野の南部中央に位置する。上北平野の地形・地質について宮内(2005)を引用・加筆して述べる。

上北平野は、南北50km、東西30kmに及ぶ縱長の長方形をした、広大な台地（更新世中・後期の段丘群）型の海岸平野であり、もともとは奥羽山脈と北上山地北端部の間にはさまれた構造性の盆状構造を埋めるように堆積した厚い新第三紀～前期更新世の地層を基盤としている（大西、1962；Chinzei、1966；北村ほか、1972）。この平野は約50万年前に隆起域に転じて、台地が広く占める海岸平野が出現した（Miyauchi、1987）。平野内の地形は、大局的には小川原湖南部に向かうように北からも南からも順次高度を下げてあり、水系網もおよそこれに従う。

平野は海成段丘群とそれらを侵食する河川沿いの河成段丘群、および沖積低地からなっている。西方にある八甲田火山群や十和田火山から連続的に供給されたテフラに厚く覆われ、広域テフラの発見や放射性年代測定により、それらの段丘群の形成年代が詳細に記されるようになった。海成段丘は6段が認められ、最高位のものから順に高位面、七百面、天狗岱面、高館面、根城面、柴山面と呼ばれている（宮内、1985、1988；桑原・山崎、2001）。地蔵平バニス(Jzd、約33万年前)に覆われる七百面は酸素同位体ステージ9（約33万年前）に、ToyaとAso-4との被覆関係より高館面は同ステージ5e（約12万年前）に、根城面は同ステージ5c（約10万年前）にそれぞれ対比されている。さらにこれらの段丘配列に従うと、天狗岱面は同ステージ7（約22万年前）に、柴山面は同ステージ5a（約8万年前）に相当する。

段丘群を覆う八甲田火山群や十和田火山から連続的に供給されたテフラは、下位から順に天狗岱火山灰層、高館火山灰層、十和田八戸火山灰層に分けられる。天狗岱火山灰層は、主によく綿まとった暗赤褐色～暗褐色の粘土化した火山灰からなり、それぞれに特徴のある粘土化した軽石層を複数挟んでいる。高館火山灰層は、主に赤褐色～黄褐色で軟質な粘土化した火山灰からなり、それぞれに特徴のある軽石層やスコリア層を複数挟み、Toya及びAso-4は本層中に挟まれる。十和田八戸火山灰層は、下位の降下火山灰と上位の火碎流堆積物からなり、降下火山灰は下から順にI～VI層の6層に区分され、I・II・III層は火山灰を、II・IV・VI層は軽石を主としている。天狗岱面は天狗岱火山灰層以上のテフラに、高館面は高館火山灰層以上のテフラに覆われている。

遺跡内の地形・地質

堀切沢(2)および(3)遺跡は、青い森鉄道の三沢駅から南南西約2kmの地点に位置し、(2)遺跡の北半部が天狗岱面上にある。遺跡の位置を記した段丘区分図を図4に示す。

図4に示した地域では、西端に七百面が分布し、その東側に天狗岱面が分布する。天狗岱面は本地域北部に分布せず、三沢市街で北方へ舌状に分布する以外は、金矢から北西方へ急激に分布域を減ら

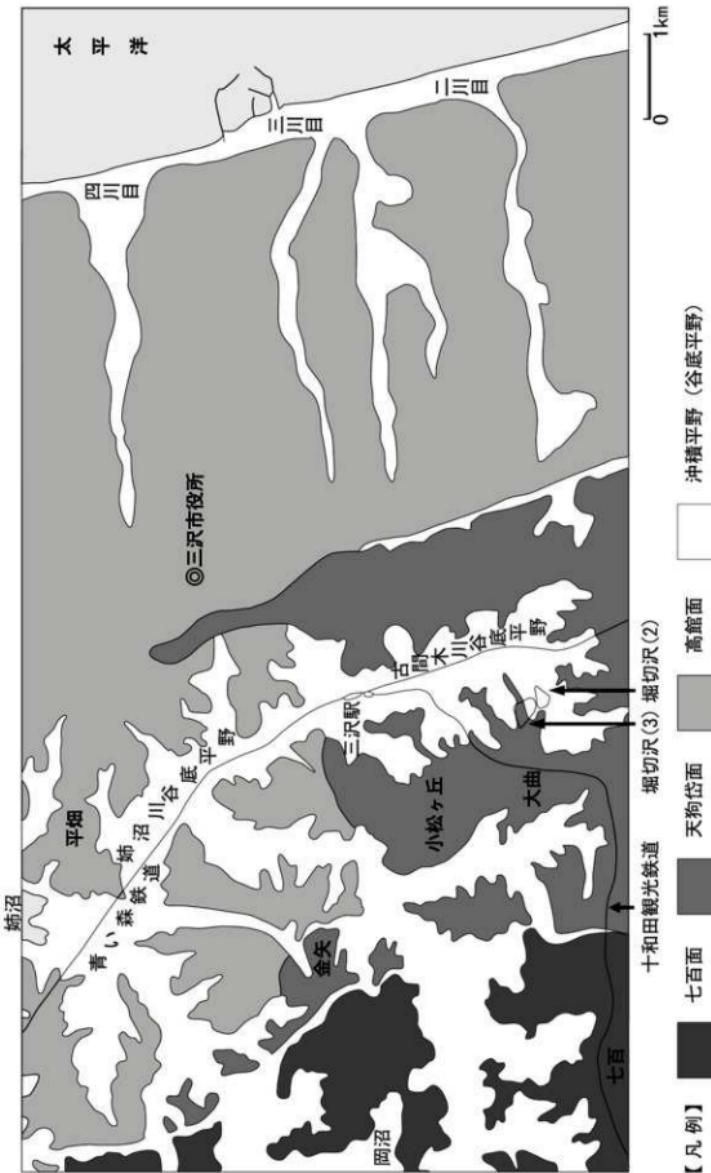


図4 三沢市周辺の段丘区分図 [宮内 (2001) を基に作成]

す。天狗岱面の東方から北方にかけて高館面が広く分布する。本地域西半部でこれらの段丘は、北端部の姉沼に向かって流れる姉沼川とその支流によって複雑に開析されており、流域には谷底平野が見られる。姉沼川谷底平野から古間木川谷底平野にかけて青い森鉄道が通っている。

堀切沢(2)および(3)遺跡は、北東へ下る小谷及び水路で分けられ、その南側が(2)遺跡、北側が(3)遺跡である。さらに小谷及び水路とほぼ直交するように第2みちのく有料道路が通っており、道路の西側がA区、東側がB区である。両遺跡ともA区及びB区で基本層序を調べ、その標高は(2)のA区が41m、(2)のB区は44~45m、(3)のA区は47m、(3)のB区は42~43mである。標高の高い(2)のB区と(3)のA区の基本層序がほぼ一致しているので、これを基準に各層について記載する。

I層：黒色土層。

II層：黒褐色土層。径0.1cm以下明黄褐色軽石がごくわずかに含まれる。

III層：黒褐色土層。径0.5cm以下明黄褐色軽石がわずかに含まれる。

IV層：V層とIII層の漸移層。

V層：黄褐色砂質土層。十和田八戸降下火山灰及び火砕流堆積物が二次堆積したもの。層厚は最大30cm。

VI層：十和田八戸火砕流堆積物。明黄褐色の砂質火山灰からなり、(3)のA区ではピンク色を帯びている。層厚は最大30cm。

VII層：十和田八戸降下火山灰のVI層。径1cm前後の軽石からなり、層厚は10cm程度。

VIII層：十和田八戸降下火山灰のV層。明黄褐色の砂質火山灰からなり、層厚は20~30cm。

IX層：十和田八戸降下火山灰のIV層。(2)のB区では径0.5~1cmの軽石を多く含む砂質火山灰からなる。(3)のA区では径0.1~0.2cmの軽石からなり、水分を多量に含む。層厚は5~6cm。

X層：十和田八戸降下火山灰のI層。(2)のB区では黄橙色の砂質火山灰からなる。(3)のA区では径0.1cm以下の軽石を含む淡黄色の粘土からなり、水分を多量に含む。層厚は10cm程度。

XI層：明褐色粘土層。径0.2~0.5cmの炭化物がわずかに含まれる。X層との境に炭化物が薄く挟まれる。本層以下の層準は高館火山灰層と考えられる。

(3)のB区ではV層までしか掘り下げていないが、その層相は上記記載と同様である。

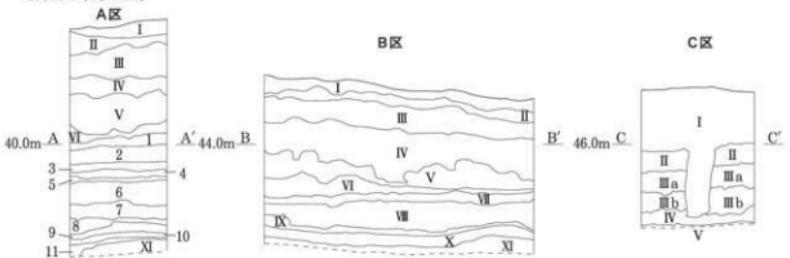
(2)のA区では、V層の下位層(層厚70cm)が軽石混じりの薄い明灰色砂層と黄褐色砂層の互層からなる水中堆積物となっており、平行葉理が発達する。このことは、この場所にV層が堆積するまで池沼が存在し、十和田八戸降下火山灰によって埋め立てられたことを意味する。さらに下位の層(層厚40cm)は黄褐色砂層が優勢となって水分を多く含むようになり、上記(3)のA区IX-X層の水分を多量に含むこととの関連性が考えられる。南側(谷側)に隣接する調査区ではこれらの層が欠落しており、V層中に蛇行する水路が形成されていた。

十和田八戸降下火山灰のII・III層が欠落しているのは、両層の層厚が他の層より小さいこと(噴火の規模が小さかった)と、分布方向が十和田湖から東側になっていることによる(松山・大池、1986)と考えられる。

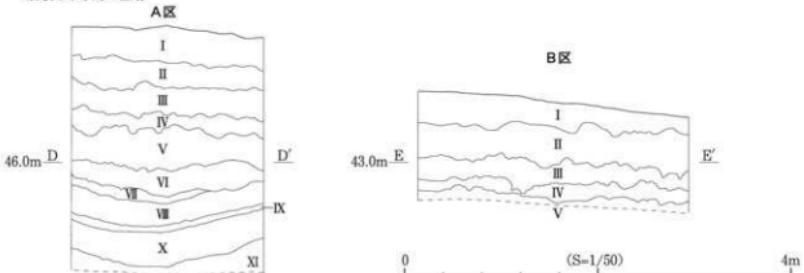
引用文献

Chinzei, K. (1966) Younger Tertiary geology of the Mabechi River Valley, Northeast Honshu,

堀切沢(2) 遺跡



堀切沢(3) 遺跡



基本層序

- | | |
|-------------------------|---|
| I層 黒色土 (10YR2/1) | 黒褐色土 (10YR2/2) 2%、暗褐色土 (10YR3/3) 1%、しまりなし、粘性あり |
| II層 黒褐色土 (10YR2/2) | 中振軽石 $\phi \sim 1\text{ mm}$ 1% |
| III層 黒褐色土 (10YR2/2) | 黒褐色土 (10YR2/3) 10%、明黄褐色軽石 (10YR6/8) $\phi \sim 1\text{ mm}$ 1% |
| IIIa層 黒色土 (10YR1/7/1) | 中振軽石 $\phi \sim 2\text{ mm}$ 2%、暗褐色土 (10YR3/4) 1%、炭化物粒 $\phi \sim 1\text{ mm}$ 1% |
| IIIb層 黒褐色土 (10YR2/3) | 明黄褐色土 (10YR6/8) 1%、中振軽石 $\phi \sim 1\text{ mm}$ 1%、しまりあり、粘性ややあり |
| IV層 黒褐色土 (10YR2/3) | 黒褐色土 (10YR2/1) 10%、中振軽石 $\phi \sim 1\text{ mm}$ 1%、黄褐色軽石 (10YR7/8) $\phi 1\sim 4\text{ mm}$ 1%、しまりややあり、粘性あり |
| V層 黃褐色砂質土 (10YR5/8) | 暗褐色土 (10YR3/4) 15%、黒褐色土 (10YR2/2) 7%、黄褐色土 (10YR5/8) 5%、 |
| | 中振軽石 $\phi 1\sim 2\text{ mm}$ 3%、黄褐色軽石 (10YR7/8) $\phi 2\sim 5\text{ mm}$ 3%・ $\phi 5\sim 10\text{ mm}$ 1% |
| VI層 明黄褐色砂質土 (10YR6/8) | 褐色土 (10YR4/6) 7%、小礫 ($\phi 1\sim 2\text{ mm}$) 5%、明黄褐色軽石 (10YR6/8) $\phi 2\sim 5\text{ mm}$ 10%、 $\phi 5\sim 10\text{ mm}$ 3% |
| VII層 明黄褐色軽石 (10YR7/6) | 明黄褐色土 (10YR5/8) 15%、黒褐色土 (10YR5/8) 3%、 |
| VIII層 明黄褐色砂質土 (10YR7/6) | 黄褐色砂質土 (10YR6/8) 15%、明黄褐色土 (10YR5/8) 3%、 |
| IX層 黄褐色砂質土 (10YR8/6) | 黄褐色軽石 (10YR7/6) 2%、にぶい黄色砂 (2.5Y6/3) 2%、黄褐色軽石 (2.5Y8/6) $\phi 1\sim 2\text{ mm}$ 2% |
| X層 黄褐色砂質土 (10YR8/6) | 軽石は $\phi 5\sim 10\text{ mm}$ 、にぶい黄褐色軽石 (10YR7/3) $\phi 10\text{ mm}\sim 10\text{ mm}$ 10%、明黄褐色軽石 (10YR7/6) $\phi 10\text{ mm}\sim 10\text{ mm}$ 10%、黄褐色軽石 (10YR5/8) $\phi 5\sim 10\text{ mm}$ 5%、明黄褐色粘質土 (10YR6/8) 3%、黄褐色粘質土 (10YR5/8) 2%、小礫 ($\phi 1\sim 2\text{ mm}$) 3% |
| XI層 明褐色粘土 (7.5YR5/6) | 明黄褐色砂質土 (10YR6/8) 15%、黄褐色土 (10YR5/8) 3%、 |
| 1層 黄褐色砂質土 (10YR6/6) | 黄褐色軽石 (10YR7/6) 2%、明黄褐色軽石 (10YR7/6) $\phi 5\sim 10\text{ mm}$ 40% |
| 2層 黄褐色砂 (2.5Y5/4) | （堀切沢(2)遺跡）黄褐色粘土 (10YR5/6) 30%、軽石 $\phi 1\sim 2\text{ mm}$ 15%、水分多量 |
| 3層 明黄褐色砂 (10YR6/6) | （堀切沢(3)遺跡）黄褐色粘土 (10YR5/6) 30%、軽石 $\phi 1\sim 2\text{ mm}$ 15%、水分多量 |
| 4層 黄褐色砂 (2.5Y5/6) | （堀切沢(2)遺跡）明黄褐色粘土 (10YR6/8) 2%、 |
| 5層 黄褐色砂質土 (10YR5/8) | （堀切沢(3)遺跡）浅黄色粘土 (2.5Y7/3) 7%、黄褐色粘土 (10YR8/6) 20%、軽石 $\phi \sim 1\text{ mm}$ 7%、水分多量 |
| 6層 黄褐色砂 (2.5Y5/4) | 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) 30%、明黄褐色砂 (10YR6/6) 10%、明黄褐色砂 (7.5YR5/8) 3%、黄褐色砂 (10YR5/8) 3% |
| 7層 明黄褐色粘質土 (10YR6/6) | 黄褐色粘質土 (10YR5/6) 5%、軽石 $\phi 1\text{ mm}$ 以下 3%、明黄褐色砂質土 (7.5YR5/8) 1%、全体的に水分子多く含む |
| 8層 明黄褐色砂 (10YR7/6) | 明黄褐色粘土 (10YR6/6) 25%水分多く含む、黄褐色砂 (2.5Y5/4) 15%、オリーブ褐色砂 (2.5Y4/4) 5%層状に堆積 |
| 9層 にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/4) | 軽石 $\phi 1\text{ mm}$ 以下 2%、水分多く含む |
| 10層 にぶい黄褐色粘土 (10YR7/4) | 灰黃褐色粘土 (10YR6/2) 30%層状に堆積 |
| 11層 にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/2) | 全体的に水分多く含む |

図5 基本層序図

- Japan. Jour. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Sec. 2, 16, p.161- 208.
- 北村 信・岩井武彦・多田元彦 (1972) 青森県の新第三系。「青森県地質図 (20万分の1) 及び同説明書」青森県、p.5- 70.
- 桑原拓一郎・山崎春雄 (2001) テフラから見た最近45万年間の恐山火山の噴火活動史、火山、46、p. 37- 52。
- 松山 力・大池昭二 (1986) 十和田火山噴出物と火山活動。十和田科学博物館、4、pp.64。
- 宮内崇裕 (1985) 上北平野の段丘と第四紀地殻変動。地理学評論、58、p.492- 515。
- Miyauchi, T. (1987) Quaternary tectonic movement of the Kamikita Coastal Plain, Northeast Japan. Geogr. Rev. Japan, 60, p.1- 19.
- 宮内崇裕 (1988) 東北日本北部における後期更新世海成面の対比と編年。地理学評論、61、p.404- 422。
- 宮内崇裕 (2001) 5万分の1図幅「三沢」・「八戸」。日本の海成段丘アトラス 日本I [北海道・東北]、東京大学出版会、CD-ROM。
- 宮内崇裕 (2005) 下北半島・上北平野- 本州太平洋岸の最北の地。日本の地形3 「東北」、東京大学出版会、p.93- 100。
- 大西 弘 (1962) 青森県東部洪積統の堆積学的研究。地質学雑誌、68、p.543- 562。

第2節 基本層序

基本層序の観察および実測は、両遺跡の各区で行っているが、層序の残りがよい堀切沢(2)遺跡A~C区および堀切沢(3)遺跡A・B区について実測図を示した。作図地点は、各遺跡の遺構配置図に記している。基本層序の記述は前節で島口氏が行っているが、調査時の所見について説明をする。

I層は黒色土主体層で、表土および耕作土を一括した。草木痕が発達し、場所によってはトレンチャーが深く及んでいる。

II層は黒褐色土主体層で、堀切沢(3)遺跡では古代の遺物を包含している。

III層は黒褐色土主体層で、中撤軽石が混入する。中撤軽石の混入率はそう高いものではない。堀切沢(2)遺跡C区・E区では中撤軽石の混入具合によってIII a層・III b層に細分される。両遺跡で縄文時代早期~前期の遺物を包含する。堀切沢(2)遺跡A区出土の縄文時代前期前葉の土器は、主に本層から出土したものである。溝状土坑は主に本層の上面で検出された。堀切沢(2)遺跡の豊穴住跡等、本層によって被覆されるものもある。本層は下部は上部と色調および混入物が異なることや、遺物の出土状況等から細分される可能性があり、平成2年度調査のIII~IV層を包括するものと思われる。

IV層は黒褐色土主体層で、暗褐色土を混入する。III層とV層との漸移層で、両遺跡で縄文時代早期~前期の遺物を包含する。堀切沢(3)遺跡B区出土の縄文時代早期中葉の土器は、主に本層から出土したものである。平成2年度調査のV層に相当すると考えられる。

V層は黄褐色砂質土主体層で、粒径の大きい軽石が混入し、草木痕と思われる黑色土が斑状に混入する。本層を遺構の最終確認面とした。平成2年度調査のVII層に相当すると考えられる。堀切沢(2)遺跡A区南西端では、本層中に地下流路が形成されていた。自然影力によるものとして図示しなかつたが、青森市宮田館遺跡で検出されたものと類似している。付近に位置する第1号・第2号溝状土坑

は、壁面に地下流路の影響を受けている。

堀切沢(2)遺跡B区南東部および堀切沢(3)遺跡E区南東～A区北東・B区中央付近は、VII層～X層が欠層していることが、堀切沢(3)遺跡の第4号土坑および第7号・第18号溝状土坑の壁面で確認された。なお、IV層・V層やV層・VI層の分層が困難な箇所もあり、それらについてはIV～V層・V～VI層として扱っている。基本層序を今回の調査区の隣接地である平成2年度調査区と比較すると、III層以下の層厚が薄い。標高が高く、より丘陵の頂部に近い位置であるため、層の発達が不充分であったと思われる。そのため、分層が難しく、結果的に層を包括してしまったものと考えられる。

堀切沢(2)遺跡E区の斜面では、II～V層が欠層し、I層直下に出土物が40cm程の厚さで堆積している。また、その下は明灰色砂層と黄褐色砂層の互層となっている。この互層中には平行葉理がみられるところから、A区同様の水中堆積物と思われ、V層が堆積するまで存在していた池沼は、堀切沢(2)遺跡の北半まで及んでいたものと推定される。

堀切沢(2)遺跡と堀切沢(3)遺跡の境は谷地となっており、堀切沢(2)遺跡E区の北端では、谷埋積層と思われる堆積が確認された。

第3節 歴史的環境

遺跡の所在する六戸町は奥入瀬川流域に位置する。六戸という地名の記述は、13世紀に成立したと考えられる 平治物語（藤原信頼の馬についての記述「馬は奥州の基衝が、六部一の馬として秘藏しけるを…」）が初見と思われる。中世には 四戸八幡宮毎年後放生会役支配注文案（正平1366年11月：南部家文書）や、糠部九ヶの部焼印図（八条房繁・永正5（1508）年：「六部印、大陸千鳥、ひあふき、くろ馬印也。きさき、八千疋のまきなり、印、有文字。」）等、近世には 委波底通夜磨（菅江真澄・江戸後期：「河にそいたるこなたかなたはみな六戸の郡なりけりとか…」）や 北奥路程記（漆戸茂樹・江戸後期「又川添の村々を六戸通と云ふ…」）・南部藩 雜書 にも記述がみられる。しかし、六戸とは現在の十和田市・三沢市・おいらせ町を含む奥入瀬川流域一帯を指す広域地名と推測されている。行政区区分としての六戸は、明治22（1889）年の市町村制の施行により犬落瀬・折茂・上吉田・下吉田・鶴喰・柳町・小平の6村と合併して成立した六戸村からであり、途中、古間木地区が大三沢町（現三沢市）に編入されたものの、昭和32（1957）年に六戸町となり、現在に続いている。

遺跡が所在する犬落瀬は、近世は犬落瀬村であり、北都でありながら三戸郡五戸通の五戸代官所支配下におかれれた村で、御仮屋もおかれていった。近代は、六戸村成立以前は第七大区五小区に属し、五小区は「内地沃壤多く、他の区に較れば歲入額なり。」と 新撰陸奥国誌（明治初頭）に記されている。県南地域としては水田耕作が盛んで、北都の中で生産量が高かったことが近世資料からも窺われる。しかし、それは犬落瀬南側の川目と呼ばれる奥入瀬川流域の沖積平野のことであり、北側に広がる丘陵地は野平と呼ばれ、木崎野牧に代表される広大な原野が広がっていた。同書には「荒原陂沢多くして山巒なし。」と記されている。遺跡周辺の大曲地区は、明治44（1911）年に福島県平野村（現福島市）から来た角田平四郎や、大正7（1918）年に山形県山辺町から来た広谷政治による山形農場の開墾が入るまで、長い間原野であったと推測される。事実、近世絵図である 九牧之図 の「五戸通木崎野」には、堀切沢の地名が記されているものの周辺には何も描かれていない。

遺跡は、六戸町役場から北東に約5.1km・青い森鉄道三沢駅から南に約2kmの上北平野の丘陵上に位置している。堀切沢(2)遺跡と堀切沢(3)遺跡は小規模な沢を挟んで隣接しており、両遺跡ともに遺跡範囲のほぼ中央を第2みちのく有料道路が縦断している。同一丘陵上には、堀切沢(3)遺跡の北西400mには堀切沢(5)遺跡が、堀切沢(2)遺跡の南東900mには堀切沢(1)遺跡が所在する。両遺跡は昭和63年度に青森県教育庁文化課（現文化財保護課）の分布調査によって周知の埋蔵文化財包蔵地として登録され、平成2年度に第2みちのく有料道路建設事業に先立って発掘調査が実施された。調査では、堀切沢(2)遺跡で溝状土坑・繩文土器・石器が、堀切沢(3)遺跡で奈良時代の竪穴住居跡・土坑・溝状土坑・繩文土器・石器・土師器が検出されている。

六戸町に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地は62ヶ所で、近年、発掘調査事例が増加している。東北新幹線建設事業、一般国道45号上北道路建設事業等の大規模開発によるもので、前者に伴うものでは通目木遺跡、坪毛沢(1)遺跡、坪毛沢(3)遺跡、柴山(1)遺跡が、後者に伴うものでは犬落瀬柳沢遺跡、根古橋遺跡の発掘調査が行われている。過去に行われた発掘調査において、繩文時代早期～前期の遺構・遺物が確認された遺跡は、堀切沢(3)遺跡、通目木遺跡、坪毛沢(3)遺跡で、奈良時代の遺構・遺物が確認された遺跡は堀切沢(3)遺跡である。その他に、折茂新田遺跡および前田遺跡出土と思われる壺・甕が六戸町立郷土館に展示されている。

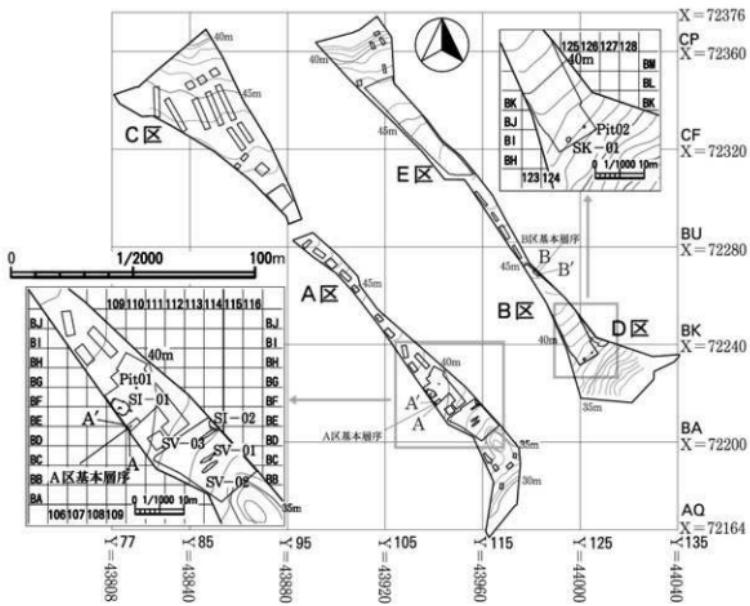


図6 堀切沢(2)遺跡遺構配置図

第3章 堀切沢(2) 遺跡

第1節 遺跡の概要

堀切沢(2) 遺跡は、平坦丘陵が古間木川に下る小支谷によって形成された小尾根の付け根部分に位置している。平成2年度には、当遺跡内で第二みちのく有料道路（以下有料道路）建設事業に伴う発掘調査が行われ、縄文時代の遺構や遺物が確認されている。

今回の調査区は、一般国道45号上北道路と六戸(1) IC（仮称）建設予定区域内および側道部で、平成21年度に一部確認調査を、平成22～23年度で本発掘調査を行った。なお、調査区は有料道路の南西・北東に有料道路を挟むように点在するため、調査年度や地形等を勘案してA～E区に分けた（図6）。A区は有料道路の南西側南半の緩斜面で、南東端が谷に面した斜面となっている。平成22年度に緩斜面地を調査し、竪穴住居跡2軒、溝状土坑3基、ピット（柱穴）1基の他、遺物包含層が検出された。B区は有料道路の北東側南半の緩斜面で、A区同様南東端が谷に面した斜面となっている。平成22年度に緩斜面地を調査し、土坑1基、ピット（柱穴）1基と遺物包含層が検出された。C区はA区・E区の北側の堀切沢(3) 遺跡に面した北向きの緩斜面で、有料道路の両側に位置している。北端は比高差3m程の斜面となり、下は埋没谷となっている。平成22・23年に調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。D区はB区の東側隣接地で、地形はB区同様である。平成23年に調査を行ったところ、遺物は数点出土したものの遺構は検出されなかった。E区はC区とB区に挟まれた有料道路の北東側北半の北西向きの緩斜面地である。平成23年に調査を行ったところ、遺構は検出されず、遺物は1点出土した。

調査は人力によるトレーニング掘りを先行して行い、遺構・遺物が確認された箇所については周辺を拡張していく手法で行った。調査区の現況は、E区が畠地である以外は山林であった。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡2軒、土坑1基、溝状土坑3基、柱穴2基、遺物包含層が検出されたが、検出遺構数が少ないため、地区ごとではなく一括して報告する。

第2節 検出された遺構と遺物

1 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡(SI-01) (図7～9)

[位置] A区ほぼ中央のB E・B F-109・110グリッドに位置する。IV層上面で検出されたが、V層まで下げて精査を行った。調査区縁辺に位置するため、南西端は調査区外となる。

[堆積土] 3層に区分できた。黒～褐色主体で中間軽石が混入する。ローム等がブロック状に混入しないことや、レンズ状の堆積状況であることから自然堆積と推測される。また、本遺構はIII層に被覆されている。

[規模] 平面形は概ね隅丸長方形で、規模は開口部で長軸390cm×短軸258cm、床面で長軸353cm×短軸242cm、床面での主軸方位はN-32°-Eである。調査された範囲での床面積は14.2m²である。

[重複] なし。

[構造] 壁は床面からやや外傾しながら立ち上がり、逆台形状の断面形状をしている。土層断面の観

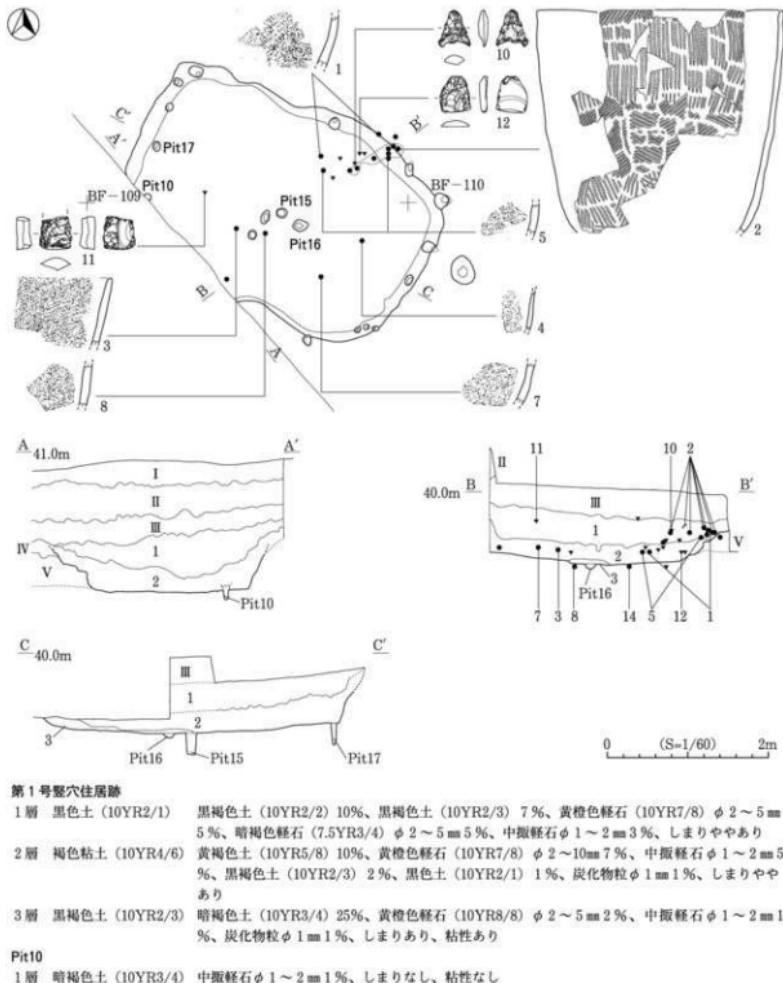
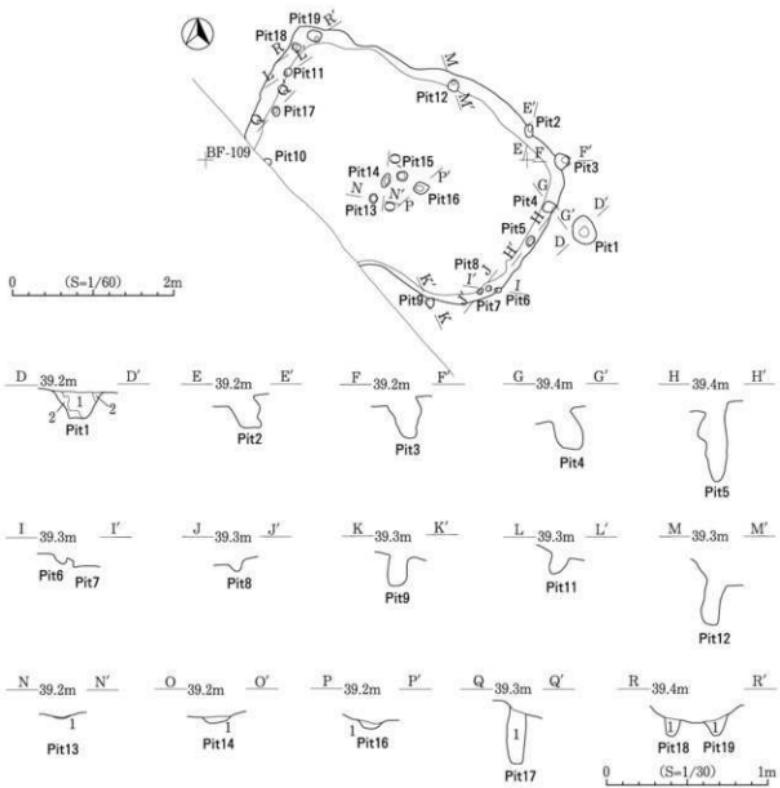


図7 第1号竪穴住居跡(1)



- Pit 1**
 1層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土 (10YR5/6) 15%、黄橙色輕石 (10YR7/8) ϕ 5~15mm 3%、粘性ややあり、しまりあり
 2層 褐色土 (10YR4/6) 暗褐色土 (10YR3/3) 5%、黄橙色輕石 (10YR8/6) ϕ 3~4mm 2%、粘性なし、しまりあり
- Pit 13**
 1層 褐色土 (10YR4/4) 暗褐色土 (10YR3/3) 30%、中振輕石 ϕ 1~3mm 混入、しまりややあり、粘性なし
- Pit 14**
 1層 褐色土 (10YR4/4) 暗褐色土 (10YR3/3) 30%、中振輕石 ϕ 1~2mm 混入、明黄褐色輕石 (10YR6/8) 10%、しまりなし、粘性なし
- Pit 16**
 1層 暗褐色土 (10YR3/4) 暗褐色土 (10YR3/3) 25%、中振輕石 ϕ 1~3mm 混入、炭化物 ϕ 1~2mm 1%、しまりあり、粘性なし
- Pit 17**
 1層 暗褐色土 (10YR3/3) 中振輕石 ϕ 1~2mm 混入、しまりややあり、粘性なし
- Pit 18**
 1層 褐色土 (10YR4/6) 暗褐色土 (10YR3/3) 25%、中振輕石 ϕ 1~5mm 混入、炭化物 ϕ 1~2mm 1%、しまりあり、粘性なし
- Pit 19**
 1層 褐色土 (10YR4/4) 中振輕石 ϕ 1~5mm 混入、しまりあり、粘性なし

図8 第1号竪穴住居跡(2)

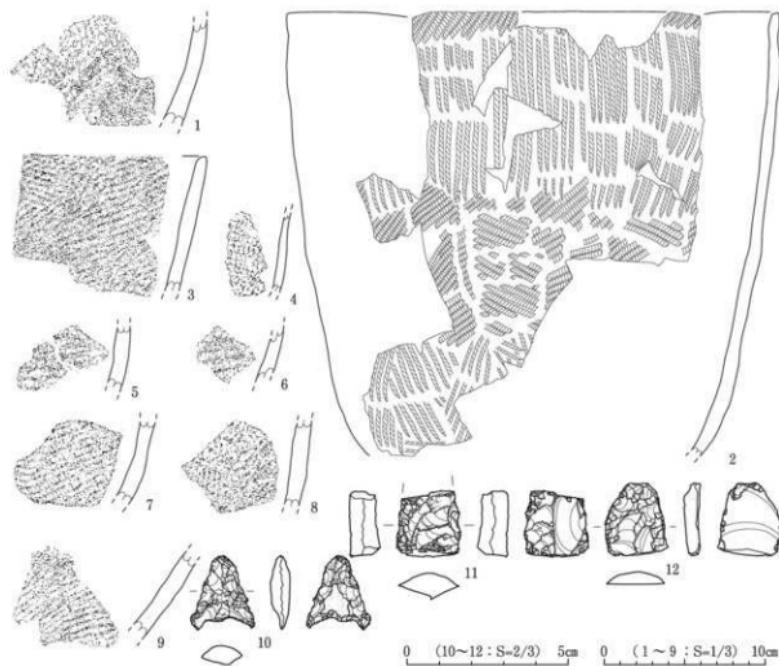


図9 第1号竪穴住居跡(3)

察からは、IV層上面を掘込んで構築していたものと推定される。確認面からの深さは55cmである。IV・V層を壁面としている。

床はほぼ平坦で、硬化した箇所は認められなかった。V層を床面としている。

ピットは竪穴内から18基・竪穴外から1基検出された。竪穴内では、中央部にピット13~16が、壁直下及びその周辺にピット2~12・17~19が位置している。各ピットでは柱痕を検出できなかった。柱穴規模は径10~20cm程度で、深さは2.5~49cmである。

[炉] 検出されなかった。

[出土遺物] 堆積土の1~2層中から縄文時代早期未葉~前期前葉の土器19点(接合前・486.5g)と石器7点(11.4g)が出土し、うち土器9点(接合後点数)・石器3点を図示した。土器の時期は、1が早期未葉のほかは前期前葉である。2の土器は、北西壁のやや南東よりの箇所からまとまって出土していることから、廃棄されたものと考えられる。また、第2号竪穴住居跡出土遺物と遺構間接合をしている。石器は石鏃(10)・石槍(11)・スクレイバー(12)とチップ4点が出土した。石槍は黒曜石製である。

[分析] 3層から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、暦年代範囲は4684~4632cal BCおよび4623~4501cal BCの結果が得られた(第5章第1節参照)。また、11の石槍について、黒曜石の

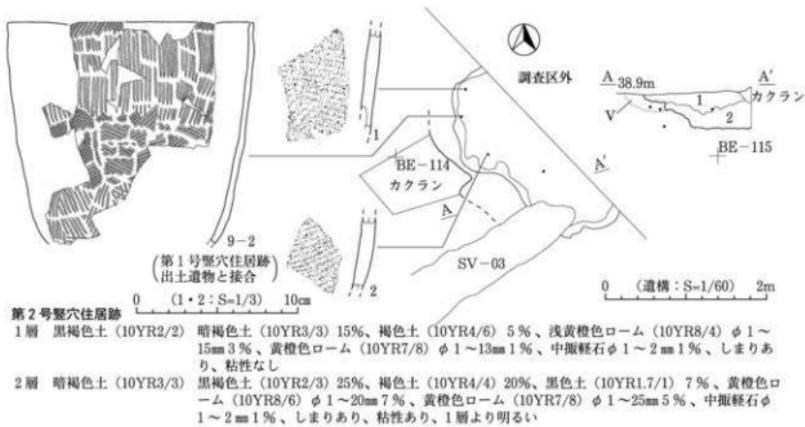


図10 第2号竪穴住居跡

産地同定分析を行ったところ、北海道置戸エリアの所山群産と推定された（第5章第2節参照）。

【小結】埋没過程の段階で縄文時代前期前葉の土器が廃棄されたと考えられることや、炭素年代測定の結果から、縄文時代前期前葉以前に廃絶・埋没した竪穴住居跡と推測される。

第2号竪穴住居跡 (SI-02) (図10)

【位置】A区南方のB D・B E—114グリッドに位置する。V層上面で確認した。調査区縁辺に位置するため、北東半は調査区外となる。同じA区内の約17m北西に第1号竪穴住居跡が位置していることや、後述のように、遺物が第1号竪穴住居跡出土土器と遺構間接合していることから、竪穴住居跡とした。

【堆積土】2層に分層された。黒褐・暗褐色土主体で、褐色土・ローム・中振軽石が混入する。

【規模】平面形は不整楕円形と推測される。計測された範囲での規模は、床面で長軸244cm×短軸69cm、床面での主軸方位はN-47°-Wである。調査された範囲での床面積は約3.1m²である。確認面からの深さは40cmである。

【重複】第3号溝状土坑と重複し、本遺構の方が古い。

【構造】壁は床面から強く外反しながら立ち上がるが、上半の立ち上がりは不明瞭であった。皿状の断面形状と推測される。床面に凹凸がみられるが、木根痕によるものと思われる。柱穴・土坑等は検出されなかった。

【炉】認められなかった。

【出土遺物】堆積土の1~2層中から縄文時代前期前葉の土器4点(67.8g)が出土し、3点を図示した。時期は全て前期前葉である。うち、1点は第1号竪穴住居跡出土土器と遺構間接合したものである。

【小結】堆積土中に混入した土器の年代から、縄文時代前期前葉以前に廃絶・埋没した竪穴住居跡と推測される。

2 土坑

土坑はB区から1基検出された。

第1号土坑 (SK-01) (図11)

[位置] B区南方のB I-125グリッドに位置する。IV層上面で確認した。

[堆積土] 3層に分層できた。黒～黒褐色土主体で、褐色土、中撒軽石が混入する。

[規模] 平面形は不整円形で、規模は開口部で長軸106cm×短軸76cm、底面で長軸96cm×短軸70cm、底面での主軸方位はN-42°-Eである。確認面からの深さは27cmである。

[重複] なし。

[構造] 壁は底面から内湾しながら立ち上がり、半円状の断面形状をしている。底面には凹凸がみられるが、草木痕の影響を受けているものと推測される。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 時期を特定できるような遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

3 溝状土坑

溝状土坑はA区南側から3基検出された。第1号と第2号は1m、第1号と第3号は3m離れて位置し、等高線と並行に配置されている。

第1号溝状土坑 (SV-01) (図12)

[位置] A区南側のB C-113・114グリッドに位置する。V層上面で確認した。

[堆積土] 2層に分層し、更に1層を1a層～1e層に細分した。1a層～1d層は黒褐色土、1e層は暗褐色土・2層は黄褐色土主体で、自然堆積と思われる。

[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で375cm×推定59cm、底面で353cm×13cmで、確認面からの深さは100cmである。底面での主軸方位はN-57°-Eである。

[重複] なし。

[構造] 断面形状は、横断面は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中位から外側に開くY字状で、縦断面は北側が直線的に直立する箱状・南側が外側に張り出す袋状である。底面は起伏が激しい。

[出土遺物] 堆積土中から縄文時代前期前葉の土器が2点(11.5g)出土し、うち1点を図示した。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第2号溝状土坑 (SV-02) (図12)

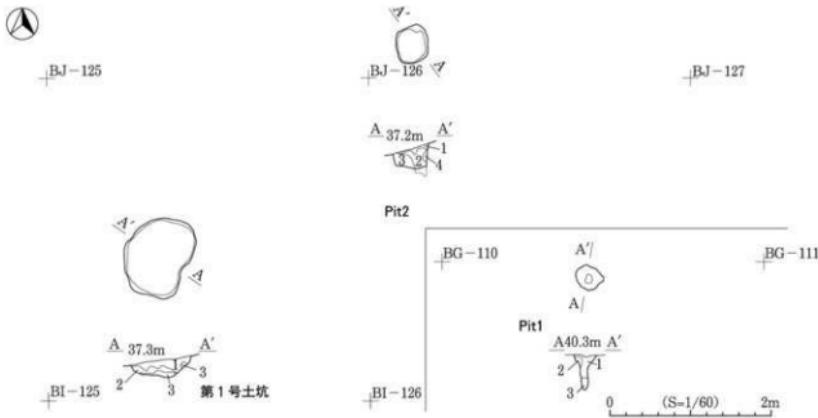
[位置] A区南側のB B-113・114およびB C-114グリッドに位置する。V層上面で確認した。

[堆積土] 3層に分層し、更に1層を1a層～1e層、3層を3a層・3b層に細分した。1～2層は黒褐～暗褐色土、3層は暗褐～黄褐色土主体で、自然堆積と思われる。

[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で380cm×70cm、底面で380cm×14cmで、確認面からの深さは106cmである。底面での主軸方位はN-55°-Eである。

[重複] なし。

[構造] 断面形状は、横断面は底面から外傾し、中位から内湾して立ち上がるY字状で、縦断面は両端が外側に張り出す袋状である。底面は起伏が激しい。



第1号土坑

1層 黒色土 (10YR1.7/1)	黒褐色土 (10YR2/2) 20%、黄橙色輕石 (10YR7/8) 1%、中振輕石 ϕ 1mm以下 1%、しまりあり、粘性なし
2層 黒褐色土 (10YR2/2)	暗褐色土 (10YR3/4) 15%、褐色土 (10YR4/6) 7%、中振輕石 ϕ 1mm以下 1%、しまりなし、粘性なし
3層 黒褐色土 (10YR2/3)	褐色土 (10YR4/6) 20%、中振輕石 ϕ 2mm以下 1%、しまりなし、粘性なし
Pit1	
1層 黒色土 (10YR2/1)	褐色土 (10YR4/6) 1%、中振輕石 ϕ 1~2mm 1%、しまりなし、粘性やあり
2層 黒褐色土 (10YR2/2)	褐色土 (10YR2/1) 35%、暗褐色土 (10YR3/3) 5%、中振輕石 ϕ 1~2mm 1%、しまりあり、粘性なし
3層 黄褐色土 (10YR5/6)	明黃褐色土 (10YR6/8) 30%、明赤褐色土 (5YR5/8) 3%、しまりあり、粘性なし
Pit2	
1層 黒褐色土 (10YR2/3)	暗褐色土 (10YR3/4) 35%、明黃褐色輕石 (10YR6/8) ϕ 1~3mm 1%、中振輕石 ϕ 1mm以下 1%、しまりなし、粘性なし
2層 暗褐色土 (10YR3/4)	褐色土 (10YR4/4) 15%、中振輕石 ϕ 1mm以下 2%、しまりなし、粘性なし
3層 褐色土 (10YR4/6)	黒褐色土 (10YR3/2) 20%、黄褐色輕石 (10YR5/8) ϕ ~20mm 7%、中振輕石 ϕ 1mm以下 1%、しまりあり、粘性なし
4層 黒色土 (10YR2/1)	暗褐色土 (10YR3/3) 30%、中振輕石 ϕ 1mm以下 2%

図11 土坑・ピット(柱穴)

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第3号溝状土坑 (SV-03) (図12)

[位置] A区南側のB D-113・114 グリッドに位置する。V層で確認した。上部は擾乱を受けている。

[堆積土] 4層に分層できた。黒~黒褐色土主体で、ロームが混入する。自然堆積と思われる。

[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で推定387cm×63cm、底面で344cm×38cmで、確認面からの深さは136cmである。底面での主軸方位はN-56°-Eである。

[重複] 第2号竪穴住居跡と重複しており、本遺構が新しい。

[出土遺物] 堆積土中から縄文時代前期前葉の土器が2点 (105.7g) 出土し、うち1点を図示した。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

4 ピット(柱穴)

ピットはA区中央で1基、B区南方で1基の計2基が確認された。壁の立ち上がりや底面は不明瞭である。

第1号ピット(Pit-01)(図11)

[位置] A区中央のB F - 110グリッドに位置する。V層で確認した。

[堆積土] 3層に分層できた。1層は黒色土、2層は黒褐色土、3層は黄褐色土主体である。3層は掘りすぎの可能性もある。

[規模] 平面形は不整円形で、規模は開口部で35×28cm、確認面からの深さは44cmである。壁は、底面からほぼ直立し、中位から外反して立ち上がるY字状の断面形状をしている。

[重複] なし。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第2号ピット(Pit-02)(図11)

[位置] B区南方のB J - 126グリッドに位置する。V層で確認した。

[堆積土] 4層に分層できた。黒～黒褐～暗褐～褐色土主体である。

[規模] 平面形はほぼ円形で、規模は開口部で51×43cm、確認面からの深さは31cmである。壁は底面から外反して立ち上がり、箱状の断面形状をしている。

[重複] 認められなかった。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第3節 遺構外出土遺物

本遺跡からは縄文時代の土器と石器が出土した。A区では縄文時代前期前葉の土器、B区からは縄文時代早期末葉の土器を主体に出土している。

1 縄文土器(図13～15)

土器は総量で296点(接合前・4846.7g)出土し、うち50点(接合後点数)を図示した。

縄文時代早期中葉以前の土器(図14-1)

胴部片が1点出土した。外面に貝殻条痕が施されるもので、器壁は厚く、胎土に纖維が混入している。焼成は良好で、色調は明るい。胴部小片であり型式は不明である。

縄文時代早期末葉の土器(図14-2～5)

13点出土し、うち4点を図示した。B区のIII～IV層から出土したものである。器壁は厚く、胎土に纖維を混入している。焼成はやや軟質である。器面には単軸絡状体第1類を施している。早稻田5類に比定されるものと思われる。第1号竪穴住居跡出土の図9-1も同様である。

縄文時代前期前葉の土器(図14-6～図15-45)

本遺跡の主体を占める土器である。A区のIII～IV層から出土したもので、多くはIII層から出土した。6・7は口縁から胴部、8～18は口縁部、19～38は胴部、39～45は底部片である。

平口縁で丸底の深鉢形で、器壁は薄く、胎土に纖維を混入している。焼成は良好であるが色調はやや暗めである。口唇は範状の工具で平坦に整えられている。底部には乳房状突起を持つものもある。



図12 溝状土坑・出土遺物

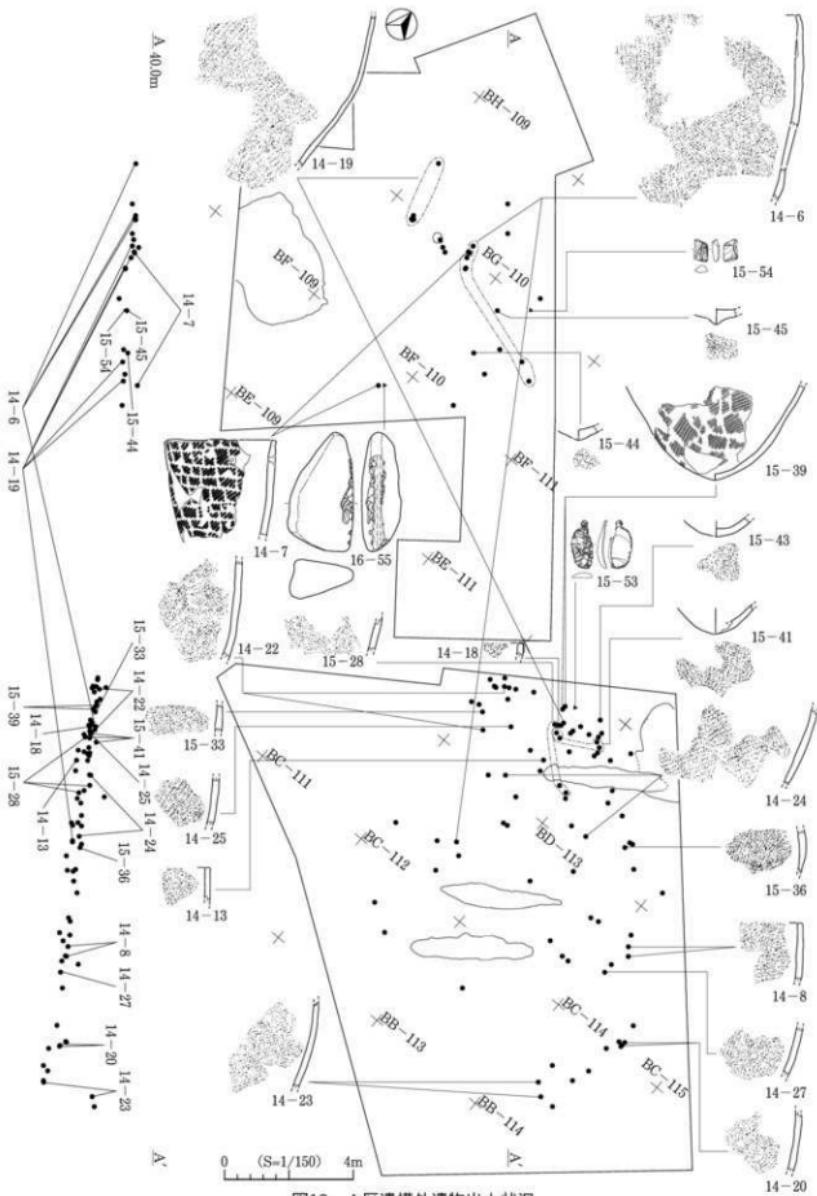




図14 遺構外出土遺物(1)



図15 遺構外出土遺物(2)

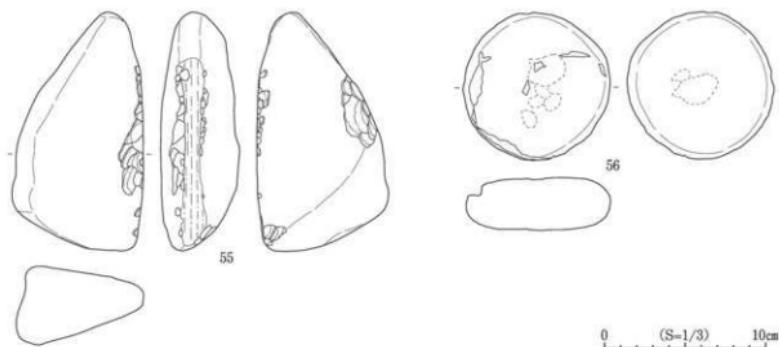


図16 遺構外出土遺物(3)

器面には単節や複節の繩文を施すほか、口縁部や胴部に単軸絡状体第1類を縦位に施し、帯状の文様帯を形成するものもある。補修孔を持つものもある。近年類例が増加している早稻田6類c類に近似した土器に比定されるものと思われる。第1号竪穴住居跡出土の図9-2~9および第1号・第3号溝状土坑出土の土器も同様である。

繩文時代前期中葉以降の土器(図15-50)

底部片が1点出土した。平底で、器壁は厚く纖維を混入している。焼成は良好で色調は明るい。器面には単節の繩文が施されている。円筒下層式の範疇に收まるものと思われる。

時期不明の土器(図15-46~49)

46~48は同一個体と考えられる。46は口縁部、47・48は胴部片である。口縁部を無文帯とし、胴部には単節の繩文が斜行に施される。49は無文の口縁部片である。

2 石器(図15-51~図16-56)

石器は11点(1062.5g)出土し、うち6点を図示した。

51は石錐である。52・53は石匙である。52は横型で、摘みの箇所は中央である。53は縦型で、端部は円く整えられている。54はスクレイバーで、片面の一側縁に調整剥離を施したものである。55は磨石で、長軸側縁部を使用面とし、断面が三角形状のものである。56は敲石で、扁平な礫の表裏面を使用面としている。

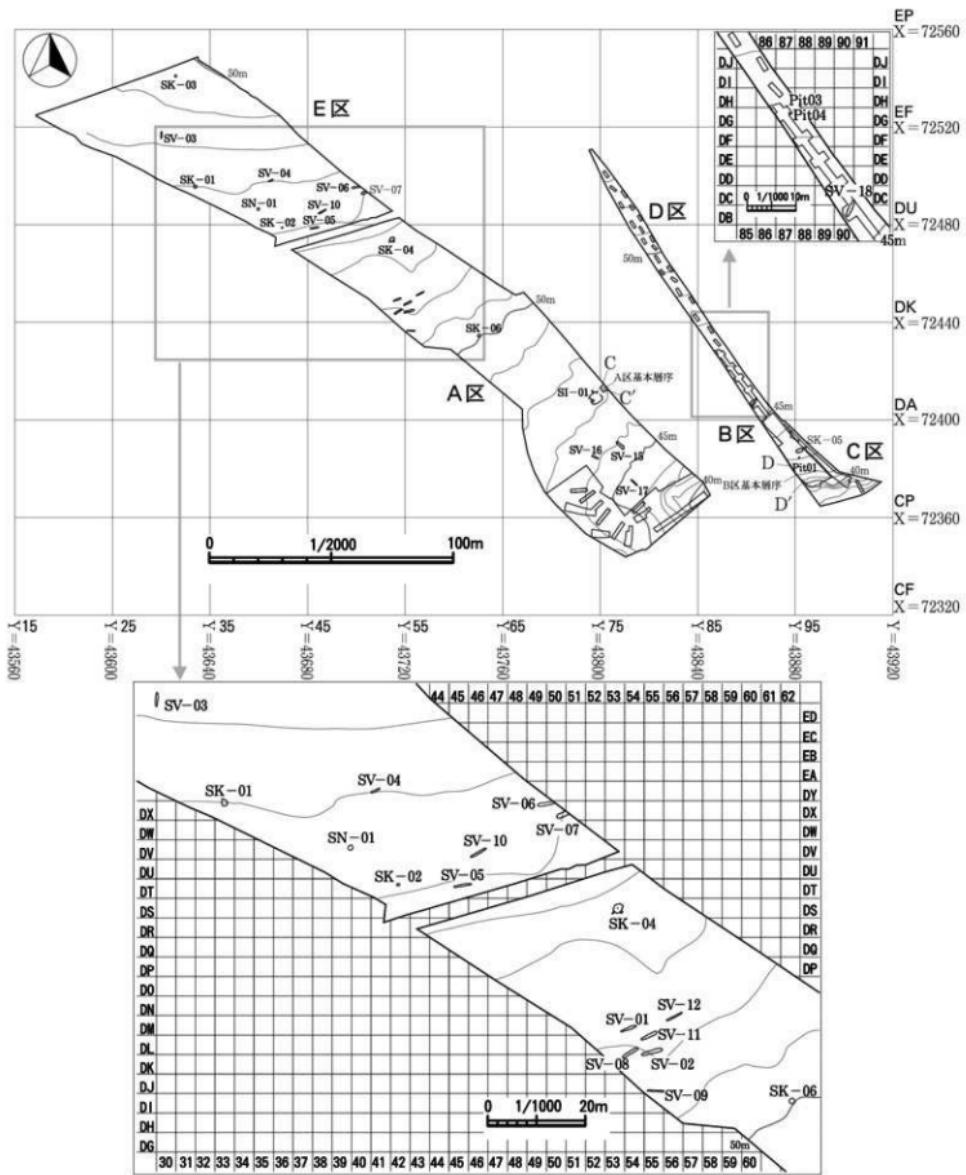


図17 堀切沢(3) 遺跡遺構配置図

第4章 堀切沢(3) 遺跡

第1節 遺跡の概要

堀切沢(3) 遺跡は、小規模な沢を挟んで堀切沢(2) 遺跡の北側に位置し、平坦丘陵が古間木川に下る小支谷によって形成された小尾根の付け根部分に位置している。平成2年度には、当遺跡内で第二みちのく有料道路（以下、有料道路）建設事業に伴う発掘調査が行われ、奈良時代の竪穴住居跡や绳文時代の遺構や遺物が確認されている。

今回の調査区は、堀切沢(2) 遺跡同様、一般国道45号上北道路と六戸(1) IC（仮称）建設予定区域内および側道部で、平成20年度に一部確認調査を、平成21～23年度で本発掘調査を行った。なお、調査区は有料道路の南西・北東に有料道路を挟むように点在するため、調査年度や地形等を勘案してA～E区に分けた（図17）。A区は農道を挟み北にE区、小谷を挟み南に堀切沢(2) 遺跡に囲まれた範囲で、地形は調査区中央が馬の背状に高く、南北に向かって傾斜している。北半はトレンチャーが顕著に残る。平成21～22年度に調査を行い、竪穴住居跡1軒、土坑2基、溝状土坑9基が検出された。B区は有料道路の北東側南半に位置する南東向きの緩斜面地で、南端は比高差3m程の斜面となっている。平成22年度に調査を行い、土坑1基、溝状土坑1基、ピット（柱穴）3基が検出された。C区はB区の東側隣接地で、地形はB区と同様である。平成23年に調査を行ったところ、遺物は数点出土したものの遺構は検出されなかった。D区はB区の北側隣接地で、南東向きの緩斜面地である。平成23年に調査を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。E区は調査区北西端で、北側は土取りによる崖になっている。南東向きの緩斜面地で、全体にトレンチャーが顕著に残る。平成20年度に確認調査を行い、その結果を受け平成21年度に発掘調査した。土坑3基、溝状土坑6基、焼土遺構1基が検出された。

調査は人力によるトレンチ掘りを先行して行い、遺構・遺物が確認された箇所については周辺を拡張していく手法で行った。調査区の現況は、A区北半とD区の一部およびE区が畑地で、それ以外は山林であった。

調査の結果、奈良時代の竪穴住居跡1軒、土坑6基、溝状土坑16基、焼土遺構1基、ピット（柱穴）3基、遺物包含層が検出されたが、検出遺構数が少ないため、地区ごとでなく一括して報告する。

第2節 検出された遺構と遺物

1 竪穴住居跡

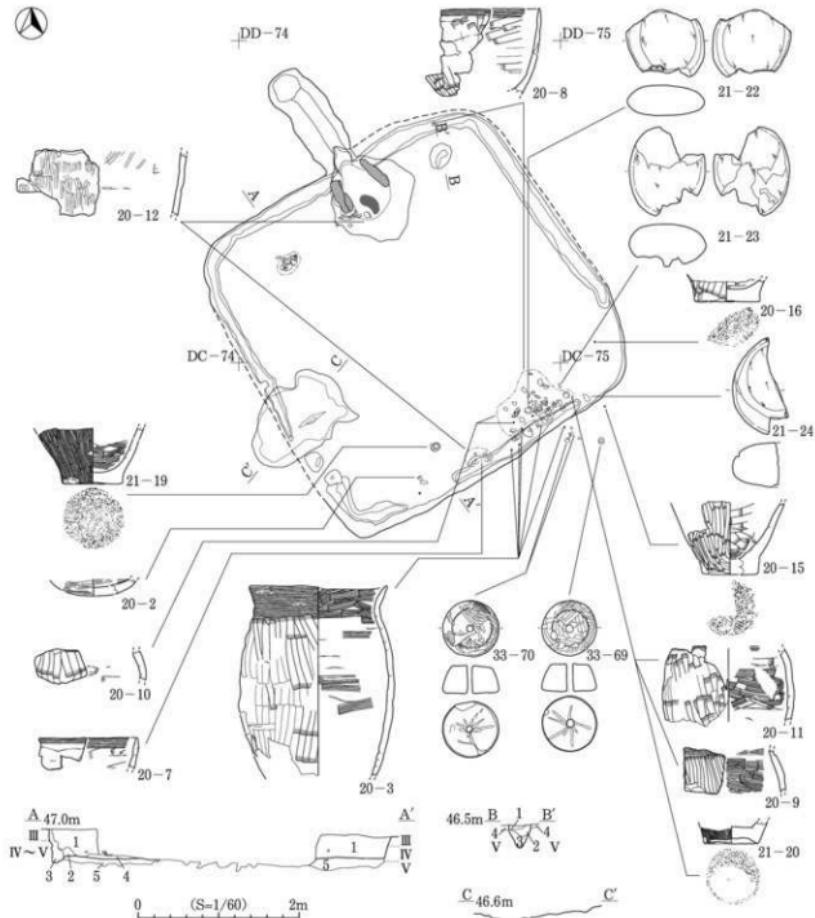
第1号住居跡 (SI-01) (図18～21)

[位置] A区の中央南東寄りのDB・DC-73～75グリッドに位置する。確認調査によって検出された。III層上面で確認された。

[堆積土] 5層に分層した。黒～黒褐色土主体で、褐～黄褐色土が混入している。5層は掘り方埋土である。

[規模] 平面は隅丸方形で、規模は一辺約430cmである。確認面からの深さは39cmである。

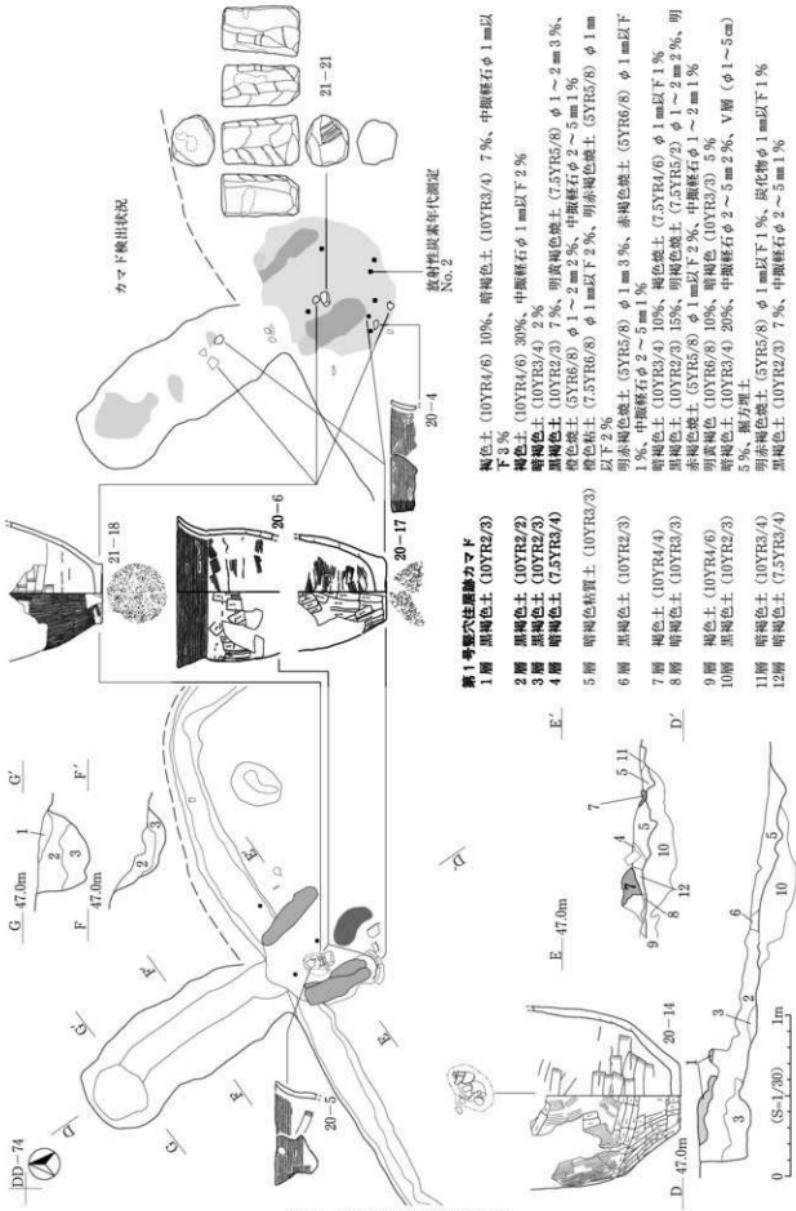
[重複] なし。



第1号竪穴住居跡

- 1層 黒色土 (10YR1.7/1) 黄褐色土 (10YR5/6) 10%、にぶい黄橙色輕石 (10YR6/4) ϕ 1~5mm、中振輕石 ϕ 1~2mm 2%混入、しまりなし、粘性なし
- 2層 黒色土 (10YR2/1) 中振輕石 ϕ 1~3mm 1%混入、しまりあり、粘性なし
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2) 褐色土 (10YR4/6) 15%、中振輕石 ϕ 1~10mm 2%混入、しまりなし、粘性なし
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土 (10YR5/8) 15%、中振輕石 ϕ 1~3mm 2%混入、しまりあり、粘性あり
- 5層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土 (10YR5/8) 2%、中振輕石 ϕ 1~3mm 2%、しまりあり、粘性小、掘方理土
- Pit 01
- 1層 黑褐色土 (10YR2/2) 橙色燒土 (5YR6/8) ϕ 1mm以下 2%、中振輕石 ϕ 1mm以下 1%
- 2層 黑褐色土 (10YR2/3) 暗褐色土 (10YR3/4) 10%、中振輕石 ϕ 1mm以下 2%
- 3層 黑色土 (10YR2/1) 暗褐色土 (10YR3/8) 7%
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土 (10YR5/8) 2%、中振輕石 ϕ 1~3mm 2%、しまりあり、粘性小、掘方理土

図18 第1号竪穴住居跡(1)



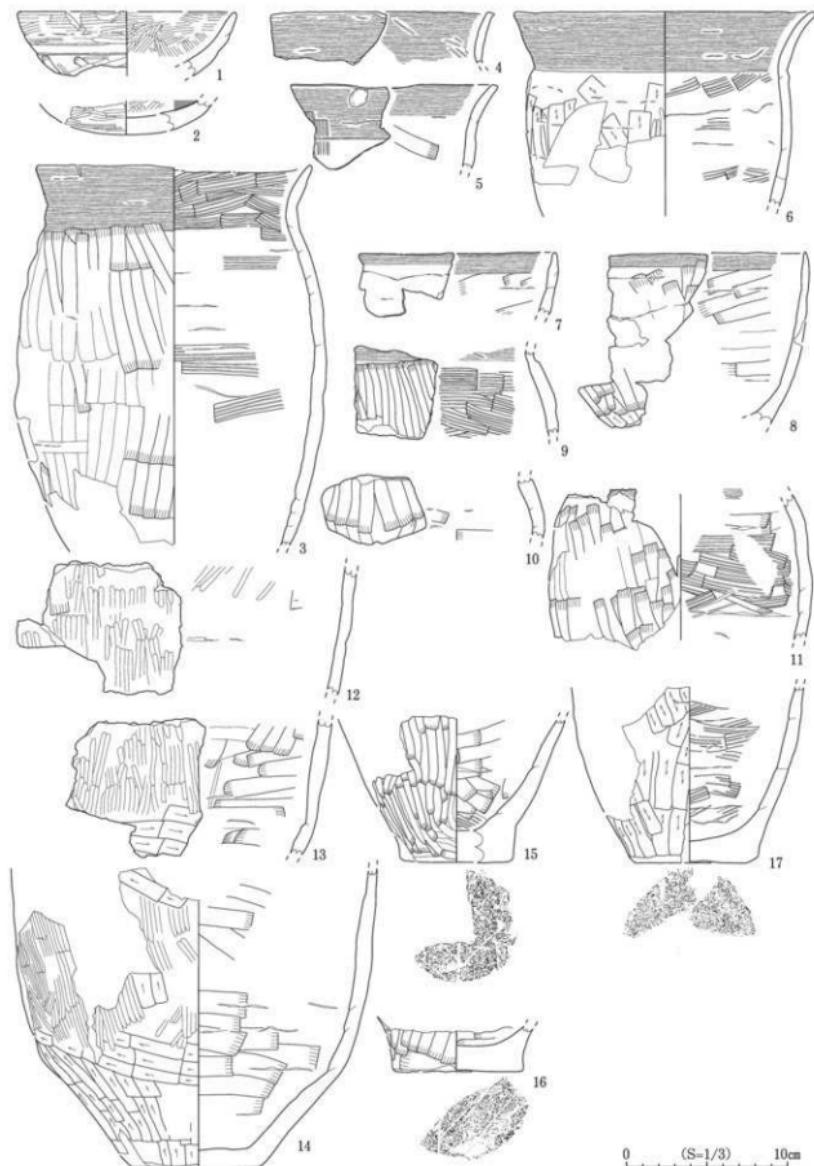


図20 第1号竪穴住居跡(3)

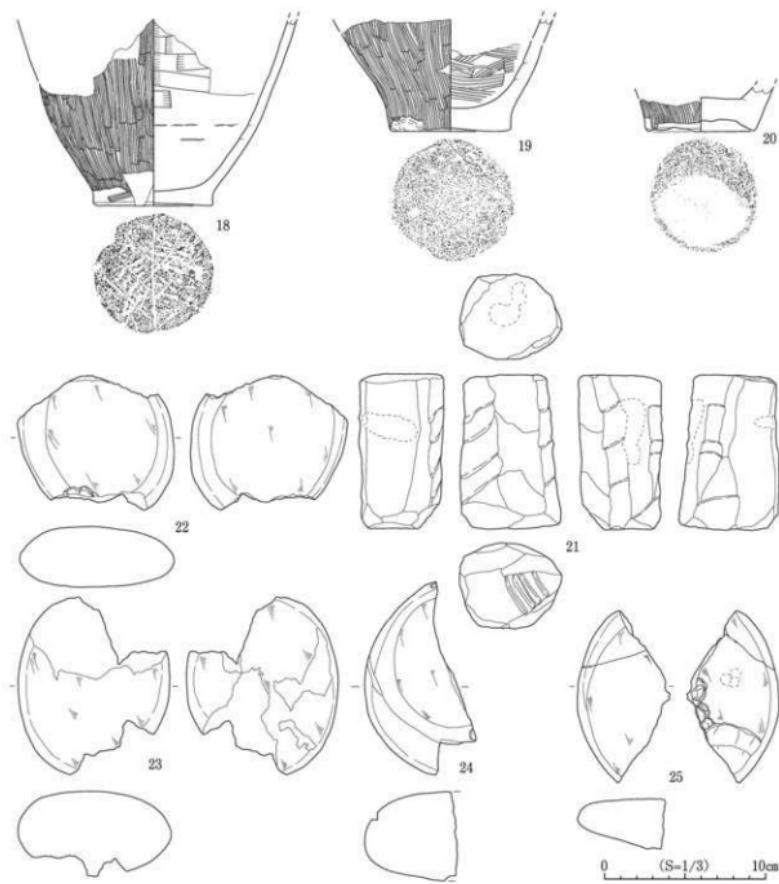


図21 第1号竪穴住居跡(4)

【構造】壁は直線的に立ち上がる。床は全面貼床で、IV～V層に由来すると思われる土と黒色土が斑状に混じった状態であった。カマド周辺の床は固くしまっていた。柱穴は北東隅から1基、南西隅付近から2基確認された。壁溝は途切れながら壁に沿って巡る。貼床下から土坑がカマドおよび南西隅で確認された。不整円形で浅い。

【カマド】カマドは北壁の中央に造られている。煙道部は燃焼面より煙出しに向かってなだらかに上がっていく。煙出し部分は円形に少し深くなっている。煙道部の堆積土中には、天井部の崩落土と思われる褐色土や粘土が混入していることから、半地下式と推測される。硬化や赤化が明確ではなかったものの、焼土粒が他の部分よりも多い箇所を火床面と判断し、その範囲を図化した。燃焼部奥には石製の支脚が火床面よりも高いレベルから確認されていることから、支脚はカマドの廃棄によってこの場所におかれたものと推測される。袖は、甕を芯材とし、更に甕の中には砂岩をブロック状に切り出したものが入れられていた。

【出土遺物】カマドと南壁周辺から土器と石器が出土している。土器は53点（接合前・890.7g）出土し、うち、20点（接合後点数）を図示した。1・2は壊である。外面をミガキ調整されている。1は被熱によって、本来施されていた内面の黒色処理が消失してしまったものと考えられる。胴部に沈線が形成されている。2は丸底の底部である。3～20は甕である。外面調整は、3・8～11・15・16はナデ、6・17はケズリ、18～19はハケメが卓越している。12～14は同一個体で、胴部下半で屈曲する器形である。外面調整は、下半にはケズリが、上半にはミガキが施されている。

石器は13点（1650.3g）出土し、うち、5点を図示した。21は軽石で、カマド支脚である。22～25は磨石で、扁平な円盤の表面を磨り面としている。

【分析】カマドから出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、暦年代範囲は575～650cal ADの結果が得られた（第5章第1節参照）。しかし、試料には最外年輪は含まれていないため、古木効果の影響で古い年代が算出された可能性がある。

【小結】炭素年代測定結果からは6世紀後半から7世紀中頃の年代が得られたが、出土遺物の特徴から、8世紀中葉から後葉の年代が考えられる。

2 土坑

第1号土坑（08SK-01）（図22）

【位置】E区西端中央のD-X-33グリッドに位置する。V層で確認された。立ち上がり部分はトレンチャーにより削平されている。

【堆積土】黒色土主体で、2層に分層した。ともに黄褐色土や明黄褐色土が混入しているが、2層は褐色土がブロック状に混入しているため、壁の崩落土と自然堆積土が混合しているものと考えられる。

【規模】平面形は、開口部は北西部が突出した不整円形状で、規模は開口部で164×114cm、底面で91×75cmで、確認面からの深さは59cmである。開口部の主軸方位はN-33°-Wである。

【重複】なし。

【構造】壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をしている。底面はほぼ平坦である。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

第2号土坑(09SK-02)(図22)

[位置] E区西端南方のD T-42グリッドに位置する。V層で確認された。立ち上がり部分はトレンドマーにより削平されている。

[堆積土] 2層に分層した。1層は灰黄褐色、2層は黄褐色主体で、ともにロームとの混合層である。

[規模] 平面形は橢円形で、規模は開口部で63×43cm、底面で49×16cmで、確認面からの深さは11cmである。底面での主軸方位はN-85°-Eである。

[重複] なし。

[構造] 壁は底面から内湾して立ち上がり、断面形状は皿状である。底面は一部深く落ち込む箇所がある。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第3号土坑(09SK-03)(図22)

[位置・確認] E区北端東方のE K-31グリッドに位置する。III層で確認された。

[堆積土] 4層に分層した。黒～黒褐色土主体であるが、4層にはぶい黄橙色砂と混合しており、掘方埋土の可能性がある。

[規模] 平面形は円形で、規模は開口部で94×89cm、底面で78×72cm、確認面からの深さは36cmである。

[重複] なし。

[構造] 壁は底面からやや内湾気味に立ち上がり、半円状の断面形状をしている。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第4号土坑(09SK-04・10SK-01)(図22)

[位置] A区北端のD S-53グリッドに位置する。V層で確認された。21年度に検出し、22年度に精査を行った。

[堆積土] 3層に分層した。1・2層は黒～黒褐色土主体で、軽石が混入している。3層は黄褐色土主体で、崩落土が堆積したものと考えられる。

[規模] 平面形は不整橢円形で、規模は開口部で222×168cm、底面で159×68cmで、確認面からの深さは131cmである。底面での主軸方位はN-68°-Eである。

[重複] なし。

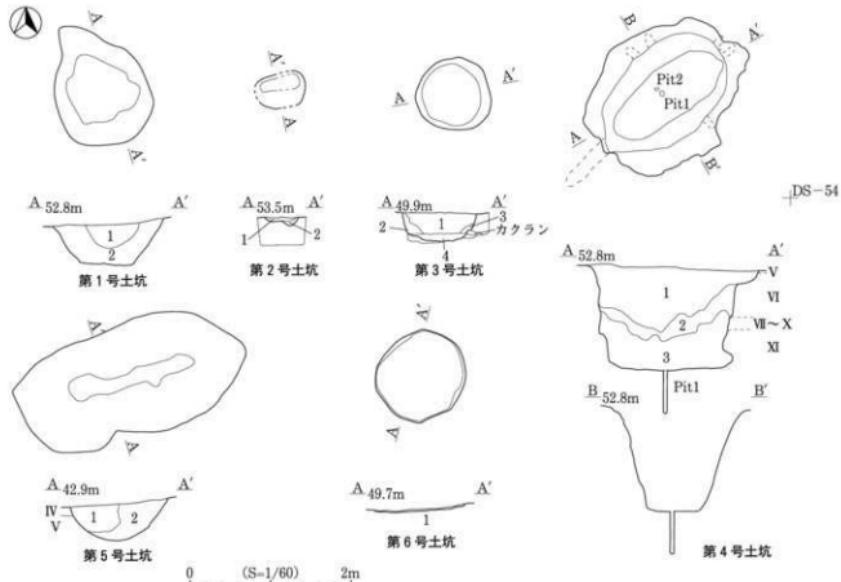
[構造] 壁は底面から直線的に緩やかに開いて立ち上がり、断面形状はバケツ状である。壁面中位には横穴が確認されている。底面は平坦で、中央付近から径5cm程の小穴が2基検出された。うちピット1は深さ54cmである。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 逆茂木痕と推測される小穴の存在から、縄文時代早期の落とし穴と推測される。

第5号土坑(10SK-05)(図22)

[位置] B区南半のC V-95グリッドに位置する。IV層で確認されたが、V層まで下げて精査を行った。



第1号土坑
 1層 黒色土 (10YR2/1) 黄褐色土 (10YR5/6) ϕ 1~15mm 3%、明黄褐色土 (10YR6/8) ϕ 2mm 1%、中振輕石少量
 2層 黒色土 (10YR2/1) 黄褐色土 (10YR5/8) ϕ 3~200mm 7%、明黄褐色土 (10YR6/8) ϕ 2~4mm 1%、中振輕石少量

第2号土坑
 1層 灰黄褐色砂質シルト (10YR4/2) と黒褐色シルト (10YR3/1) と黄褐色ローム (10YR7/8) の混合土
 中振輕石3%、粘性なし、しまりあり
 2層 黒褐色シルト (10YR3/1) と暗褐色シルト (10YR3/3) と明褐色ローム (10YR6/8) の混合土
 中振輕石2%、粘性ややあり、しまりややあり

第3号土坑
 1層 黒色シルト (10YR2/1) 黑褐色砂シルト (10YR2/3) 2%、中振輕石塊状2%、粘性・しまりなし
 2層 黒色シルト (10YR2/1) と黒褐色砂シルト (10YR3/2) との混合土
 粘性なし、しまり弱い

3層 黒色シルト (10YR2/1) と黒褐色砂シルト (10YR2/3) との混合土
 黄褐色ローム粒 (10YR8/8) ϕ 1mm 1%、粘性なし、しまり弱い
 4層 黒色シルト (10YR2/1) と黒褐色砂シルト (10YR2/3) とにびい黄褐色砂 (10YR7/4) との混合土
 粘性なし、しまりあり

第4号土坑
 1層 黒色土 (10YR2/1) 黑褐色土 (10YR2/3) 7%、明黄褐色輕石 (10YR6/8) ϕ 5~10mm 7%、
 明黃褐色輕石 (10YR6/8) ϕ 1~2mm 5%、體色輕石 (7.5YR6/8) ϕ 10mm 3%、
 黃褐色輕石 (10YR8/8) ϕ 5~10mm 2%、中振輕石混入
 黃褐色土 (10YR5/8) 7%、明黄褐色輕石 (10YR6/8) ϕ 5~10mm 5%、
 黄褐色輕石 (10YR7/8) ϕ 5~10mm 5%、明黄褐色輕石 (10YR6/8) ϕ 2~5mm 3%、
 黄褐色輕石 (10YR7/8) ϕ 10mm 1%、中振輕石混入
 明褐色粘土 (7.5YR5/6) 15%、暗褐色土 (10YR3/3) 10%、明褐色輕石 (7.5YR5/8) ϕ 5cm
 2%、黒褐色土 (10YR2/2) 1%が層状に混入、炭化物 ϕ 1~5mm 1%以下、燒土？1%以下

第5号土坑
 1層 黒褐色土 (10YR2/2) 褐色土 (10YR4/4) 3%、明褐色土 (10YR6/8) 1%、中振輕石 ϕ 1~2mm 1%、炭化物 (ϕ
 1~2mm) 1%、かたくしまる。粘性なし
 2層 暗褐色土 (10YR3/3) 褐色土 (10YR4/4) 3%、炭化物 (ϕ 1~2mm) 1%、中振輕石 ϕ 1mm以下 1%、かたくしまる、粘性あり

第6号土坑
 1層 暗褐色土 (10YR3/4) 黑色土 (10YR2/1) 10%、褐色土 (10YR4/6) 5%、中振輕石 ϕ 1mm以下 1%、しまりあり、
 粘性ややあり、炭混じる、表面に炭散らばる

図22 土坑

[堆積土] 2層に分層した。1層は黒褐色土、2層は暗褐色土主体で、かたくしまる。

[規模] 平面形は不整楕円形で、規模は開口部で294×136cm、底面で154×17cmで、確認面からの深さは53cmである。底面での主軸方位はN-78°-Eである。

[重複] なし。

[構造] 壁は床面から強く外反しながら立ち上がるが、上半の立ち上がりは不明瞭であった。皿状の断面形状と推測される。底面は、短軸方向は中央がすばまり、長軸方向は緩やかな起伏がみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第6号土坑(10SK-03)(図22)

[位置] A区北西側のD I-62グリッドに位置する。V層で確認されたが、遺存状態は良くない。

[堆積土] 暗褐色土主体の単層で、炭化物を多く混入している。炭化物は小破片状である。

[規模] 平面形はほぼ円形で、規模は開口部で116×112cm、底面で112×102cmで、確認面からの深さは11cmである。

[重複] なし。

[構造] 壁は外反しながら立ち上がり、皿状の断面形状をするものと推測される。底面は凹凸が目立ち、北から南方向に傾斜している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

3 溝状土坑

第1号溝状土坑(08SV-01)(図23)

[位置] A区北西側のD M-53・54グリッドに位置する。V層上面で確認した。立ち上がり部分はトレンチャーにより削平されている。

[堆積土] 7層に分層した。1～6層は黒～黒褐色土主体で自然堆積と思われる。7層は黄褐色土主体で、壁の崩落土と考えられ、概ね自然によって埋没したものと考えられる。

[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で331×50cm、底面で299×26cmで、確認面からの深さは130cmである。底面での主軸方位はN-71°-Eである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面は底面からほぼ直立し上位で急激に外反するY字状で、縦断面は東側に張り出しが認められるものの、両端が外傾して立ち上がる逆台形状である。底面はほぼ平坦である。

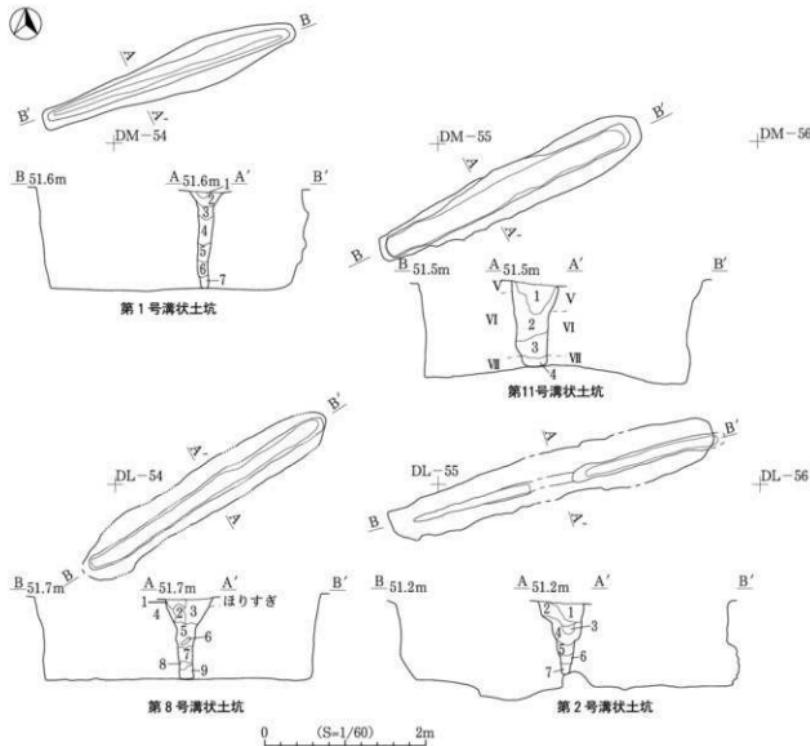
[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第2号溝状土坑(08SV-02)(図23)

[位置] A区北西側のD K-54・55およびD L-55グリッドに位置する。V層上面で確認した。立ち上がり部分はトレンチャーにより削平されている。

[堆積土] 7層に分層した。1・5・6層は黒褐色土主体で、2層は暗褐色土、3・4・7層は黄褐色土主体である。1・6層は自然堆積土、7層は壁の崩落土と思われる。2～5層は混入物から壁の



第1号溝状土坑

- | | |
|-------------------|---|
| 1層 黒褐色土 (10YR2/2) | 明黃褐色土 (10YR6/8) ϕ 2~5 mm 2%、黄橙色土 (10YR8/8) ϕ 1~3 mm 1% |
| 2層 黒色土 (10YR2/1) | 黄橙色土 (10YR8/8) ϕ 3~8 mm 3%、明黃褐色土 (10YR6/8) ϕ 1~2 mm 2%、中振軽石少量 |
| 3層 黒色土 (10YR2/1) | 黄褐色土 (10YR5/6) ϕ 5~10mm 3%、明黃褐色土 (10YR8/8) ϕ 2~4 mm 1% |
| 4層 黒色土 (10YR2/1) | 黄褐色土 (10YR5/8) ϕ 2~10mm 5%、明黃褐色土 (10YR7/6) ϕ 3~6 mm 2%、中振軽石少量 |
| 5層 黒褐色土 (10YR2/2) | 明黃褐色土 (10YR6/8) ϕ 5~30mm 7%、褐色土 (10YR4/6) ϕ 3~5 mm 2% |
| 6層 黒褐色土 (10YR2/2) | 黄褐色土 (10YR5/6) ϕ 70mm20%、褐色土 (10YR4/6) ϕ 3~6 mm 2% |
| 7層 黃褐色土 (10YR5/6) | 黄橙色土 (10YR8/8) ϕ 50mm20%、黑色土 (10YR2/1) ϕ 5~15mm 5% |

第2号溝状土坑

- | | |
|-------------------|---|
| 1層 黒褐色土 (10YR2/2) | 褐色土 (10YR4/6) ϕ 2~30mm 7%、黄褐色土 (10YR8/8) ϕ 2~4 mm 2%、中振軽石少量 |
| 2層 暗褐色土 (10YR3/4) | 明黃褐色土 (10YR6/8) ϕ 3~50mm10%、明黃褐色土 (10YR7/6) ϕ 4~6 mm 1% |
| 3層 黄褐色土 (10YR5/6) | 黑色土 (10YR2/1) ϕ 20~70mm30%、灰黃褐色土 (10YR4/2) ϕ 5~10mm 3% |
| 4層 黄褐色土 (10YR5/6) | 黑色土 (10YR2/1) ϕ 3~7 mm 2%、中振軽石混入 |
| 5層 黒褐色土 (10YR2/2) | 黄褐色土 (10YR5/6) ϕ 5~60mm10%、明黃褐色土 (10YR6/8) ϕ 1~5 mm 1% |
| 6層 黒褐色土 (10YR2/2) | 黄褐色土 (10YR5/6) ϕ 1~3 mm 2%、黑色土 (10YR2/1) ϕ 1~3 mm 1% |
| 7層 黄褐色土 (10YR5/6) | 黑褐色土 (10YR2/2) ϕ 3~5 mm 2% |

図23 溝状土坑(1)

第8号溝状土坑

1層	黒褐色粘土質シルト (10YR2/3)	黄褐色ローム (10YR5/6) φ 1 ~ 2 mm 2 %、中振軽石 5 %
2層	黄褐色ローム (10YR5/8)	と黒褐色シルト (10YR2/3)との混合土 黒色シルト (10YR1.7/1) 10%、黄褐色ローム (10YR7/8) φ 1 mm以下 5 %、しまりあり
3層	黒色砂質シルト (10YR2/1)	黒褐色シルト (10YR2/3) 7 %、黄褐色ローム (10YR7/8) φ 2 ~ 5 mm 3 %、中振軽石 7 %、しまりややあり
4層	黒褐色砂質シルト (10YR2/3)	と明黃褐色粘シルト (10YR6/8)との混合土 明黄褐色ローム (10YR6/8) φ 5 ~ 10mm 1 %、黄褐色ローム (10YR7/8) φ 1 mm以下 5 %、しまりややあり
5層	黒褐色シルト (10YR2/3)	と黒褐色砂シルト (10YR2/3)との混合土 明黄褐色ローム (10YR6/8) φ 5 ~ 10mm 2 %、黄褐色ローム (10YR7/8) φ 1 mm以下 10 %、中振軽石 1 %、しまり弱い
6層	黄褐色粘土質シルト (10YR5/8)	黄褐色浮石 (10YR7/8) φ 10mm以上 1 %、しまりあり
7層	黒褐色砂質シルト (10YR2/2)	と黄褐色ローム (10YR5/6)との混合土 黄褐色浮石 (10YR5/8) φ 5 ~ 10mm 3 %、明黄褐色ローム (10YR6/8) φ 1 mm以下 5 %、しまりややあり
8層	黒色シルト (10YR1.7/1)	と黄褐色粘質シルト (10YR5/8)との混合土 明黄褐色ローム (10YR6/8) φ 1 ~ 2 mm 2 %、しまりややあり
9層	暗褐色シルト (10YR3/3)	浅黄褐色ローム (10YR8/4) φ 5 ~ 10mm 7 %、しまりややあり
第11号溝状土坑		
1層	黒色土 (10YR1.7/1)	黒褐色土 (10YR2/2) 30%、中振軽石 φ 1 ~ 2 mm混入、黄褐色軽石 (10YR7/8) φ 1 ~ 5 mm混入
2層	黒褐色土 (10YR2/2)	中振軽石 (φ 1 ~ 5 mm) 混入、黄褐色粘土 (10YR5/8) 35%、黒色土 (10YR1.7/1) 5 %、V層30%
3層	黒色土 (10YR1.7/1)	黄褐色粘質土 (10YR5/6) 20%、V層帶状に混入、黒褐色土 (10YR2/2) 7 %、中振軽石 (φ 1 ~ 2 mm) 混入
4層	暗褐色粘土 (7.5YR3/4)	黒色土 (10YR1.7/1) 10%、中振軽石 φ 1 ~ 2 mm混入、にぶい黄褐色粘土 (10YR6/4) 2 %

崩落土が混合していると思われ、自然によって埋没したものと考えられる。

[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で417×60cm、底面で392×12cmで、確認面からの深さは122cmである。底面での主軸方位はN-75°-Eである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面は中位で変化するものの、底面から直線的に外傾して立ち上がるV字状で、縦断面は両端が外側に張り出しが認められる袋状である。底面は起伏がみられ、中央が盛り上がっていいる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第3号溝状土坑 (08SV-03) (図24)

[位置] E区北半のE D・E E-29・30グリッドに位置する。V層上面で確認した。立ち上がり部分はトレンチャーにより削平されている。

[堆積土] 3層に分層した。黒～黒褐色土主体で、自然堆積土と思われる。

[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で290×47cm、底面で249×15cmで、確認面からの深さは75cmである。底面での主軸方位はN-5°-Eである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、底面から直線的に外傾して立ち上がり、横断面がV字状・縦断面が逆台形状である。底面に起伏はみられないが、北から南へ傾斜している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第4号溝状土坑(09SV-04)(図24)

[位置] E区ほぼ中央のD Y- 40・41グリッドに位置する。V層上面で確認された。立ち上がり部分はトレンチャーにより削平されている。

[堆積土] 9層に分層した。1・3・4・6・8層は黒～黒褐色土で、自然堆積層と考えられる。2・9層は暗褐色土、5・7層は黄褐色土主体で、混入物から壁の崩落土が混合していると思われ、概ね自然によって埋没したものと考えられる。

[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で推定213×34cm、底面で184×18cmで、確認面からの深さは94cmである。底面での主軸方位はN-66°-Eである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面が底面からほぼ直線的に立ち上がるU字状である。縦断面も底面からほぼ直線的に立ち上がるものと推定される。底面には起伏がみられ、中央が低く両端が高くなっている。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第5号溝状土坑(09SV-05)(図24)

[位置] E区南端中央のD T- 45・46グリッドに位置する。V層上面で確認された。立ち上がり部分はトレンチャーにより削平されている。

[堆積土] 7層に分層した。黒色土主体で、自然堆積と考えられる。

[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で363×43cm、底面で345×14cmで、確認面からの深さは105cmである。底面での主軸方位はN-83°-Eである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面が底面からほぼ直線的に立ち上がるU字状である。縦断面も底面からほぼ直線的に立ち上がる箱形状であるが、中位に張り出しがみられる。底面は緩やかに起伏している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第6号溝状土坑(09SV-06)(図24)

[位置] E区南東端のD X- 49・50グリッドに位置する。V層上面で確認された。北東端が調査区外に延びている。

[堆積土] 10層に分層した。1層は黒色土主体で自然堆積土、5層は黄褐色土で壁の崩落土と考えられる。2～4・6～10層は黒～暗褐色土と褐～黄橙褐色土の混合土で、混入物から壁の崩落土が混合していると思われ、自然によって埋没したものと考えられる。

[規模] 平面形は長楕円形で、検出された規模は開口部で340×59cm、底面で327×10cmで、確認面からの深さは133cmである。底面での主軸方位はN-82°-Eである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面が底面から外反して立ち上がるV字状である。縦断面も底面からほぼ直線的に立ち上がる箱形状と思われる。上位に張り出しがみられる。底面に起伏はみられないが、東から西へ

傾斜している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第7号溝状土坑 (09SV-07) (図25)

[位置] E区南東端のDW-50およびDX-50・51グリッドに位置する。V層上面で確認したが、IV層を掘込んで構築されている。北東半部が調査区外に延びている。

[堆積土] 14層に分層した。1層は黒褐色土主体で、自然堆積土と考えられる。9・10・12・13層は黄橙～橙色土主体で、壁の崩落土と考えられる。2・8・11・14層は黒褐～暗褐色土と黄褐～黄橙色土の混合土で、混入物から壁の崩落土が混合していると思われ、自然によって埋没したものと考えられる。

[規模] 平面形は長楕円形で、検出された規模は開口部で216×86cm、底面で203×19cmで、掘込み面からの深さは137cmである。底面での主軸方位はN-65°-Eである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面が底面から外反して立ち上がるV字状である。縦断面は両端が外側に張り出す袋状になるものと思われる。底面には緩やかな起伏がみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第8号溝状土坑 (09SV-08) (図23)

[位置] A区北西側のDK-53・54およびDL-54グリッドに位置する。V層上面で確認した。立ち上がり部分はトレンチャーにより削平されている。

[堆積土] 9層に分層した。3層は黒褐色土主体で自然堆積土と考えられる。2・6・7層は黄褐色土主体で壁の崩落土と考えられる。1・4・5・8・9層は黒～暗褐色土主体で、混入物から壁の崩落土が混合していると思われ、自然によって埋没したものと考えられる。

[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で推定358×56cm、底面で338×16cmで、確認面からの深さは108cmである。底面での主軸方位はN-32°-Wである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面は底面からほぼ直立し上位で急激に外反するY字状で、縦断面はほぼ直線的に立ち上がる逆台形状である。底面はほぼ平坦である。

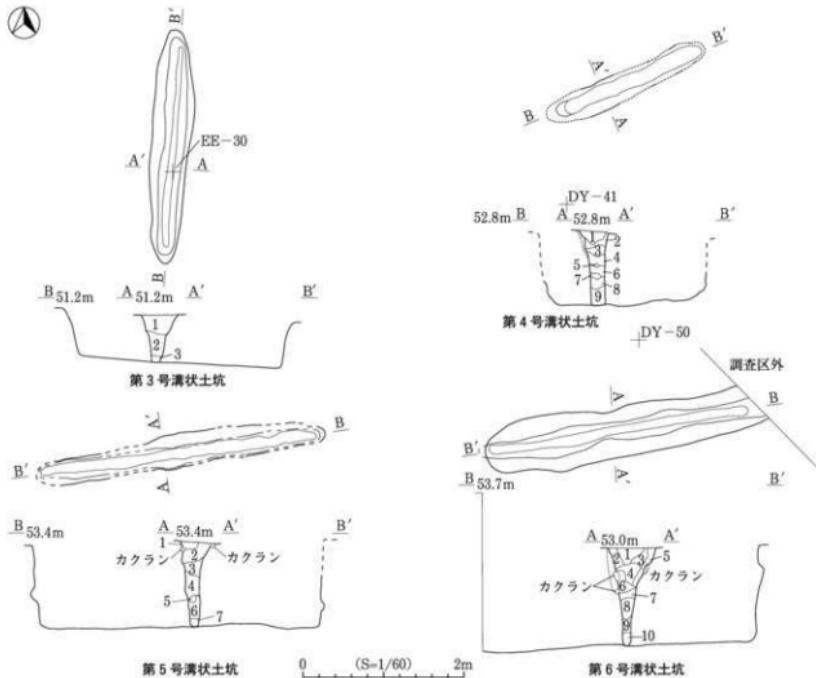
[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第9号溝状土坑 (09SV-09) (図25)

[位置] A区北西側のDI・DJ-55グリッドに位置する。V層上面で確認された。立ち上がり部分はトレンチャーにより削平されている。

[堆積土] 8層に分層した。黒褐色土主体で、自然堆積と考えられる。5・8層は鉄分の沈着により

**第3号溝状土坑**

1層 黒色土 (10YR1.7/1) 褐色土 (10YR4/6) ϕ 1~70mm 5%、黄褐色土 (10YR5/6) ϕ 2~3mm 1%
2層 黑褐色土 (10YR2/2) 褐色土 (10YR4/6) ϕ 2~80mm 5%、黑色土 (10YR1.7/1) ϕ 40mm 3%、
黄褐色土 (10YR5/6) ϕ 1~3mm 1%

3層 黒色土 (10YR2/1) 黄褐色土 (10YR5/8) ϕ 2~4mm 1%

第4号溝状土坑

1層 黒色砂質シルト (10YR2/1) と黒褐色砂質シルト (10YR2/3) の混合土
中礫石5%、黄橙浮石 (10YR8/6) ϕ 2~5mm 1%、粘性なし、しまりあり
2層 暗褐色シルト (10YR3/4) と黒色砂質シルト (10YR2/1) の混合土
黄橙色ローム (10YR7/8) ϕ 5~10mm 2%、中礫石5%、粘性弱い、しまりあり
3層 黒色砂質シルト (10YR2/1) と黒褐色砂質シルト (10YR3/2) の混合土
中礫石7%、黄橙色ローム (10YR7/8) ϕ 2~5mm 1%、粘性なし、しまりあり
4層 黑褐色砂質シルト (10YR2/2) 暗褐色シルト (10YR3/4) 5%、黄橙色ローム (10YR8/6) ϕ 2~5mm 3%、黄橙色ローム (10YR8/8) ϕ 15mm 1%、中礫石3%、粘性なし、しまりあり
5層 黄褐色ローム (10YR5/8) と暗褐色粘土質シルト (10YR3/3) の混合土
中礫石2%、明黄褐色ローム (10YR7/6) ϕ 2~5mm 3%、粘性あり、しまりあり
6層 黑褐色シルト (10YR2/2) と暗褐色シルト (10YR3/3) の混合土
中礫石5%、明黄褐色ローム (10YR7/6) ϕ 1~2mm 2%、粘性ややあり、しまりあり
7層 黄褐色粘土質シルト (10YR5/8) と暗褐色シルト (10YR3/4) の混合土
明黄褐色ローム (10YR7/6) ϕ 1~2mm 2%、黄橙色ローム (10YR8/6) ϕ 10~15mm 10%、
粘性あり、しまりあり
8層 黑褐色シルト (10YR2/2) 中礫石5%、明黄褐色ローム (10YR7/8) ϕ 2~5mm 2%、明黄褐色ローム (10YR7/8)
 ϕ 10~15mm 1%、粘性ややあり、しまりあり
9層 暗褐色シルト (10YR3/3) 黑褐色シルト (10YR3/1) 5%、中礫石3%、黄橙色ローム (10YR5/8) ϕ 5~10mm 3%、
粘性ややあり、しまりあり

図24 溝状土坑(2)

第5号溝状土坑

1層	黒褐色シルト (10YR2/2) と暗褐色シルト (10YR3/4) の混合土 中振軽石 2%、しまりあり、粘性なし
2層	黒褐色シルト (10YR2/2) と暗褐色シルト (10YR3/4) の混合土 橙色ローム (10YR6/8) ϕ 1~2 mm 3%、中振軽石 3%、しまりややあり、粘性ややあり
3層	黒褐色シルト (10YR2/2) 黄褐色ローム (10YR5/8) ϕ 1~2 mm 3%、中振軽石 2%、しまりややあり、粘性ややあり
4層	黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) 黄褐色ローム (10YR5/8) ϕ 2~5 mm 5%、中振軽石 3%、しまりややあり、粘性ややあり
5層	黒褐色粘土質シルト (10YR2/3) と黑色砂質シルト (10YR1.7/1) の混合土 橙色ローム (10YR5/8) ϕ 2~5 mm 3%、中振軽石 3%、しまりややあり、粘性ややあり
6層	黒色粘土質シルト (10YR1.7/1) と暗褐色シルト (10YR2/3) の混合土 橙色ローム (10YR6/8) ϕ 10mm以上 3%、中振軽石 1%、しまりややあり、粘性あり
7層	黒褐色シルト (10YR2/2) 黄褐色ローム (10YR5/8) ϕ 10mm以上 2%、中振軽石 1%、しまりややあり、粘性あり
第6号溝状土坑	
1層	黒色シルト (10YR2/1) 暗褐色シルト (10YR3/3) 2%、明黄褐色ローム (10YR7/6) ϕ 1~5 mm 2%、粘性弱い、しまりややあり
2層	暗褐色シルト (10YR3/4) と明黄褐色ローム (10YR6/8) の混合土 小礫 ϕ 5~10mm 1%、粘性弱い、しまり弱い
3層	褐色シルト (10YR4/4) と黒褐色シルト (10YR2/3) の混合土 黄褐色ローム (10YR7/6) ϕ 1~2 mm 3%、小礫 ϕ 5~10mm 1%、中振軽石 5%、粘性ややあり、しまり弱い
4層	黒褐色シルト (10YR2/2) と暗褐色シルト (10YR3/4) の混合土 黄褐色ローム (10YR7/8) ϕ 1~2 mm 5%、 ϕ 2~5 mm 2%、粘性ややあり
5層	黄褐色ローム (10YR8/8) 黒褐色シルト (10YR2/2) 2%、粘性あり、しまり強い
6層	暗褐色粘土質シルト (10YR3/4) 黄褐色ローム (10YR8/8) ϕ 1~3 mm 7%、黒褐色シルト (10YR2/2) 2%、中振軽石 5%、粘性ややあり、しまり弱い
7層	黄褐色ローム (10YR8/8) にない橙色粘土 (7.5YR7/4) の混合土 黒褐色シルト (10YR2/2) がブロック状に混入、粘性あり、しまりなし
8層	暗褐色 (10YR3/3) と明黄褐色ローム (10YR6/8) と橙色粘土 (7.5YR6/8) の混合土 中振軽石 5%、小礫 ϕ 5~10mm 1%、粘性ややあり、しまりなし
9層	黄褐色 (10YR7/8) にない橙色粘土 (10YR7/4) と黒褐色シルト (10YR2/3) の混合土 粘性ややあり、しまりあり
10層	黒色 (10YR2/1) と黄褐色ローム (10YR5/8) の混合土 小礫 ϕ 2~3 mm 1%、粘性ややあり、しまり弱い

赤化している。

[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で344×26cm、底面で330×8cmで、確認面からの深さは86cmである。底面での主軸方位はN- 88°- Wである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面は底面からほぼ直立して立ち上がるU字状で、縦断面もほぼ直立するが、外側に弱く張り出す箇所がみられる。底面は起伏が認められ、また、東から西へ傾斜している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、繩文時代のものと考えられる。

第10号溝状土坑 (09SV- 10) (図25)

[位置] E区南端中央のD U + D V - 46グリッドに位置する。V層で確認された。立ち上がり部分はトレンチャーにより削平されている。

[堆積土] 9層に分層した。6・7・9層は黄褐色土主体で、壁の崩落土と考えられる。1~5・8層は黒・暗褐色土主体で、混入物から壁の崩落土が混合していると思われ、自然によって埋没したものと考えられる。

[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で363×41cm、底面で350×11cmで、確認面からの深さは168cmである。底面での主軸方位はN- 61°- Eである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面は底面からほぼ直線的に外傾して立ち上がるV字状で、縦断面もほぼ直立して立ち上がる箱状である。底面は起伏が認められる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第11号溝状土坑 (09・10SV- 11) (図23)

[位置] A区北西側のD L- 54・55およびD M- 55グリッドに位置する。V層で確認された。立ち上がり部分はトレンチャーにより削平されている。21年度に検出し、22年度に精査を行った。

[堆積土] 4層に分層した。1・3層は黒～黒褐色土、4層は暗褐色土主体である。4層は壁の崩落土が鉄分の沈着により変色したものと考えられる。2・3層は黄褐色土の混入から、壁の崩落土が混合していると思われ、自然によって埋没したものと考えられる。

[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で357× 61cm、底面で325× 28cmで、確認面からの深さは139cmである。底面での主軸方位はN- 61°- Eである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面は底面からほぼ直線的に外傾して立ち上がるU字状で、縦断面もほぼ外傾して立ち上がる逆台形状であるが、外側に弱く張り出す箇所がみられる。底面は中央が盛り上がっている。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第12号溝状土坑 (09・10SV- 12) (図25)

[位置] A区北西側のD M・D N- 56グリッドに位置する。V層で確認された。21年度に検出し、22年度に精査を行った。

[堆積土] 2層に分層した。黒色土主体で、自然堆積と考えられる。

[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で359× 28cm、底面で322× 14cmで、確認面からの深さは105cmである。底面での主軸方位はN- 63°- Eである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面は底面からほぼ直線的に外傾して立ち上がるU字状で、縦断面もほぼ外傾して立ち上がる逆台形状である。底面は緩やかな起伏がみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第13号溝状土坑 (SV- 13)

欠番

第14号溝状土坑 (SV- 14)

欠番

第15号溝状土坑 (10SV- 15) (図26)

[位置] A区南東部のC V- 77およびCW- 76・77グリッドに位置する。V層で確認された。

[堆積土] 3層に分層した。1・3層は黒～黒褐色、2層は黄褐色土主体である。2層は壁の崩落土と考えられる。3層および1層下部には壁の崩落土と考えられる暗褐～黄褐色土が混入することから、混入物から壁の崩落土が混合していると思われ、自然によって埋没したものと考えられる。

[規模] 平面形は南東側が張り出す不整長楕円形で、規模は開口部で433×53cm、底面で381×25cmで、確認面からの深さは128cmである。底面での主軸方位はN- 43°- Wである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面は底面からほぼ直線的に外傾して立ち上がるV字状である。縦断面は下半まで垂直に立ち上がり、上半は外傾する朝顔状であるが、外側に弱く張り出す箇所がみられる。底面は緩やかな起伏がみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第16号溝状土坑 (10SV- 16) (図26)

[位置] A区南東部のC U・C V- 74グリッドに位置する。V層で確認された。

[堆積土] 2層に分層した。黒～黒褐色土主体で、1層中位と1層と2層の境に壁の崩落土と考えられる明黄褐色土が帯状に混入する。自然によって埋没したものと考えられる。

[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で294×49cm、底面で313×25cmで、確認面からの深さは104cmである。底面での主軸方位はN- 66°- Eである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面は底面からほぼ直線的に外傾して立ち上がるU字状である。縦断面は両端が外側に張り出す袋状である。底面は両端が高く、中央に向かって傾斜している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。

第17号溝状土坑 (10SV- 17) (図26)

[位置] A区南東部のC S- 78グリッドに位置する。IV層上面で確認された。

[堆積土] 黒色土の単層である。

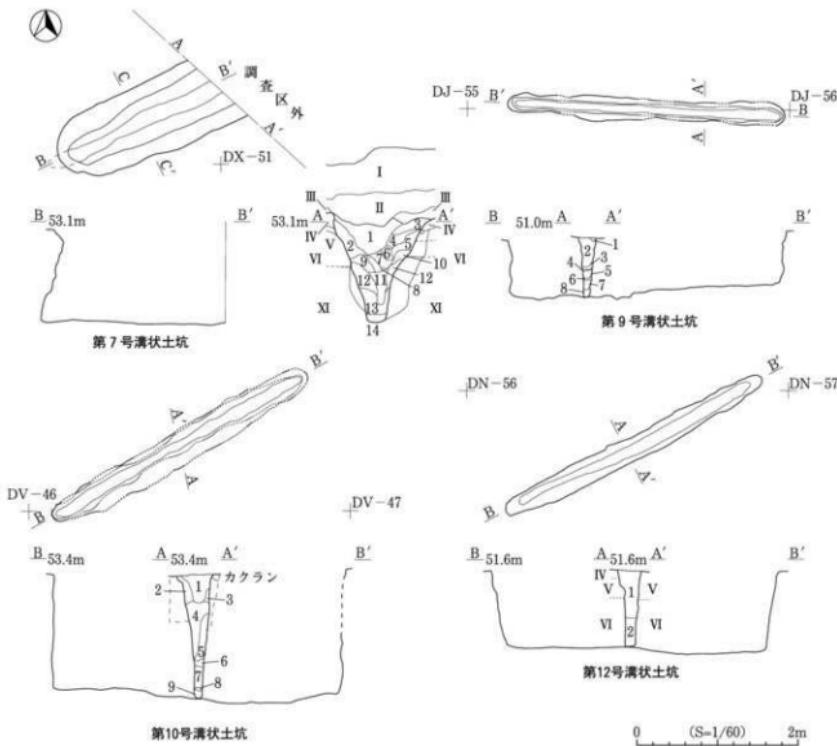
[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で352×31cm、底面で329×15cmで、確認面からの深さは112cmである。底面での主軸方位はN- 46°- Wである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面は底面からほぼ直立し上位で外傾するY字状で、縦断面はほぼ直線的に外傾して立ち上がる逆台形状であるが、外側に弱く張り出す箇所がみられる。底面は起伏がみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。



第7号溝状土坑

- 1層 黒褐色砂質シルト (10YR2/2)
 2層 黒褐色砂質シルト (10YR3/2)
 3層 暗褐色砂質シルト (10YR3/3) と黒色シルト (10YR2/1) の混合土
 4層 暗褐色粘土質シルト (10YR3/3)
 5層 黄褐色ローム (10YR5/8) と粘土質シルト (10YR3/4) の混合土
 6層 暗褐色シルト (10YR3/3)
 7層 黒褐色粘土質シルト (10YR2/2)
 8層 暗褐色粘土質シルト (10YR3/3)
 9層 黄褐色ローム (10YR7/8)
 10層 黄褐色ローム (10YR7/8)
 11層 黑褐色砂質シルト (10YR2/2)
 12層 黄褐色ローム (10YR7/8)
 13層 黒褐色ローム (7.5YR6/6)
 14層 黑褐色ローム (10YR2/3)

中振軽石 7%、小礫 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ 2%、黒色シルト (10YR2/1) 5%、明黄褐色ローム (10YR6/8) $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ 1%、粘性なし、しまり強い
 中振軽石 15%、黄褐色ローム (10YR5/8) $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ 1%、粘性なし、しまり強い
 小礫 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ 1%
 中振軽石 15%、粘性なし、しまり強い
 明黄褐色ローム $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ 3%、小礫 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ 1%、粘性やあり、しまり強い
 黄褐色ローム (10YR7/8) との混合土
 黄褐色ローム (10YR7/8) $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ 5% \cdot $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ 1%、粘性なし、しまり強い
 中振軽石 25mm、粘性なし、しまり強い
 明黄褐色ローム (10YR6/6) $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ 3% \cdot $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ 10%、小礫 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ 2%、粘性あり、しまり強い
 黄褐色ローム (10YR7/8) 3%、小礫 $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ 3%、粘性あり、しまり強い
 小礫 $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ 3%、粘性あり、しまり強い
 にぶい黄褐色粘土質シルト (10YR5/3) 10%、小礫 $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ 2%
 明黄褐色ローム (10YR6/6) $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ 2% \cdot $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ 5%、粘性なし、しまりあり
 小礫 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ 2%、粘性やあり、しまり強い
 高館火山灰、粘性あり、しまり弱い
 中振軽石 15%、小礫 $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ 1%、粘性なし、しまりややあり

図25 溝状土坑(3)

第9号溝状土坑

1層	暗褐色シルト (10YR3/3) とシルト (10YR1.7/1) の混合土	
2層	黒褐色砂質シルト (10YR2/2)	黄橙色ローム (10YR7/8) $\phi 1\text{mm}$ 以下 1%、しまりあり、粘性なし
3層	黒褐色粘土質シルト (10YR2/3)	明黄褐色ローム (10YR6/8) $\phi 1\sim 2\text{mm}$ 3%、中微輕石 2%、しまりややりあり、粘性なし
4層	黒褐色砂質シルト (10YR2/3)	しまりややあり、粘性あり
5層	暗褐色シルト (10YR3/4)	粘性なし、しまりなし
6層	黒褐色砂質シルト (7.5YR2/2)	明黄褐色ローム (10YR6/8) $\phi 1\text{mm}$ 以下 2%、粘性なし、しまり強い
7層	黒色シルト (7.5YR1.7/1)	明黄褐色ローム (10YR6/8) $\phi 1\text{mm}$ 以下 1%、明黄褐色ローム (10YR6/8) $\phi 1\text{mm}$ 以下 5%
8層	極暗褐色シルト (7.5YR2/3)	黄橙色ローム (10YR7/8) $\phi 1\text{mm}$ 以下 3%
		明黄褐色ローム (10YR6/8) $\phi 1\text{mm}$ 以下 5%

第10号溝状土坑

1層	黒色シルト (10YR2/1) と黒褐色シルト (10YR2/3) の混合土	明黄褐色ローム (10YR7/8) $\phi 1\sim 5\text{mm}$ 2%、中微輕石 7%、粘性なし、しまりあり
2層	黒色シルト (10YR2/1)	明黄褐色ローム (10YR6/8) $\phi 2\sim 5\text{mm}$ 1%、中微輕石 2%、粘性ややあり、しまりあり
3層	黒褐色砂質シルト (10YR2/2)	黄褐色ローム (10YR5/8) $\phi 1\sim 2\text{mm}$ 1%、中微輕石 3%、小礫 1%、粘性あり、しまりややあり
4層	黒褐色粘土質シルト (10YR2/2) と黒色砂シルト (10YR2/1) の混合土	黄橙色ローム (10YR7/8) $\phi 1\sim 2\text{mm}$ 7%、黄橙色ローム (10YR7/8) $\phi 10\text{mm}$ 2%、粘性あり、しまりあり
5層	暗褐色粘土質シルト (10YR3/4) と黄橙色ローム (10YR7/8) にぶい橙色粘土 (7.5YR7/4) の混合土	粘性あり、しまりややあり
6層	黄褐色粘土質 (10YR5/8) にぶい黄橙色粘土 (10YR5/3) の混合土	黄褐色浮石 (10YR5/6) $\phi 5\sim 10\text{mm}$ 2%、粘性あり、しまり弱い
7層	黄褐色粘土質 (10YR5/8) にぶい黄橙色粘土 (10YR6/3) の混合土	粘性あり、しまりあり
8層	黒色シルト (10YR2/1)	中微輕石 1%、粘性あり、しまり弱い
9層	暗褐色粘土質シルト (10YR3/3) と黄褐色粘土 (10YR6/6) の混合土	にぶい黄褐色浮石 (10YR5/4) $\phi 2\sim 5\text{mm}$ 1%、粘性あり、しまりややあり

第12号溝状土坑

1層	黒色土 (10YR2/1)	黒褐色土 (10YR2/2) 35%、中微輕石 $\phi 1\sim 2\text{mm}$ 5%、明黄褐色土 (10YR6/8) 5%、黄橙色絆石 (10YR7/8) $\phi 3\sim 15\text{mm}$ 7%
2層	黒褐色土 (10YR3/1)	中微輕石 $\phi 1\sim 2\text{mm}$ 10%、黄褐色土 (10YR5/6) 10%、黄橙色絆石 (10YR6/8) $\phi 1\sim 25\text{mm}$ 10%

第18号溝状土坑 (10SV-18) (図26)

[位置] B区南東端のD B・D C-90・91グリッドに位置する。V層上面で確認された。

[堆積土] 4層に分層した。1・3・4層は黒・黒褐色土、3層は暗褐色土主体である。3層は壁の崩落土と考えられる。2層には壁の崩落土と考えられる明黄褐色土が混入する。自然によって埋没したものと考えられる。

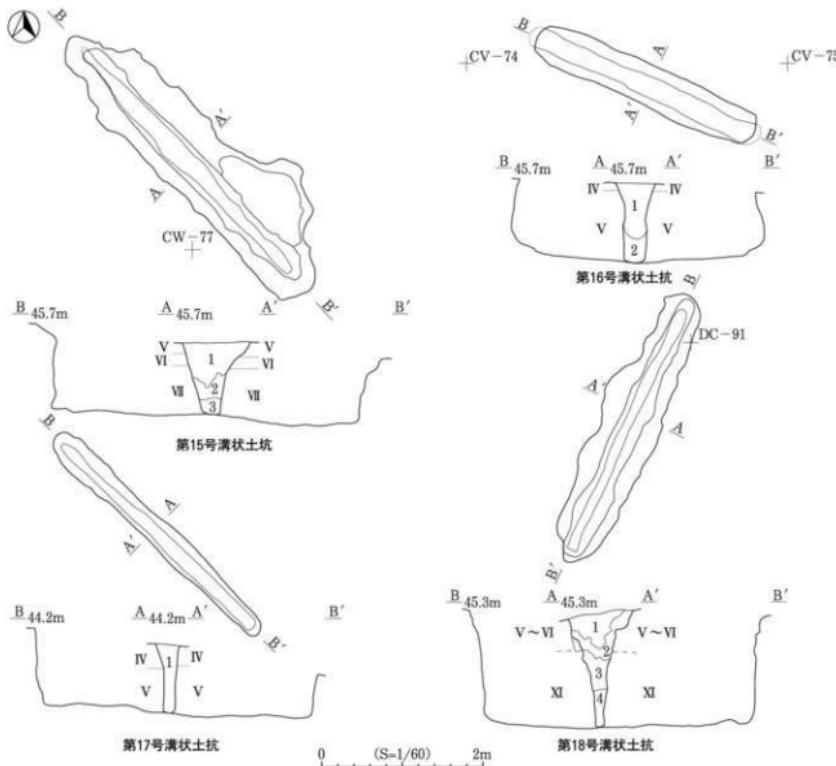
[規模] 平面形は長楕円形で、規模は開口部で364×80cm、底面で329×10cmで、確認面からの深さは147cmである。底面での主軸方位はN-27°-Eである。

[重複] なし。

[構造] 壁は、横断面は底面からほぼ直線的に外傾し上位で更に外傾するY字状で、縦断面はほぼ直線的に外傾して立ち上がる逆台形状であるが、外側に弱く張り出す箇所がみられ、両端が高く中央に向かって傾斜している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 形状、堆積土の状況から、縄文時代のものと考えられる。



第15号溝状土坑

1層 黒色土 (10YR2/1) 暗褐色土 (10YR3/4) 20%、明黄褐色輕石 (10YR6/8) ϕ 1~15mm 3%、中振輕石 ϕ 1mm以下 1%、しまりなし、粘性なし

2層 黄褐色土 (10YR5/8) 明黄褐色土 (10YR6/6) 25%、しまりなし、粘性あり

3層 黑褐色土 (10YR2/2) 明黄褐色土 (10YR6/6) ϕ 1~20mm 30%、しまりあり、粘性あり

第16号溝状土坑

1層 黒色土 (10YR2/1) 黑褐色土 (10YR1.7/1) 30%、黒褐色土 (10YR2/2) 10%、中振輕石 ϕ 1~5mm 2%、しまりあり、粘性あり

2層 黑褐色土 (10YR2/2) 明黄褐色土 (10YR6/6) 30%、中振輕石 ϕ 1~2mm 1%、しまりあり、粘性あり

第17号溝状土坑

1層 黒色土 (10YR2/1) 黑褐色土 (10YR2/3) 20%、褐色土 (10YR4/6) 3%、中振輕石 ϕ 1mm以下 1%、しまりあり、粘性なし

第18号溝状土坑

1層 黒色土 (10YR1.7/1) 黑褐色土 (10YR2/2) 20%、黄褐色輕石 (10YR7/8) ϕ 1~10mm 3%、中振輕石 ϕ 1mm以下 1%、しまりなし、粘性なし

2層 黑褐色土 (10YR2/2) 黑褐色土 (10YR1.7/1) 5%、明黄褐色土 (10YR6/8) 3%、中振輕石 ϕ 1mm以下 2%、しまりなし、粘性なし

3層 暗褐色土 (10YR3/4) 明黄褐色土 (10YR6/6) 30%、黒褐色土 (10YR2/2) 7%、中振輕石 ϕ 7mm以下 1%、しまりなし、粘性なし

4層 黑褐色土 (10YR3/2) 褐色土 (10YR4/6) 5%、明黄褐色土 (10YR6/8) 3%、中振輕石 ϕ 1mm以下 1%、しまりなし、粘性あり、V層粒状に混じる

図26 溝状土坑(4)

4 焼土遺構

第1号焼土遺構 (09SN- 01) (図27)

[位置] E区南西部のD V - 39・40グリッドに位置する。V層で確認された。トレンチャーにより削平されている。

[堆積土] 3層に分層した。1・3層は黒色土主体で、纖維状の炭化物が混入している。2層は灰白色土主体で、火床面と推測される。3層は掘り方の可能性もある。

[規模] 平面形は円形と推定されるが、削平されているため、火床面の平面規模は不明である。

[重複] なし。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 時期を特定できるような遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

5 ピット(柱穴)

ピットはB区の南東端から1基、北西端から2基の計3基が確認された。壁の立ち上がりや底面が不明瞭である。

第1号ピット (10Pit- 01) (図27)

[位置] B区南東端のC U・C V - 95グリッドに位置する。V層上面で確認した。

[堆積土] 2層に分層できた。黒褐色土主体で自然堆積と思われる。

[規模] 平面形は不整円形で、規模は開口部で56×39cmで、確認面からの深さは16cmである。

[重複] なし。

[構造] 壁は底面から内湾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をしている。底面はほぼ平坦で、径10cm前後、深さ8cmの小穴状の窪みがみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

第2号ピット (10Pit- 02)

欠番

第3号ピット (10Pit- 03) (図27)

[位置] B区北西端のD G - 87グリッドに位置する。V層で確認したが、IV層を掘込んで構築されている。北東半が調査区外に延びている。

[堆積土] 3層に分層できた。1層は暗褐色土、2層は黒褐色土、3層は褐色土主体で自然堆積と思われる。3層は掘りすぎの可能性もある。III層に被覆されている。

[規模] 平面形は円形と推定され、開口部規模は径22cm、掘込み面からの深さは24cmである。

[重複] なし。

[構造] 壁は底面から外反して立ち上がり、V字状の断面形状をしているが、外側に弱く張り出す箇所がみられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] III層に被覆されていることから、縄文時代前期以前に埋没したものと考えられる。

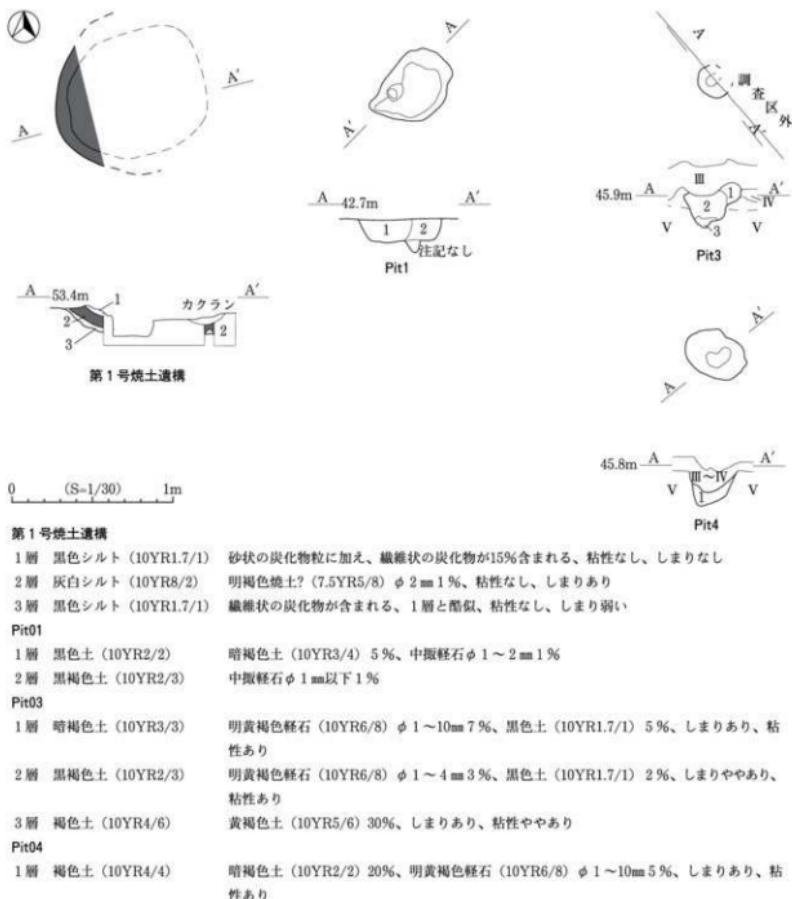


図27 焼土遺構・ピット(柱穴)

第4号ピット(10Pit-04)(図27)

[位置] B区西北端のD G-87グリッドに位置する。V層上面で確認した。

[堆積土] 褐色土主体の単層で、自然堆積と思われる。III~IV層に被覆されている。

[規模] 平面形は梢円形で、開口部規模は40cm×27cm、確認面からの深さは22cmである。

[重複] 認められなかった。

[構造] 壁は底面から直線的に外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をしている。底面は傾斜が認められる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] III~IV層に被覆されていることから、縄文時代前期以前に埋没したものと考えられる。

第3節 遺構外出土遺物

本遺跡の遺構外からは、縄文時代の土器・石器と、古代の土器・土製品が出土している。

1 縄文土器(図28~30)

縄文土器は362点(接合前・6249.5g)出土し、うち33点(接合後点数)を図示した。

縄文時代早期中葉の土器(図28~29-1~図30-22)

1~2はA区のIII層から出土したもので、同一個体と考えられる。口縁部で、ゆるい波状口縁と思われる。口唇部は丸く整えられている。外面は、貝殻腹縁文の上に細い工具による2本1対の沈線が、口縁部は鋸歯状に、胴部はL字状に施され、沈線が交差する箇所に円形刺突がなされる。内面は口縁部に継位の貝殻腹縁文が施されている。物見台式に相当する土器と考えられる。

3~22はB区のIII~IV層から出土したもので、出土状況を図28に示した。3は略完形、4~9・13~15は口縁部、10~12・16~21は胴部片、22は底部である。尖底の深鉢形で、4対の突起を持つ波状口縁である。口唇部は平坦に整えられているものと丸く整えられているものとがあり、刺突が施されたものもある。器壁は厚く、纖維を混入している。焼成は良好で、色調は明るい。外面は口縁部に貝殻腹縁文が卓越し、胴部はケズリ・ミガキ・貝殻条痕文・無文などがみられる。口唇直下や頸部には刺突を施すものもある。内面は貝殻条痕文が卓越する。鳥ノ木沢式に相当する土器と考えられる。本遺跡の主体を占める土器で、多くはIV層から出土した。

縄文時代前期前葉の土器(図30-23~30)

23は口縁部、24~30は胴部片である。器壁は薄く、胎土に纖維を混入している。焼成は良好であるが色調はやや暗めである。器面には単節や複節の縄文を施す。堀切沢(2)遺跡A区から出土した土器の主体を占めるものと同類で、早稻田6類c類に近似した土器に比定されるものと思われる。

時期不明の土器(図30-31~33)

31・32は同一個体と考えられる。31は口縁部、32は口縁から胴部片で、口縁は頸部で外反する。胴部はほぼ直立している。口唇は平坦に整えられ、縄文が施されている。器面は、口縁部直下を無文帯とし、頸部には沈線が、胴部には側縁圧痕と単節の縄文が施されている。

33は沈線および刺突文が施された口縁部片である。

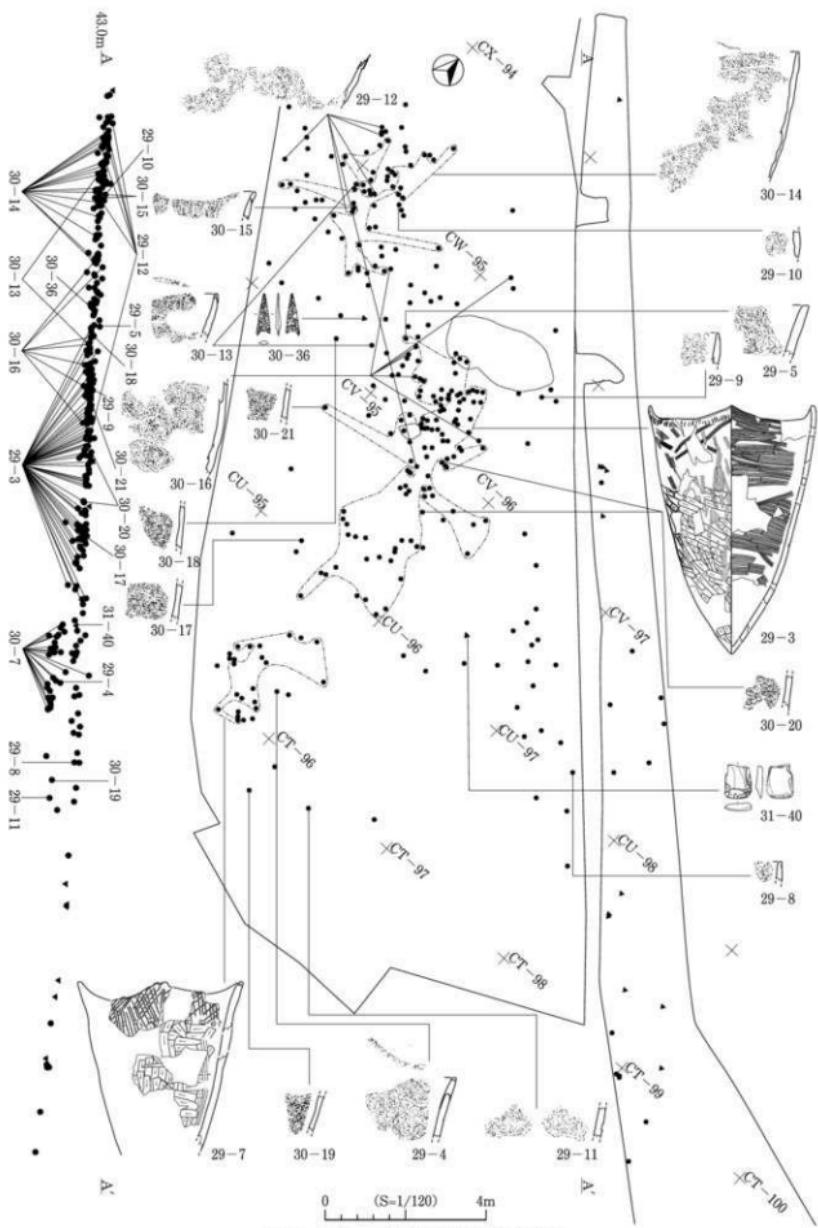


図28 B区・C区遺構外遺物出土状況

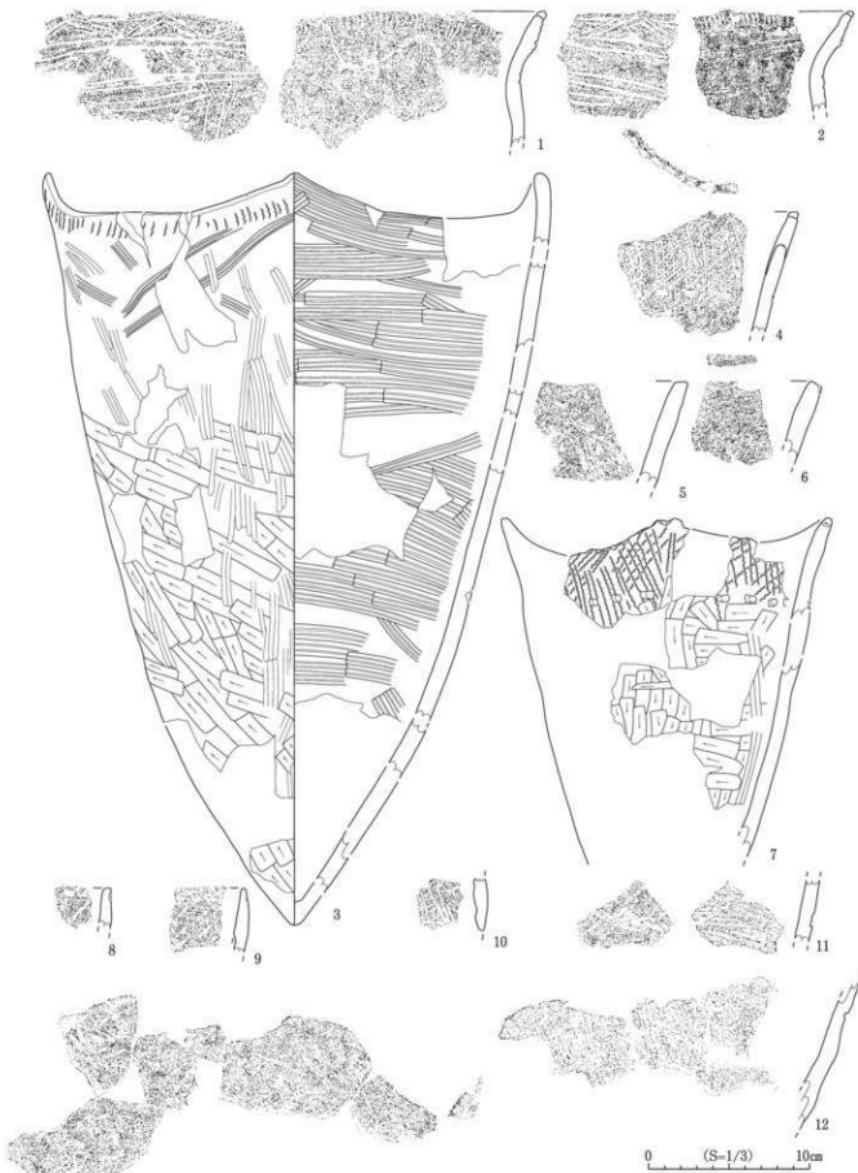


図29 遺構外出土遺物(1)



図30 遺構外出土遺物(2)

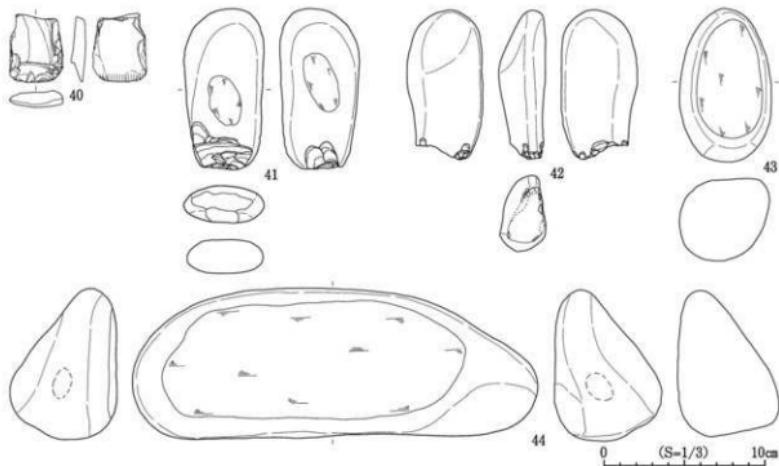


図31 遺構外出土遺物(3)

2. 石器(図30-34~図31-44)

石器は17点(4704.4g)出土し、うち11点を図示した。

34~37は石鎌である。34~36は無茎で、34・35は平基、36は凹基である。37は有茎の凸基のもので、茎部にはアスファルトと思われる黒色の付着物が認められる。38は石錐で、無基部で両面加工のものである。39・40はスクレイパーである。39は片面の二側縁に調整剥離を施したもので、被熱している。40は磨製石斧の欠損品を再利用したものである。41・43・44は磨石で、礫の平坦面を磨り面としている。41は一端部を両面から打ち欠き、縁辺を薄く加工している。42は敲石で、打ち欠いた端部周縁を作用面にしている。

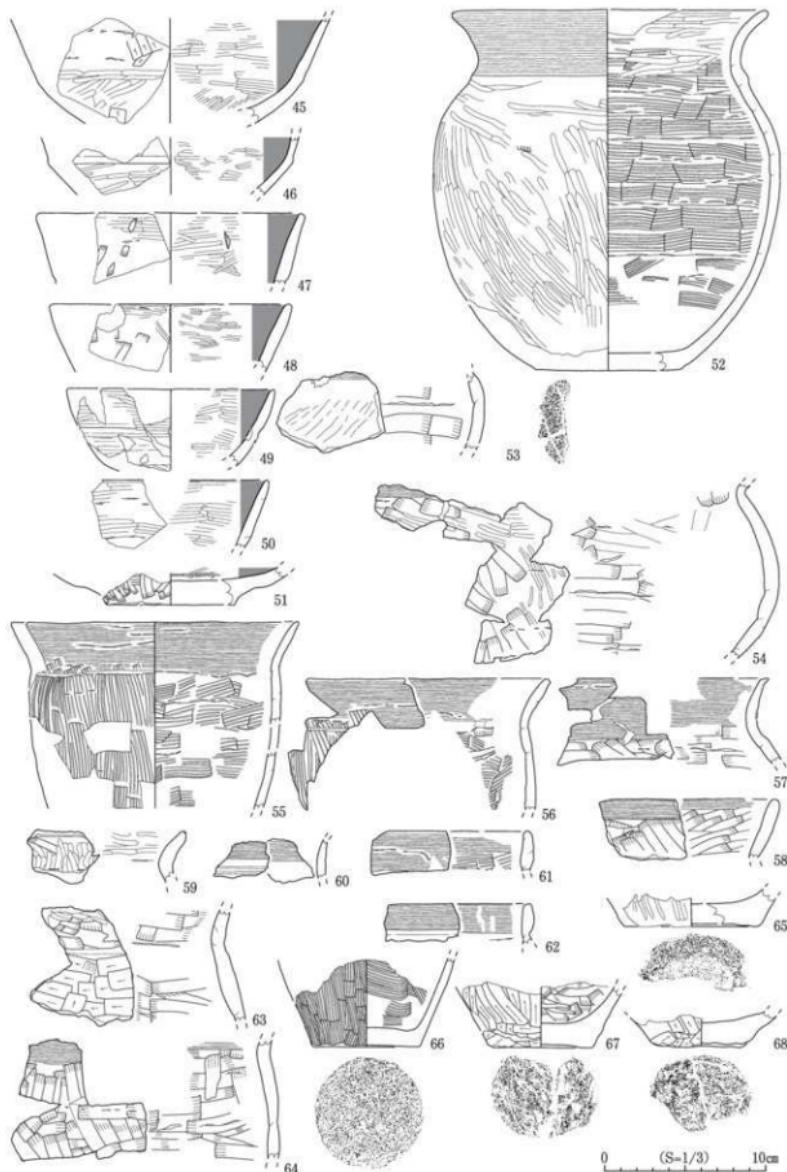


図32 遺構外出土遺物(4)

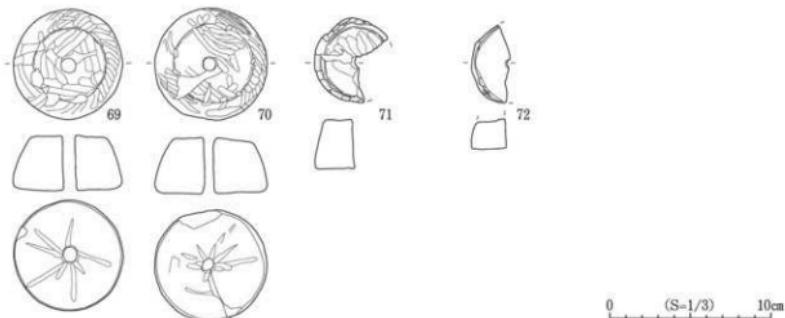


図33 遺構外出土遺物(5)

3. 古代の土器 (図32- 45 ~ 68)

土師器が662点（接合前・6865.5g）出土し、うち24点（接合後点数）を図示した。

45~51は坏である。45・46は胴部、47・48は口縁部、49・50は口縁部から胴部片で、内外面共にミガキが卓越し、内面は黒色処理されている。45・49は胴部に沈線が、46は明瞭な稜が形成されている。51は底部である。平底で、外面調整はナデ主体である。内面はミガキ調整が施され、黒色処理されている。大形坏もしくは鉢である可能性がある。

52~54は球胴甕である。52は略完形で、外面はミガキ、内面はハケメ調整が卓越している。底部には木葉痕がみられる。53・54は胴部片である。

55~68は甕である。55~57は口縁部から胴部、58~62は口縁部、63・64は胴部、65~68は底部である。外面調整は、55・56・66がハケメ、57・64がナデ、59・65がミガキ、63・67・68がケズリ主体で、内面調整は55・56・66がハケメ、57・63・64・67がナデ主体である。口縁部は、外反するものがほとんどであるが、直立するもの(61)や、内湾するもの(62)もある。また、口唇部は、57が平坦である以外は、円く整えられている。60は沈線状の段を有するものである。63は第1号竪穴住居跡付近から出土したもので、図20-14と同一個体と思われる。これらの土器は、外面調整の特徴から、8世紀中頃から後葉の年代が考えられる。

4. 土製品 (図33- 69 ~ 72)

紡錘車が4点出土した。うち2点(69・70)は、第1号竪穴住居跡の南から出土したものである。外面はミガキが、底部にも沈線が放射状に施されている。色調は暗い。71・72は外面にナデ調整が施されたものである。

第5章 自然科学分析

第1節 堀切沢(2)遺跡、堀切沢(3)遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

伊藤 茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jordiani・小林克也・菊地有希子

(株式会社バレオ・ラボ)

1. はじめに

青森県上北郡六戸町大字犬落瀬字堀切沢に位置する堀切沢(2)遺跡および堀切沢(3)遺跡の竪穴住居跡より検出された炭化材について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は、堀切沢(2)遺跡のSI-01(第1号住居跡)の3層から出土した炭化材1点(試料No.1: PLD-17507)、堀切沢(3)遺跡のSI-01(第1号住居跡)のカマド火床面で出土した炭化材1点(試料No.2: PLD-17508)の計2点である。炭化材の樹種は、実体顕微鏡下の観察ではいずれも広葉樹であった。また、堀切沢(2)遺跡の試料No.1は最外年輪以外の部位不明、堀切沢(3)遺跡の試料No.2は樹皮に近い辺材であった(図版1)。堀切沢(2)遺跡のSI-01は、出土土器型式から縄文時代前期初頭、堀切沢(3)遺跡のSI-01は出土土器型式から奈良・平安時代の竪穴住居跡と考えられている。

試料は調製後、加速器質量分析計(バレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	考古学的手法による想定年代	前処理データ	前処理
PLD-17507	試料No.1 遺跡: SI-01 層位: 3層 深度: 地表下約150cm	試料の種類: 炭化材(広葉樹) 試料の性状: 最外以外部位不明 採取位置: 外側-2年輪 状態: dry	縄文時代前期初頭	前処理前重量: 37.38mg 燃焼量: 6.44mg 精製炭素量: 4.23mg 炭素回収量: 1.00mg	超音波洗浄 酸、アルカリ、酸洗浄 (塩酸: 1.2N、水酸化ナトリウム: 1N、塩酸: 1.2 N)
PLD-17508	試料No.2 遺跡: SI-01 層位: カマド火床面 深度: 地表下約50cm	試料の種類: 炭化材(広葉樹) 試料の性状: 樹皮に近い部分 採取位置: 外側-8年輪 状態: dry	奈良・平安時代	前処理前重量: 20.95mg 燃焼量: 7.18mg 精製炭素量: 4.63mg 炭素回収量: 0.96mg	超音波洗浄 酸、アルカリ、酸洗浄 (塩酸: 1.2N、水酸化ナトリウム: 1N、塩酸: 1.2 N)

3. 結 果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めてない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行るために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴C

の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の曆年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ: IntCal09)を使用した。なお、 1σ 曆年年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年年代範囲であり、同様に 2σ 曆年年代範囲は95.4%信頼限界の曆年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果

測定番号	測定回数	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代(yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代(yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を曆年代に較正した年代範囲	
					1σ 曆年年代範囲	2σ 曆年年代範囲
PLD-17507 試料No.1	8	-27.58 \pm 0.16	5734 \pm 27	5735 \pm 25	4651BC (3.5%) 4643BC 4616BC (64.7%) 4531BC	4684BC (17.8%) 4632BC 4623BC (77.6%) 4501BC
PLD-17508 試料No.2	6	-27.38 \pm 0.22	1442 \pm 24	1440 \pm 25	603AD (68.2%) 642AD	575AD (95.4%) 650AD

4. 考 察

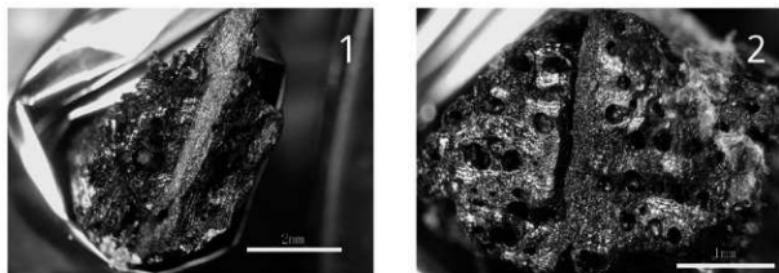
各試料の曆年較正結果のうち、 2σ 曆年年代範囲(95.4%の確率)に着目して結果を整理する。

堀切沢(2)遺跡のSI-01の試料No.1(PLD-17507)は、4684-4632 cal BC (17.8%)および4623-4501 cal BC (77.6%)の曆年年代範囲を示した。小林謙一による繩文土器編年と較正年代との対応関係(小林, 2008)を参照すると、この曆年年代範囲は繩文時代前期前葉に相当し、想定年代と整合的であった。

また、堀切沢(3)遺跡のSI-01の試料No.2(PLD-17508)は、575-650 cal AD (95.4%)の曆年年代範囲を示した。これは6世紀後半~7世紀中頃で、古墳時代末~飛鳥時代に相当し、想定年代の奈良・平安時代よりも古い年代を示した。ただし木材の場合、最外年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最外年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料No.2は樹皮に近い辺材部分ではあるものの、最外年輪は含まれておらず、古木効果の影響を考慮に入れると、試料の木材が枯死もしくは伐採されたのは古墳時代末~飛鳥時代か、それよりも少し新しい年代であった可能性がある。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337–360.
- 小林謙一 (2008) 繩文時代の暦年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」: 257–269, 同成社.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3–20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Sauthon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration



図版1 年代測定をおこなった炭化材試料

1. 塙切沢(2)遺跡SI-01 3層 試料No.1 (PLD-17507), 2. 塙切沢(3)遺跡SI-01 カマド火床面 試料No.2 (PLD-17508)

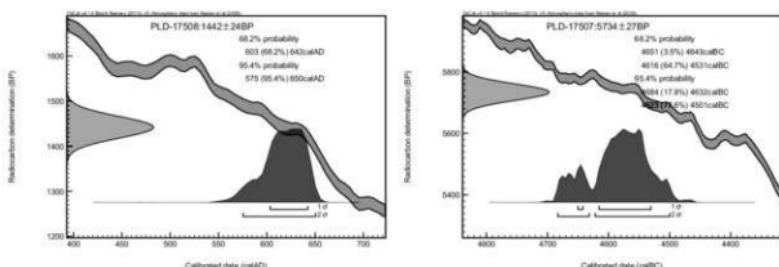


図1 暦年較正結果

第2節 堀切沢(2) 遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展（株式会社バレオ・ラボ）

1. はじめに

上北郡六戸町大字犬落瀬字堀切沢に所在する堀切沢(2) 遺跡より出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、第1号竪穴住居跡の2層

より出土した縄文時代前期前葉の黒曜石
製の石槍1点である（表1）。なお、第

1号竪穴住居跡の3層より出土した炭化材（PLD-17507）の放射性炭素年代測定では、 2σ 历年範囲（95.4%の確率）で4684-4632 cal BC (17.8%) および4623-4501 cal BC (77.6%) の値を示し、縄文時代前期前葉に相当する年代が得られている。

試料は、測定前にメラミンフォーム製のスponジを用いて、測定面表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA 1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム（Rh）、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空中に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍

表2 北海道・東北地方黒曜石産地の判別群

光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月、1999など）。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)とルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

表1 分析対象

分析No	器種	出土遺構	層位	年代
1	石槍	第1号竪穴住居跡	2層	縄文時代前期前葉

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白 湾	白港1	赤石山山頂(43)、八号沢露頭(15)、7の沢川支流(2)、IK露頭(10)、十勝石川露頭直下河床(11)、アジサイの滝露頭(10)
	白 湾	白港2	赤石山山頂、八号沢露頭、八号沢、黒曜の沢、幌加林道(36)
	赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)
	上士幌	上士幌	十勝川(4) タウシュベツ川右岸(42)、タウシュベツ川左岸(10)、十三ノ沢(32)
	置 戸	置戸山	置戸山(5)
	置 浦	所 山	所山(5)
	置 浦	置 浦	置泉(10)
	旭 川	旭川	近文台(8)、雨断台(2)
	名 寄	名 寄	忠烈布川(19)
	秩父別	秩父別 1	秩父別 1
青 森	秩父別	秩父別 2	中山(66)
	通 載	秩父別 3	中山(66)
	生田原	通 載	社名瀬川河床(2)
	留辺蘂	生田原	仁田布川河床(10)
	留 边 蘂	留 边 蘂 1	ケシヨマップ川河床(9)
	留 路	留 边 蘂 2	留路市宮スキー場(9)、阿寒川右岸(2)、阿寒川左岸(6)
	木 造	留 路	出来島海岸(15)
	深 浦	木 造	岡崎浜(7)、八森公園(8)
	秋 田	男 鹿	金ヶ崎温泉(10)
	岩 手	金ヶ崎	臨本海岸(4)
宮 城	北上川	北上折腰 2	北上川(9)
	山 形	月 山	月山石割(10)
	高 崎	湯ノ會	湯ノ會(40)
	色 麻	根岸	根岸(40)
福 岐	仙 台	秋保	土蔵(18)
	塙 畠	塙 畠	塙畠(10)

1) Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

2) Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

3) Mn強度 × 100 / Fe強度

4) log (Fe強度 / K強度)

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図（横軸Rb分率 - 縦軸Mn強度 × 100 / Fe強度の判別図と横軸Sr分率 - 縦軸log (Fe強度 / K強度) の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定するものである。この方法は、指標値に蛍光X線のエネルギー差ができる限り小さい元素同士を組み合わせて算出しているため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊である出土遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。

なお、厚みについては、かなり薄くても測定可能であるが、それでも0.5mm以下では影響をまぬがれないといわれる（望月、1999）。極端に薄い試料の場合、K強度が相対的に強くなるため、log (Fe強度 / K強度) の値が減少する。また、風化試料の場合でも、log (Fe強度 / K強度) の値が減少する（同上）。そのため、試料の測定面にはなるべく奇麗で平坦な面を選び、測定した。測定結果が判別群からかけ離れた値を示した場合は、測定面を変更するか、あるいはメラミンフォーム製スponジで再度表面の洗浄を行った後、何回か再測定を行って検証した。原石試料も、採取原石を割って新鮮な面を表させた上で産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に判別群一覧とそれぞれの原石採取地点および点数を、図1に各原石産地エリアの分布図を示す。

3. 分析結果

図2および図3に、黒曜石原石の判別図に今回の試料のデータをプロットした図を示す。各図では、視覚的にわかりやすくするために各判別群を楕円で取り囲んである。分析の結果、今回の試料は北海道東部に位置する置戸エリアの所山群の範囲にプロットされた。測定値および産地推定結果を表3に示す。

表3 測定値および産地推定結果

分析No	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn × 100 Fe	Sr分率	$\log \frac{Fe}{K}$	判別群	エリア
1	226.5	67.8	1544.5	591.9	336.4	281.8	706.6	30.88	4.39	17.55	0.83	置戸	所山

4. おわりに

堀切沢(2)遺跡出土の黒曜石製の石槍1点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、北海道東部に位置する置戸エリアの所山群と推定された。

引用文献

望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定、大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2 一上和田城山遺跡篇一」:172-179、大和市教育委員会。

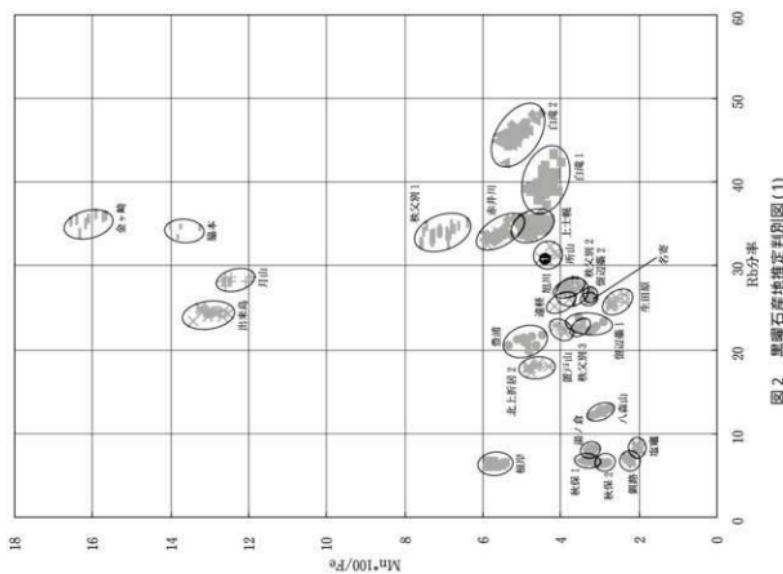


图2 黑曜石产地推定判别图(1)

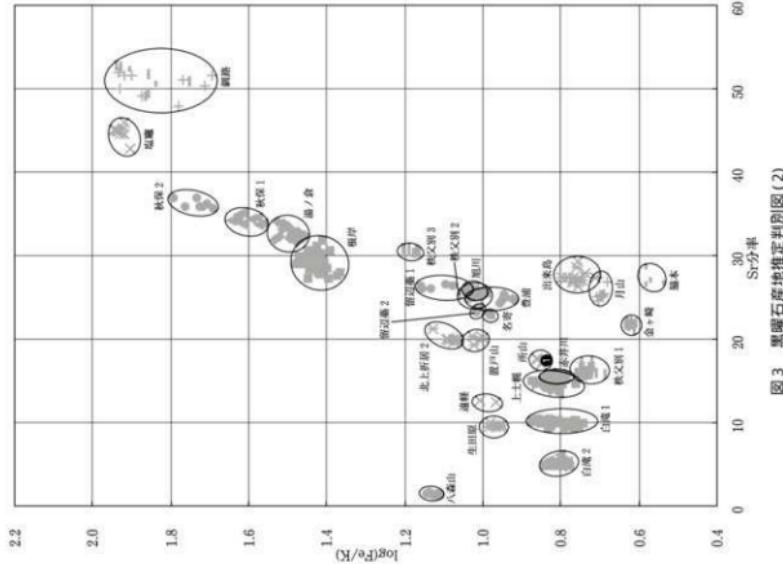


图3 黑曜石产地推定判别图(2)

第6章 総括

前章まで、堀切沢(2)遺跡・堀切沢(3)遺跡の各遺跡ごとに記述をしてきたが、ここでは、両遺跡をまとめ、時期ごとに総括を行う。

第1節 縄文時代

遺構について

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡、溝状土坑、土坑が検出されている。

竪穴住居跡は堀切沢(2)遺跡A区から2軒検出された。住居間隔は約17mである。竪穴住居跡の年代は、第1号竪穴住居跡は、中撤軽石を含むⅢ層に被覆されていることや出土遺物、また、炭化物の放射性炭素年代測定結果から、縄文時代前期中葉の早稻田6類期以前に廃絶・埋没したものと考えられる。第2号竪穴住居跡も、堆積土から出土した遺物の年代から、第1号竪穴住居跡と同様の年代が考えられる。

溝状土坑は堀切沢(2)遺跡A区および堀切沢(3)遺跡A・B・E区から検出された。なお、堀切沢(3)遺跡A区で検出されたのは調査区の北端と南端からで、中央からは検出されなかった。溝状土坑は、堆積土中から縄文時代前期前葉の土器が出土したものがあるものの、確認面や他遺跡の調査例を考慮すると、縄文時代中期末葉以降に構築されたと推定される。溝状土坑は、堀切沢(3)遺跡のA区南端では等高線に直行しているものの、他は全て平行に配置されている。

土坑は、堀切沢(3)遺跡A区の第4号土坑が、逆茂木痕と推定される小穴の存在から縄文時代早期の落とし穴と推定される。

遺物について

遺物は、縄文土器、石器が出土した。主体となるのは縄文時代早期中葉から前期前葉の土器で、堀切沢(2)遺跡A区で縄文時代前期前葉、B区で縄文時代早期後葉、また、堀切沢(3)遺跡B区から縄文時代早期中葉の遺物包含層が確認された。なお、堀切沢(3)遺跡A区からも、縄文時代早期中葉の物見台式土器が集中する箇所が確認されている。

縄文時代早期中葉以前の土器は、堀切沢(2)遺跡A区から1点出土した。外面に貝殻条痕文が施される脛部小片であり型式は不明である。

縄文時代早期中葉の土器は堀切沢(3)遺跡のA・B区から出土した。A区から出土したものは、ゆるい波状口縁を持つ深鉢と思われ、外面は貝殻腹縁文の上に細い工具による2本1対の沈線が、口縁部は鋸歯状に、脣部はL字状に施され、沈線が交差する箇所に円形刺突がなされる。口唇部は丸く整えられ、内面は口縁部に継位の貝殻腹縁文が施されている。Ⅲ層から出土した。物見台式に相当する。B区から出土したものは、波状口縁の尖底の深鉢である。器壁は厚く、纖維を混入している。焼成は良好で、色調は明るい。波長部は4対で、脣部は平坦もしくは丸く整えられて、刺突が施されたものもある。外面は口縁部に貝殻腹縁文が卓越し、脣部はケズリ・ミガキ・貝殻条痕文・無文などがみられる。口唇直下や脣部には刺突を施すものもある。内面は貝殻条痕文が卓越する。鳥ノ木沢式に相当する土器と考えられる。本遺跡の主体を占める土器で、Ⅲ～Ⅳ層から出土しているが、多くはⅣ層から出土した。

縄文時代早期末葉の土器は、堀切沢(2)遺跡B区のIII~IV層から出土した。胎土に纖維を混入し、器壁は厚く焼成はやや軟質である。単軸絡状体第1類を施している。早稻田5類に比定される。

縄文時代前期前葉の土器は、堀切沢(2)遺跡A区および堀切沢(3)遺跡A区・E区から出土した。主にIII層からの出土である。平口縁で丸底の深鉢形の土器である。胎土に纖維を混入し、器壁は薄く焼成は良好であるが、色調はやや暗めである。口唇は籠状の工具で平坦に整えられている。底部には乳房状突起を持つものもある。単節や複節の縄文を施すほか、口縁部や胴部に単軸絡状体第1類を縱位に施し、帯状の文様帶を形成するものもある。早稻田6類cとして分類されていたが、近年は類例が増加し、分離されるべきであるという見解も見られるものである。

縄文時代前期中葉以降の土器は、堀切沢(2)遺跡A区から出土した。平底で、纖維を混入しているもので、円筒下層式と思われる。

石器の出土量は土器に比して少なく、石鎌・石錐・石匙・スクレイバー・磨石・敲石で、器種も少ない。

土地利用について

遺構および遺物は、丘陵の縁辺部から検出・出土しており、丘陵縁辺部を集中して土地利用していくことが窺われる。堀切沢(3)遺跡は、縄文時代早期の物見台式期、次いで鳥ノ木沢式期、早稻田5類の各期で遺物包含層が地点を替えて形成された。また、落とし穴が構築され、狩猟場としても使用されたものの、早期での利用状況は低調である。縄文時代前期には、前葉に堀切沢(2)遺跡で小規模な集落が形成され、堀切沢(2)遺跡および堀切沢(3)遺跡で遺物包含層が形成された。しかし、その後は中期末葉以降に狩猟場として利用されるに過ぎない。

平成2年度の調査結果とも照らし合わせると(図34)、溝状土坑は丘陵の縁辺に、等高線に沿って幅40m以上、幾段にもわたって構築されていたことが判明した。また、平成2年度調査の遺物の出土位置については、文章記載から割り出した大凡であるものの、時期ごと、土器形式ごとに地点を替えて遺物包含層が形成されていることがわかる。特に、堀切沢(2)遺跡A区は平成2年度調査の遺物包含層と一連をなすもので、その範囲は幅50m・長さ80mにも及ぶ可能性が高いものと思われる。

遺跡周辺では、通目木遺跡、坪毛沢(3)遺跡・根古橋遺跡で縄文時代早期・前期の遺構・遺跡が確認されているものの、遺構は土坑(落とし穴)のみであり、その検出数も少なく、遺物量も多いものではないことから、当地での早期の活動は活発ではなかったものと推測される。

その中で、当遺跡は複数型式にわたる遺物が出土しただけでなく、遺物包含層も確認されたことから、当地は比較的活動が盛んな場所であったと推測される。

第2節 古代

遺構について

古代の遺構は、竪穴住居跡が、堀切沢(3)遺跡A区から1軒検出された。南向きの緩斜面に構築されている。カマドは北壁の中央に造られ、煙道部は半地下式と推測される。袖は、楕を芯材とし、更に楕の中には砂岩をブロック状に切り出したものが入れられていた。壁溝は途切れながら壁に沿って巡り、柱穴は北東隅から1基、南西隅付近から2基確認された。貼床下から不整円形で浅い土坑がカマドおよび南西隅で確認された。遺物は、カマドと南壁周辺から出土している。カマドから出土した

炭化物の放射性炭素年代測定では6世紀後半から7世紀中葉の暦年代範囲が得られたものの、古木効果の影響で古い年代が算出された可能性があり、外面調整の特徴から、8世紀中頃から後葉の年代が考えられる。

遺物について

竪穴住居跡の周辺に土師器・土製品（紡錘車）が集中する。住居内出土遺物と遺構外出土遺物とが接合していることから、これらは同時期の遺物と考えられる。出土した土師器には、壺、球胴甕、甕がある。

壺は完全に復元できたものはない。非口クロ形成で、内外面共にミガキが卓越し、内面は黒色処理されている。胴部に沈線、もしくは明瞭な稜が形成されている。丸底であるが、1点のみ平底のものがあり（図32-51）、大形壺もしくは鉢と思われる。

球胴甕は、外面はミガキ、内面はハケメ調整が卓越したものである。

甕は、非口クロ形成で、外面調整の主体はハケメ、ナデ、ミガキ、ケズリと様々である。口縁部形状は外反するものがほとんどであるが、直立するものや、内湾するものもある。底部は、内面は平坦で、外部は張り出しがない。20-12-14および62は下半にはケズリが、上半にはミガキが施され、胴部下半で屈曲する器形をする特異なものである。

外面調整の特徴から、8世紀中頃から後葉の年代が考えられる。

平成2年度の調査結果とも照らし合わせると（図35）、今回検出された住居跡は平成2年度調査の竪穴住居跡群の隣接地で検出されていることから、平成2年度調査で確認された奈良時代の集落の一部であると推測される。しかし、住居間隔が約10mと近いことや、カマド主軸方位が大きく西に傾くなど、平成2年度調査のものと若干異なっている。出土遺物は、高壺の出土がないことや、特定の廃棄ブロックが見られないといった差違も確認されるものの、壺・甕とともに非口クロ形成であることや、須恵器がないなどの共通点があることから、ほぼ同時期の遺構・遺物と見なすことができる。

遺跡周辺で同時代の遺跡は確認されていないことから、本遺跡は谷に囲まれた丘陵に構築された小規模な集落で、存続期間は8世紀中頃から後葉と推測される。



図34 縄文土器出土状況

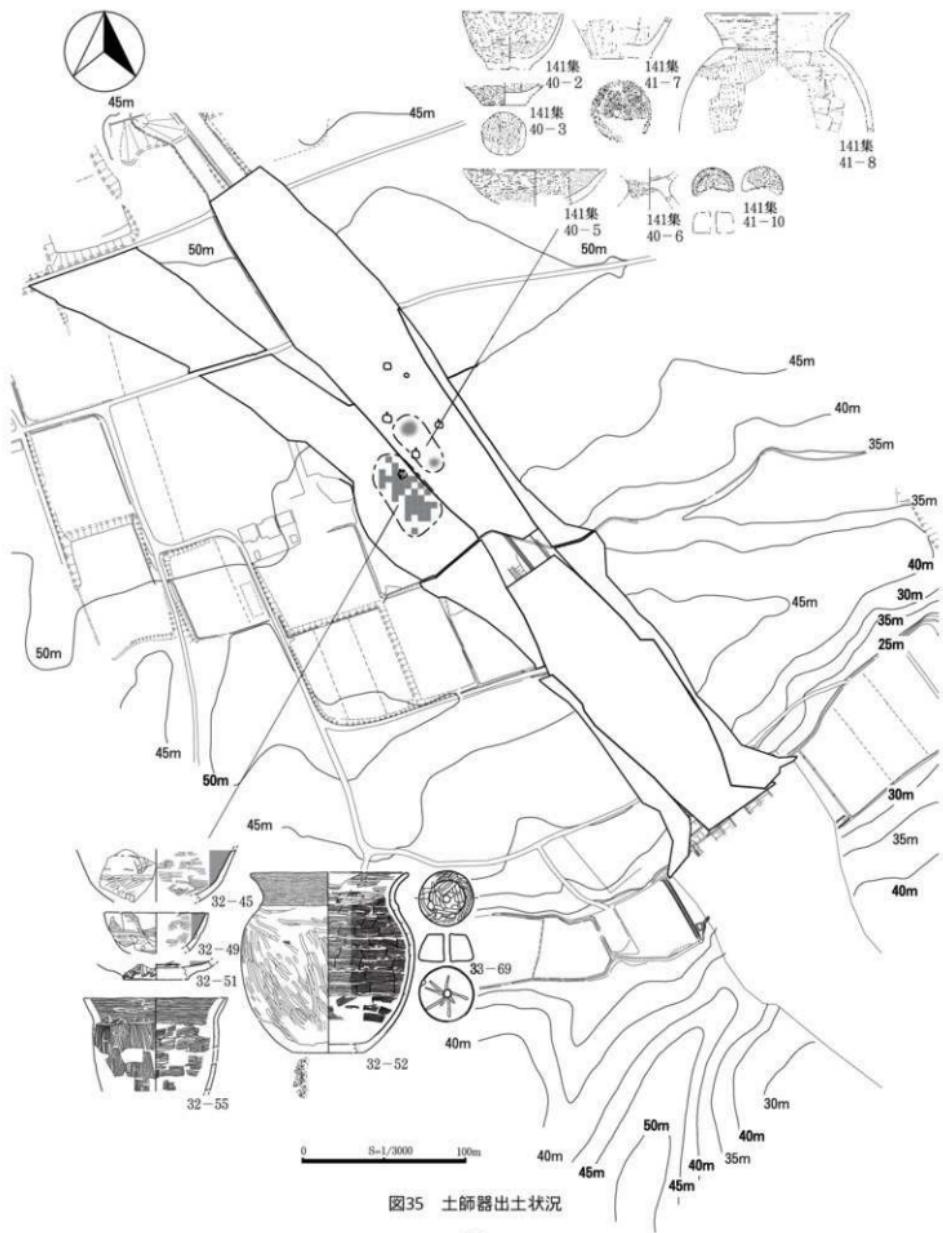


図35 土師器出土状況

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1987 弥栄平(4)・(5)遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第106集
- 青森県教育委員会 1989 青森県遺跡詳細分布調査報告書I 青森県埋蔵文化財調査報告書第123集
- 青森県教育委員会 1992 堀切沢(2)・(3)・(4)・(5)遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第141集
- 青森県教育委員会 2003 横館遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第342集
- 青森県教育委員会 2004 宮田館遺跡IV 青森県埋蔵文化財調査報告書第365集
- 青森県教育委員会 2005 通目木遺跡・ふくべ(3)遺跡・ふくべ(4)遺跡
青森県埋蔵文化財調査報告書第392集
- 青森県教育委員会 2008 青森県遺跡詳細分布調査報告書20 青森県埋蔵文化財調査報告書第459集
- 青森県教育委員会 2010 大落瀬柳沢遺跡・根古橋遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第481集
- 青森県教育委員会 2011 根古橋遺跡II 青森県埋蔵文化財調査報告書第498集
- 十和田市教育委員会 1999 寺下遺跡発掘調査報告書 十和田市埋蔵文化財発掘調査報告第8集
- 十和田市教育委員会 2004 山ノ外遺跡 十和田市埋蔵文化財発掘調査報告第11集
- 青森県史編さん近世部会 2003 青森県史 資料編 近世4
- 六戸町史編集委員会 1993 六戸町史 上巻
- 六戸町史編集委員会 1993 六戸町史 中巻
- 六戸町史編集委員会 1993 六戸町史 下巻
- 宇部則保 1989 「青森県における7・8世紀の土師器-馬淵川下流域を中心として-」
北海道考古学 第25輯
- 宇部則保 2007 「ix. 青森県南部～岩手県北部」
古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究 東北学院大学文学部
- 熊谷常正 2008 「縄文条痕文系土器(東北地方)」 総覧 縄文土器 総覧 縄文土器 編集委員会
- 武藤康弘 2008 「表館式・早稻田6類土器」 総覧 縄文土器 総覧 縄文土器 編集委員会

塙切沢(2)遺跡 土器

回収番号	区	出土地点	部位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様などの特徴	時期	備考
国9-1	A区	SI-01 BD-113	2層 2層 以下 IV層	深鉢	銅鋸(下手)	(一)	(一)	(6.5)	L.R.+熟文／内面環付着 ／織維	早稲田5類	P-2, 9, 67
国9-2	A区	SI-01 SI-02 BC-113 BE-114 BF-BC-110-111	2層 1層 重層	深鉢	口縁部～脚部	(30.4)	(一)	(27.6)		早稲田6類	P-1～5, 7, 8, 11, 55, 77 レンチ3
国9-3	A区	SI-01 BD-114 BF-BC-110-111	2層 重層	深鉢	口縁部～脚部	(一)	(一)	(8.4)	R.L.(5段多条)縦文／内 面環付着／織維	早稲田6類	P-16, 104 レンチ3
国9-4	A区	SI-01	4層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(5.0)	波路?	早稲田6類	P-13
国9-5	A区	SI-01	2層 3層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(4.1)	L.R.?／内面環付着／織 維	早稲田6類	P-6, 18
国9-6	A区	SI-01	2層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(3.6)	L.R./内面環付着／織維	早稲田6類	
国9-7	A区	SI-01	2層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(5.2)	L.R./内面環付着／織維	早稲田6類	P-17
国9-8	A区	SI-01	4層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(5.5)	L.R./内面環付着／織維	早稲田6類	P-14
国9-9	A区	SI-01	2層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(5.5)	L.R.?／内面環付着／織 維	早稲田6類	P-10, 12
国10-1	A区	SI-02	1層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(6.5)	R.L.+單輪轍条1類／ 内面環付着／織維	早稲田6類	P-3
国10-2	A区	SI-02	2層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(4.5)	R.L.	早稲田6類	P-1
国11-1	A区	SV-01	堆積土	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(2.8)	R.L.R./織維	早稲田6類	P-1
国11-2	A区	SV-03	2層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(8.5)	單輪轍条1類／内面環 付着・ケズリ／織維	早稲田6類	
国11-3	A区	表層	表層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(3.9)	貝殻盃底／織維		早期中葉以前
国14-2	B区	BE-125	IV層	深鉢	口縁部	(一)	(一)		單輪轍条1類／内面環 付着／織維	早稲田5類	P-6
国14-3	B区	BE-125	IV層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)		單輪轍条1類／内面環 付着／織維	早稲田5類	P-4, 5, 7
国14-4	B区	BE-125	IV層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)		單輪轍条1類／内面環 付着／織維	早稲田5類	P-2, 3, 8
国14-5	D区	BL-124	Ⅲ層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(4.2)	單輪轍条1類／内面環 付着／織維	早稲田5類	P-4
国14-6	A区	BE-BE-109-110 BC-113	Ⅲ層 IV層	深鉢	口縁部～脚部	(一)	(一)	(23.1)	L.R.+單輪轍条1類／ 内面環付着・ケズリ／織 維	早稲田6類	P-57, 80, 81, 83, 84, 95, 96 レンチ3
国14-7	A区	BE-BE-109	Ⅲ層	深鉢	口縁部～脚部	(12.8)	(一)	(12.8)	L.R.(5段多条)／内面環 付着・ケズリ／袖孔化／ 織維	早稲田6類	P-73, 85 レンチ3
国14-8	A区	BC-114	Ⅲ層	深鉢	口縁部～脚部	(一)	(一)	(7.3)	L.R./織維	早稲田6類	P-109, 110
国14-9	A区	BE-113 BE-BE-111～113	Ⅲ層	深鉢	口縁部～脚部	(一)	(一)	(5.7)	L.R./織維	早稲田6類	レンチ10+II
国14-10	A区	BE-113 BE-BE-111～113	Ⅲ層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(3.0)	R.L.縫目／織維	早稲田6類	レンチ2
国14-11	A区	BE-BE-109-110	Ⅲ層	深鉢	口縁部～脚部	(一)	(一)	(3.5)	R.L./織維	早稲田6類	レンチ3
国14-12	A区	BE-113 BE-BE-111～113	Ⅲ層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(3.8)	R.L./織維	早稲田6類	レンチ2
国14-13	A区	BE-112	IV層	深鉢	口縁部～脚部	(一)	(一)	(4.8)	R.L./織維	早稲田6類	P-65
国14-14	A区	BE-BE-109-110	Ⅲ層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(3.2)	單輪轍条1類／織維	早稲田6類	レンチ9
国14-15	A区	BE-113 BE-BE-111～113	Ⅲ層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(2.9)	L.R.?	早稲田6類	
国14-16	A区	BE-113 BE-BE-111～113	Ⅲ層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(2.65)	L.R./織維	早稲田6類	レンチ2
国14-17	A区	BE-113 BE-BE-111～113	IV層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(3.5)	L.R.L./織維	早稲田6類	レンチ2
国14-18	A区	BD-112	IV層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(2.05)	L.R./織維	早稲田6類	P-50
国14-19	A区	BD-113 BE-BE-110	Ⅲ層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(18.7)	L.R.L./内面ケズリ／外 面環付着／織維	早稲田6類	P-41, 89～91, 93, 94
国14-20	A区	BC-114	Ⅲ層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(7.7)	L.R./内面ケズリ／織維	早稲田6類	P-111, 112
国14-21	A区	BE-113 BE-BE-111～113	Ⅲ層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(9.0)	L.R./織維	早稲田6類	レンチ2
国14-22	A区	BE-113 BE-BE-111～113	Ⅲ層 IV層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(12.5)	L.R./織維	早稲田6類	P-31, 37 レンチ2
国14-23	A区	BA-111 BE-113～115	Ⅲ層 IV層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(11.0)	L.R./織維	早稲田6類	P-13, 14 レンチ10+II
国14-24	A区	BE-109-110-113 BE-BE-111～113	Ⅲ層 表層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(9.0)	L.R.L./織維	早稲田6類	P-16, 20, P-4 レンチ2×3
国14-25	A区	BD-112	Ⅲ層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(5.9)	L.R./織維	早稲田6類	P-30
国14-26	A区	BE-BE-109-109 BE-108	Ⅲ層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(5.7)	L.R./織維	早稲田6類	レンチ5
国14-27	A区	BC-114	Ⅲ層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(6.3)	L.R./織維	早稲田6類	P-113
国14-28	A区	BD-112	Ⅲ層 IV層	深鉢	銅鋸	(一)	(一)	(4.2)	L.R./内面ケズリ／織維	早稲田6類	P-25, 26, 53

国版番号	区	出土地点	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	基高(cm)	文様などの特徴	時期	備考
国15-29	A1K	BF・BG-110+111	Ⅲ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(3.5)	R L R / 内面襷付鉢 / 磁鑑	早稲田6類	トレンチ3
国15-30	A1K	BF・BG-110+111	Ⅲ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(4.7)	R L / 磁鑑	早稲田6類	トレンチ3
国15-31	A1K	BC・BB-109+110	Ⅲ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(5.8)	L R L / 磁鑑	早稲田6類	トレンチ9
国15-32	A1K	BC・BB-109+110	Ⅲ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(4.8)	L R L ? / 磁鑑	早稲田6類	トレンチ9
国15-33	A1K	BD-112	Ⅲ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(3.4)	L R (△段多条?) / 磁鑑	早稲田6類	P-32
国15-34	A1K	BD-111~113 BE-113 BF-111~113	IV層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(2.2)	L R / 磁鑑	早稲田6類	トレンチ2
国15-35	A1K	BE-107+108 BE-107	Ⅲ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(3.7)	L R / 磁鑑	早稲田6類	トレンチ6
国15-36	A1K	BD-113	Ⅲ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(5.5)	R L / 磁鑑	早稲田6類	P-103
国15-37	A1K	BD-111~113 BE-113 BF-111~113	Ⅲ層 IV層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(7.1)	R L / 磁鑑	早稲田6類	トレンチ2
国15-38	A1K	BE-108+109 BJ-108	Ⅲ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(8.8)	L R / 磁鑑	早稲田6類	トレンチ5
国15-39	A1K	BD-111~113 BE-113	Ⅲ層, IV層 表張	深鉢	胴部~底部	(一)	(一)	(11.6)	L R / 丸底 / 磁鑑	早稲田6類	P-22, 23 トレンチ2
国15-40	A1K	BE-110~109 BJ-108	Ⅲ層	深鉢	胴部~底部	(一)	(一)	(5.3)	L R L / 丸底 / 磁鑑	早稲田6類	トレンチ5
国15-41	A1K	BD-112	Ⅲ層	深鉢	胴部~底部	(一)	(一)	(3.8)	L R (△段多条?) / 丸底 / 磁鑑	早稲田6類	P-28, 42, 43, 64
国15-42	A1K	BE-BF-109+110	Ⅲ層 IV層	深鉢	底部	(一)	(一)	(4.0)	L R / 丸底 / 磁鑑	早稲田6類	トレンチ3
国15-43	A1K	BD-112	Ⅲ層	深鉢	底部	(一)	(一)	(2.5)	L R / 丸底 / 磁鑑	早稲田6類	P-24
国15-44	A1K	BF-110	Ⅲ層	深鉢	底部	(一)	(一)	(1.8)	L R ? / 乳状突起? / 磁鑑	早稲田6類	P-78
国15-45	A1K	BF-110	Ⅲ層	深鉢	底部	(一)	(一)	(2.05)	L R / 乳房状突起 / 磁鑑	早稲田6類	P-82
国15-46	B1K	BJ-128	I層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(5.7)	L R / 外面磨着	不明	
国15-47	B1K	表張	表張	深鉢	胴部	(一)	(一)	(6.0)	L R	不明	
国15-48	B1K	表張	表張	深鉢	胴部	(一)	(一)	(4.0)	L R / 内面ナデ	不明	
国15-49	B1K	BJ-128	IV層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(2.4)	無文	不明	
国15-50	A1K	BA-114 BF-BG-113~115	Ⅲ層	深鉢	底部	(一)	(12.0)	(1.9)	L R / 平底 / 磁鑑	円筒下端	P-14 トレンチ10+11

堀切汎(3) 遺跡 土器

国版番号	区	出土地点	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	基高(cm)	文様などの特徴	時期	備考
国20-1	A1K	SI-01 DA-75	堆積土 I層 表張	環	口縁部~胴部	13.6	(一)	(4.0)	内面: ナデ・ヨコナデ/ 外面: 1: ギ		
国20-2	A1K	SI-01 DB-76	床面	環	胴部~底部	(一)	(一)	(1.65)	内面: 1: ギ / 内面: ケ ズリ・1: ギ / 黒色処理	P-23, P-X	
国20-3	A1K	SI-01 BD-74+75 BD-75	堆積 II層 II層	環	口縁部~胴部	17.0	(一)	(28.7)	内面: ナデ・ヨコナデ/ 外面: ハケメ	P-13, 16, 17, 18, 20, P-X	
国20-4	A1K	SI-01 カマド	I層	甕	口縁部	(13.0)	(一)	(3.0)	内外面ヨコナデ		P-9
国20-5	A1K	SI-01 カマド	火床直面	甕	口縁部~胴部	(13.8)	(一)	(5.2)	内面: ハケメ・ヨコナデ/ 内面: ナデ・ヨコナデ		P-24
国20-6	A1K	SI-01 カマド CF-74 DA-75	火床直面 石器 堆積 II層	甕	口縁部~胴部	16.8	(一)	(12.1)	外面: ケズリ・1: ギ + ヨコナデ / 内面: ハケメ・ ヨコナデ	P-24, P-25, P-X	
国20-7	A1K	SI-01 CW-CY-76	1層 口縁 直面	甕	口縁部~胴部	(13.0)	(一)	(3.9)	内外面ヨコナデ		P-21, P-X
国20-8	A1K	SI-01 CY-76	2層 堆積 I層	甕	口縁部~胴部	(14.8)	(一)	(17.0)	外面: ケズリ・ナデ・ヨ コナデ / 内面: ナデ・ヨ コナデ	P-20, 28, P-X	
国20-9	A1K	SI-01	1層	甕	胴部	(一)	(一)	(4.9)	内面: ナデ・ヨコナデ/ 内面: ハケメ・ヨコナデ		P-20
国20-10	A1K	SI-01	1層	甕	胴部	(一)	(一)	(3.8)	内外面ナデ		P-18, 20
国20-11	A1K	SI-01 BB-74+75	1層 II層	甕	胴部	(一)	(一)	(9.1)	外面: ナデ / 内面: ハケ メ		P-20, P-X
国20-12	A1K	SI-01 SI-01 カマド	1層	甕	胴部	(一)	(一)	(7.6)	内面: 1: ギ / 内面: ケ ズリ・1: ギ	P-21, 27, P-X	
国20-13	A1K	SI-01 カマド CY-74	堆積 I層	甕	胴部	(一)	(一)	(8.45)	外面: ケズリ・1: ギ / 内面: ナデ・1: ギ / 被 燒痕		
国20-14	A1K	SI-01 カマド CY-76 DC-73	堆積 I層	甕	胴部~底部	(一)	(7.6)	(17.7)	外面: ケズリ・1: ギ / 内面: ナデ・1: ギ / 被 燒痕		P-26, P-X
国20-15	A1K	SI-01 DB-75	1層 I層	甕	胴部~底部	(一)	7.0	(9.1)	内外面ナデ / 内外面 ナデ		P-14, P-X
国20-16	A1K	SI-01 DB-75	1層 I層	甕	底部	(一)	(8.2)	(3.65)	内外面ナデ / 内外面 ナデ		P-15, P-X

國版番号	区	出土地点	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	文様などの特徴	時期	備考
国29-17	A区	SI-01 カマツ BA-75 DC-73	縦溝面 1号土 前 1号土 后	甕	胴部～底部	(一)	(7.4)	(11.0)	外面：ケズリ／内面：ハ タメ／外面焼付着	P-1, 2, 6, 25, P-3	
国21-18	A区	SI-01 カマツ DC-74 DP-72	1層 大床面直上 堆積土上 1号土	甕	胴部～底部	(一)	7.2	(11.6)	外面：ハタメ／内面：ナ ダ／外面焼付着／木製箋	P-3～5, 7, 24, P-3	
国21-19	A区	SI-01	床直 1層	甕	胴部～底部	(一)	7.4	6.95	内外面ハタメ／外面焼付 着	P-22, P-3	
国21-20	A区	SI-01	1層	甕	底部	(一)	6.6	(2.7)	外面：ハタメ	P-20	
国29-1	A区	CH-79 CX-78	Ⅲ層	深鉢	口縁部～胴部	(一)	(一)	(8.0)	貝殻刺突～沈窓～円形刺 突／1と同一個体	物見台式	P-4, 5
国29-2	A区	CX-78	Ⅲ層	深鉢	口縁部～胴部	(一)	(一)	(6.05)	貝殻刺突～沈窓～円形刺 突／1と同一個体	物見台式	P-3
国29-3	B区	CH-CU-CV-95 CU-CV-94	Ⅳ層	深鉢	略尖形	30.6	(一)	(44.0)	ケズリ／目録刺突～1段状 口縁／内面：目録刺突	鳥/木沢式	P-31～34, 41, 66～68, 70, 71, 74～84, 86～91, 93, 95, 99, 106, 107, 109～113, 149～152, 147, 147, 153, 164, 175～178, 175～178, 175～ 178, 175～178, 175～178, 217, 219, 220, 224～226, 228～237, 239～243, 257, 260～261, 270～280, 286, 289, 302
国29-4	B区	CT-95	Ⅲ層	深鉢	口縁部～胴部	(一)	(一)	(7.5)	貝殻刺突(父文)～刺突 状口縁／口部割裂突／1と同一 個体?	鳥/木沢式	P-305
国29-5	B区	CV-94	Ⅳ層	深鉢	口縁部～胴部	(一)	(一)	(6.9)	無文／波状口縁	鳥/木沢式	P-99
国29-6	B区	CT-95	Ⅲ層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(5.1)	無文／波状口縁	鳥/木沢式	
国29-7	B区	CS-CT-90 CT-96	Ⅲ層	深鉢	口縁部～胴部	20.0	(一)	(21.0)	貝殻刺突(父文)～ケズリ ～方文／波状口縁／波状口 縁／口部割裂突	鳥/木沢式	P-282, 283, 290～293, 295, 296, 304～306, 310, 320, 321, P-4
国29-8	B区	CU-97	Ⅲ層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(2.6)	貝殻刺突～刺突	鳥/木沢式	P-254
国29-9	B区	CV-94	Ⅳ層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(4.0)	貝殻刺突～刺突	鳥/木沢式	P-103
国29-10	B区	CV-94	Ⅲ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(3.0)	沈窓(実った工具で施文) ～1段状口縁／1と同一個体?	鳥/木沢式	P-13
国29-11	B区	CS-96	Ⅲ層～Ⅳ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(3.9)	貝殻刺突～引抜(半埋 工具で施文)／内面：貝 殻刺突	鳥/木沢式	P-322, P-3
国29-12	B区	CH-93 CV-93+94	Ⅲ層～Ⅳ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(9.5)	ユビナデ／内面：貝殻刺 突	鳥/木沢式	P-3, 127, 133, 160, 187, 194, 196, 206, 208
国29-13	B区	CV-94	Ⅳ層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(5.55)	貝殻刺突文／貝殻刺突 ～引抜(半埋工具で施文) ～1段状	鳥/木沢式	P-146, 188, P-3
国29-14	B区	CV-93+94 CH-94	Ⅲ層～Ⅳ層	深鉢	口縁部～胴部	(一)	(一)	(3.3)	貝殻刺突文／貝殻刺突 ～1段状口縁／内面：貝殻刺 突文	鳥/木沢式	P-2, 7, 9, 44, 46, 56, 125, 126, 130, 131, 134, 144, 162, 184, 190, 206, 207
国29-15	B区	CV-94	Ⅳ層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(24.0)	貝殻刺突文／貝殻刺突 ～1段状口縁／内面：貝殻刺 突文	鳥/木沢式	P-185, 203, P-3
国29-16	B区	CV-94+95 CH-95	Ⅲ層～Ⅳ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(11.4)	内面：貝殻刺突文／1と 同一個体	鳥/木沢式	P-23, 53, 71, 98, 108, 114, 143
国29-17	B区	CU-95	Ⅲ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(4.4)	内外面ケズリ	鳥/木沢式	P-301
国29-18	B区	CV-94	Ⅳ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(5.5)	内外面ケズリ	鳥/木沢式	P-61
国29-19	B区	CS-96	Ⅲ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(4.4)	内外面ケズリ	鳥/木沢式	P-315
国29-20	B区	CU-95	Ⅲ層～Ⅳ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(4.4)	内外面ケズリ	鳥/木沢式	P-214, 222
国29-21	B区	CU-94	Ⅲ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(3.9)	内外面ケズリ／32と同一 個体	鳥/木沢式	P-41
国29-22	C区	CS-98	Ⅳ層	深鉢	底部	(一)	(一)	(4.9)	無文／内面：指頭压載 ～焼付着	早稲田6類	P-10, 12, 13
国29-23	A区	IG-49	Ⅲ層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(4.8)	L.R. ループ文／繩維	早稲田6類	
国29-24	A区	IG-49	1層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(5.7)	L.R.?／繩維	早稲田6類	
国29-25	E区	DG-45～49 46～48 49～53 50～52 52～53	表土	深鉢	胴部	(一)	(一)	(4.0)	R.L.R.／繩維	早稲田6類	08掘切(3)トレント
国29-26	A区	IG-58	Ⅳ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(4.3)	R.L.／繩維	早稲田6類	
国29-27	E区	DG-45～49 46～48 49～53 50～52 52～53	表土	深鉢	胴部	(一)	(一)	(2.75)	L.R.(0段多条?)／繩維	早稲田6類	08掘切(3)トレント1
国29-28	E区	EC-ED-25+26	Ⅲ層下部	深鉢	胴部	(一)	(一)	(4.2)	L.R.／繩維	早稲田6類	08掘切(3)P-1 トレント16
国29-29	B区	CS-97	Ⅲ層	深鉢	胴部	(一)	(一)	(3.4)	L.R.(0段多条?)／内面 条文／繩維	早稲田6類	P-324
国29-30	B区	CS-97	Ⅲ層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(3.1)	内面：貝殻刺突文(R.L.)／ 口縁部 R.L.	早稲田6類	P-287
国29-31	B区	CS-97	Ⅲ層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(4.9)	内面：貝殻刺突文(R.L.)・ R.L.／口縁部 R.L.	不明	P-288
国29-32	B区	CT-97	Ⅲ層	深鉢	口縁部	(一)	(一)	(4.9)	内面：貝殻刺突文(R.L.)・ R.L.／口縁部 R.L.	不明	P-286

国版番号	区	出土地点	層位	器種	部位	口径 (cm)	底深 (cm)	器高 (cm)	文様などの特徴	時期	備考
ED39-33	C区	CH-95	Ⅲ層	深鉢	口縁部	(-)	(-)	(3.6)	沈突・斜突・口縁部斜突	不明	
ED32-45	A1区	CV-77	Ⅲ層 Ⅳ層	环	胴部	(-)	(-)	(6.5)	外面：ケズリ・ミガキ／内面：ミガキ・黒色処理		
ED32-46	A1区	DB-71	Ⅲ層	环	胴部	(-)	(-)	(3.7)	外面：ケズリ・ミガキ／内面：ミガキ・黒色処理		
ED32-47	A1区	CV-77	Ⅲ層	环	口縁部～胴部	16.2	(-)	(4.4)	外面：ナデ・ミガキ／内面：ミガキ・黒色処理		
ED32-48	A1区	CV-77	Ⅲ層	环	口縁部～胴部	14.6	(-)	(4.25)	外面：ナデ・ミガキ／内面：ミガキ・黒色処理		
ED32-49	A1区	CV-76 CV-77	Ⅰ層 Ⅱ層	环	口縁部～胴部	12.8	(-)	(5.1)	外面：ミガキ・内面：ミガキ・黒色処理		
ED32-50	A1区	CV-76	Ⅲ層	环	口縁部～胴部	20.6	(-)	(4.3)	外面：ミガキ・内面：ミガキ・黒色処理		
ED32-51	A1区	CU-77	Ⅲ層 Ⅳ層	环	胴部～底部	(-)	8.0	(1.9)	外面：ナデ・ミガキ・黒色処理		
ED32-52	A1区	CX-77 CY-77+78	Ⅲ層 Ⅳ層	球形 底盤	口縁部～底盤	17.2	9.0	(26.5)	外面：ミガキ・ヨコナデ／内面：ハナメ～ミガキ／底盤：木製	P-2,P-3	
ED32-53	A1区	CH-72	Ⅲ層	球形 底盤	胴部	(-)	(-)	(4.9)	外面：ナデ・ヨコナデ／内面：ハナメ・底盤の擦耗が激しい		
ED32-54	A1区	BC-76 CY-75 CW-75 CY-75	Ⅲ層 Ⅳ層	球形 底盤	胴部	(-)	(-)	(10.8)	外面：ナデ・ミガキ・ヨコナデ／内面：ナデ		
ED32-55	A1区	CH-76 DB-71 DH-73	Ⅲ層 Ⅳ層	環	口縁部～胴部	(17.8)	(-)	(11.6)	内外面：ハケメ～ヨコナデ		
ED32-56	A1区	DB-71 DC-72	Ⅲ層 Ⅳ層	環	口縁部～胴部	(13.2)	(-)	(8.15)	内外面：ハケメ～ヨコナデ／35と同一個体？		
ED32-57	A1区	CV-75～77	Ⅰ層	環	口縁部～胴部	(-)	(-)	(5.1)	内外面：ナデ・ヨコナデ／内面：底盤毛刷状		
ED32-58	A1区	DB-75	Ⅲ層	環	口縁部～胴部	(-)	(-)	(3.65)	内外面：ナデ～ヨコナデ／内面：底		
ED32-59	A1区	DC-73	Ⅰ層	環	胴部	(-)	(-)	(2.6)	内外面：ミガキ		
ED32-60	A1区	CV-76	Ⅰ層	環	胴部	(-)	(-)	(2.1)	内外面：ヨコナデ／段状底盤		
ED32-61	A1区	DB-76	Ⅲ層	環	口縁部	(-)	(-)	(2.4)	内外面：ヨコナデ／内面：ハナメ～ヨコナデ／内面		
ED32-62	A1区	CH-75	Ⅰ層	環	口縁部	(-)	(-)	(2.3)	内外面：ヨコナデ／直立		
ED32-63	A1区	DC-74	Ⅰ層	環	胴部	(-)	(-)	(6.7)	内外面：ケズリ・ナデ・内面：ナデ・底盤板	P-3	
ED32-64	A1区	CV-75～77	Ⅰ層 Ⅱ層	環	胴部	(-)	(-)	(7.4)	内外面：ナデ・ヨコナデ／内面：ナデ・ヨコナデ／内面：ハナメ		
ED32-65	A1区	DC-71	Ⅲ層	環	底盤	(-)	(8.4)	(2.1)	内外面：ミガキ・内面：ハナメ		
ED32-66	A1区	DB-75 CY-74+76	Ⅰ層 Ⅱ層	環	胴部～底盤	(-)	6.6	(5.50)	内外面：ハケメ		
ED32-67	A1区	CV-76 CH-75 CY-78	Ⅰ層 Ⅱ層	環	胴部～底盤	(-)	6.6	(4.1)	内外面：ケズリ・内面：ナデ・底盤：テラフ		
ED32-68	A1区	CV-77 DA-77	Ⅲ層	環	底盤	(-)	(6.0)	2.0	内外面：ケズリ・内面：ナデ・底盤：ケズリ	P-2,P-3	

塙切沢(2) 遺跡 石器

国版番号	区	出土地点	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
国9-10	A1区	SI-01	1層	石椎	2.3	2.0	0.6	1.7	珪質頁岩	S-1 無茎回基
国9-11	A1区	SI-01	1層	石椎	2.1	2.0	0.65	4.0	黒曜石	S-3
国9-12	A1区	SI-01	2層	スカラップバー	2.25	1.95	5.5	2.2	珪質頁岩	S-10
国15-51	B区	表保	表保	石椎	6.05	3.65	1.85	28.6	珪質頁岩	
国15-52	A1区	BF-BF-109+110	Ⅲ層	石椎	3.4	4.45	0.9	8.9	珪質頁岩	トレンチ3 構型
国15-53	A1区	BD-112	Ⅲ層	石椎	6.0	2.7	1.2	12.8	珪質頁岩	S-1 細型
国15-54	A1区	BF-110	Ⅲ層	スカラップバー	2.8	1.75	0.9	4.4	珪質頁岩	S-8
国16-55	A1区	BE-109	Ⅲ層	磨石	14.8	8.2	5.0	688.2	凝灰岩	S-4 断面三角形状
国16-56	C区	CH-86+87 CI-CJ-85+86 CH-85	Ⅲ層	敲石	10.2	10.2	3.4	296.2	凝灰岩	トレンチ30

塙切沢(3)遺跡 石器

段版番号	区	出土地点	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
ED21-21	A1区	SI-01 カマド	カマド4層	支脚	9.65	6.35	5.3	139.0	軽石	
ED21-22	A1区	SI-01	I層	磨石	(8.4)	9.8	3.75	441.2	花崗閃緑岩	S-4, S-×接合 級熱
ED21-23	A1区	SI-01	I層	磨石	(11.1)	(9.5)	(5.3)	86.0	凝灰岩	S-4, S-11, 18接合
ED21-24	A1区	SI-01	I層	磨石	(9.6)	(5.7)	(5.15)	373.8	凝灰岩	S-3, 6接合
ED21-25	A1区	SI-01	I層	磨石	(10.7)	(5.5)	(3.3)	413.5	凝灰岩	
ED30-34	A1区	DF-58	Ⅳ層	石鏃	(3.3)	1.8	4.5	2.0	カルセドニー	S-2 無茎平基
ED30-35	A1区	CF-73	I層	石鏃	4.1	1.75	5.0	2.4	珪質頁岩	無茎平基
ED30-36	B1区	CU-95	IV層	石鏃	3.95	1.3	0.45	1.5	珪質頁岩	S-3 無茎圓基
ED30-37	A1区	CT-79	Ⅳ層	石鏃	3.43	1.5	0.6	2.5	珪質頁岩	有茎凸基 黒色物質付着
ED30-38	A1区	DE-55	IV層	石椎	(5.2)	1.95	0.6	5.0	珪質頁岩	S-1
ED30-39	A1区	DB-76	Ⅴ層	スクレイバー	3.15	1.35	0.45	1.6	珪質頁岩	火ハシケ
ED31-40	B1区	CT-96	Ⅴ層	スクレイバー	4.25	3.35	1.05	18.2	珪質頁岩	S-7
ED31-41	B1区	DB-89	Ⅴ層	敲石	10.0	5.0	2.3	161.2	凝灰岩	S-10
ED31-42	A1区	DC-69	Ⅳ層	敲石	9.3	4.7	2.9	163.9	砂岩	
ED31-43	A1区	DC-69	Ⅳ層	磨石	9.6	5.7	5.15	462.1	安山岩	
ED31-44	A1区	DB-74	Ⅲ層	台石	25.25	9.5	6.65	2204.4	安山岩	

塙切沢(3)遺跡 土製品

段版番号	区	出土地点	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	調整	時期	備考
ED33-69	A1区	DB-74	Ⅱ層	訪跡車	6.8	6.8	3.4	163.1	1ガキ		土製品-1
ED33-70	A1区	DB-74	Ⅱ層	訪跡車	(7.09)	(7.0)	3.55	172.9	1ガキ		土製品-2, 3接合
ED33-71	A1区	CF-76 CF-75	Ⅱ層	訪跡車	3.3	(5.3)	3.1	47.5	ナデ+1ガキ		土製品-4 道標外P-1接合
ED33-72	A1区	CF-76	Ⅱ層	訪跡車	(4.8)	(2.2)	(1.9)	18.8	ナデ		土製品-5

写真図版



堀切沢(2)遺跡全景(NW→)



堀切沢(3)遺跡全景(SE→)

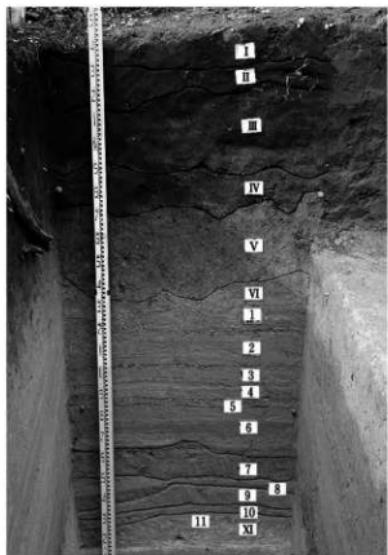
写真1 遺跡全景



堀切沢(2) 道跡E区調査前風景 (NW→)



堀切沢(3) 道跡C区調査前風景 (SE→)



堀切沢(2) 道跡A区基本層序 (NE→)



堀切沢(2) 道跡B区基本層序 (SW→)



堀切沢(2) 道跡C区基本層序 (SW→)

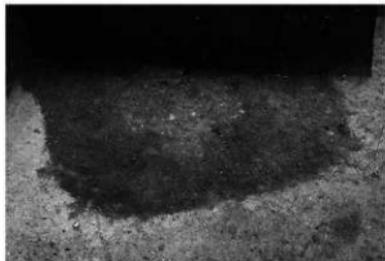


堀切沢(3) 道跡A区基本層序 (SW→)



堀切沢(3) 道跡B区基本層序 (NE→)

写真2 調査前風景・基本層序



第1号竪穴住居跡検出状況 (S E ->)



第1号竪穴住居跡A-A' 土層 (N E ->)



第1号竪穴住居跡B-B' 土層 (S E ->)



第1号竪穴住居跡C-C' 土層 (N E ->)



第1号竪穴住居跡完掘 (N ->)



第2号竪穴住居跡土層 (S E ->)

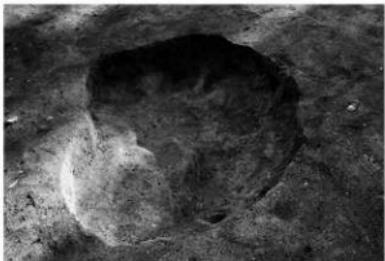


第2号竪穴住居跡完掘 (N W ->)

写真3 塙切沢(2)遺跡竪穴住居跡



第1号土坑土層(N E→)



第1号土坑完掘(N E→)



第1号溝状土坑土層(S W→)



第1号溝状土坑完掘(N E→)



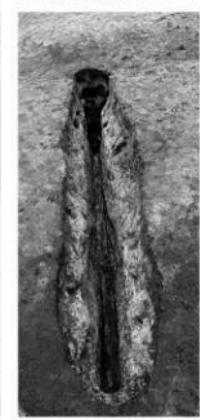
第2号溝状土坑完掘(N E→)



第2号溝状土坑土層(N E→)



第3号溝状土坑土層(S W→)



第3号溝状土坑完掘(N E→)



B区遺物出土状況(NW→)

写真4 堀切沢(2)遺跡土坑・溝状土坑

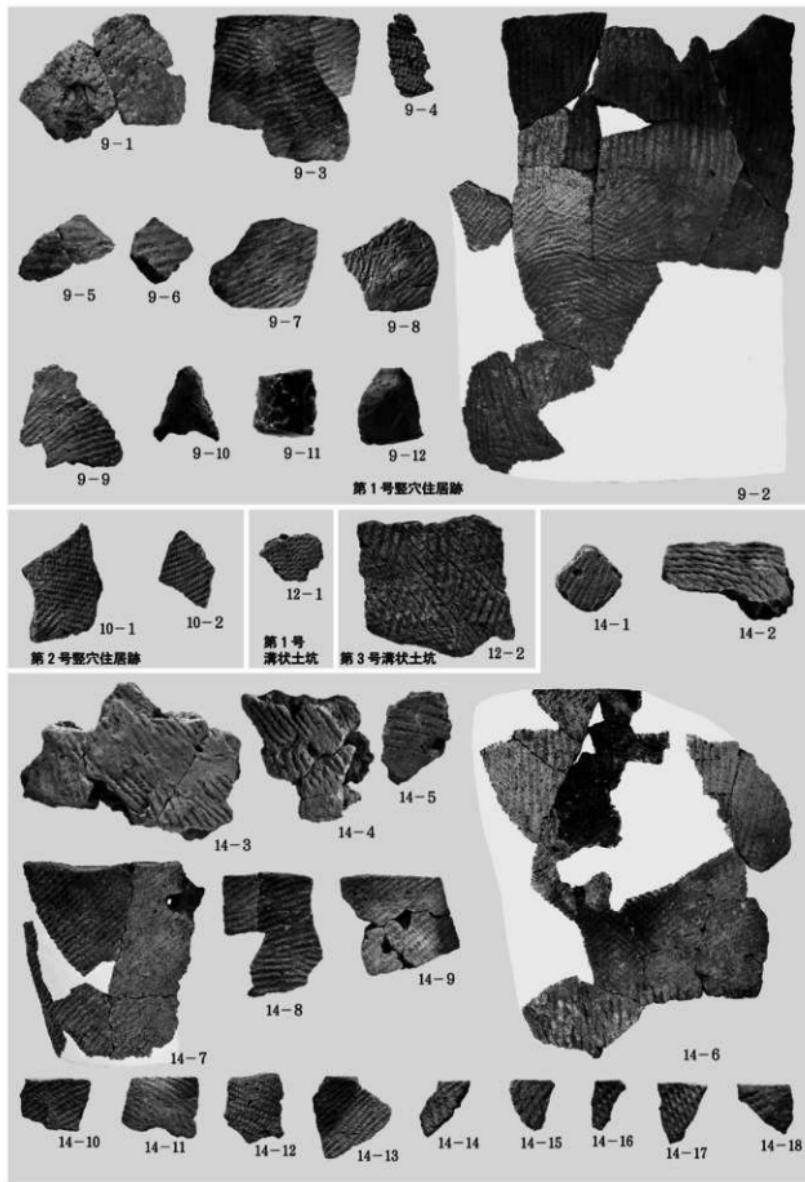


写真5 堀切沢(2)遺跡遺構内出土遺物・遺構外出土遺物(1)

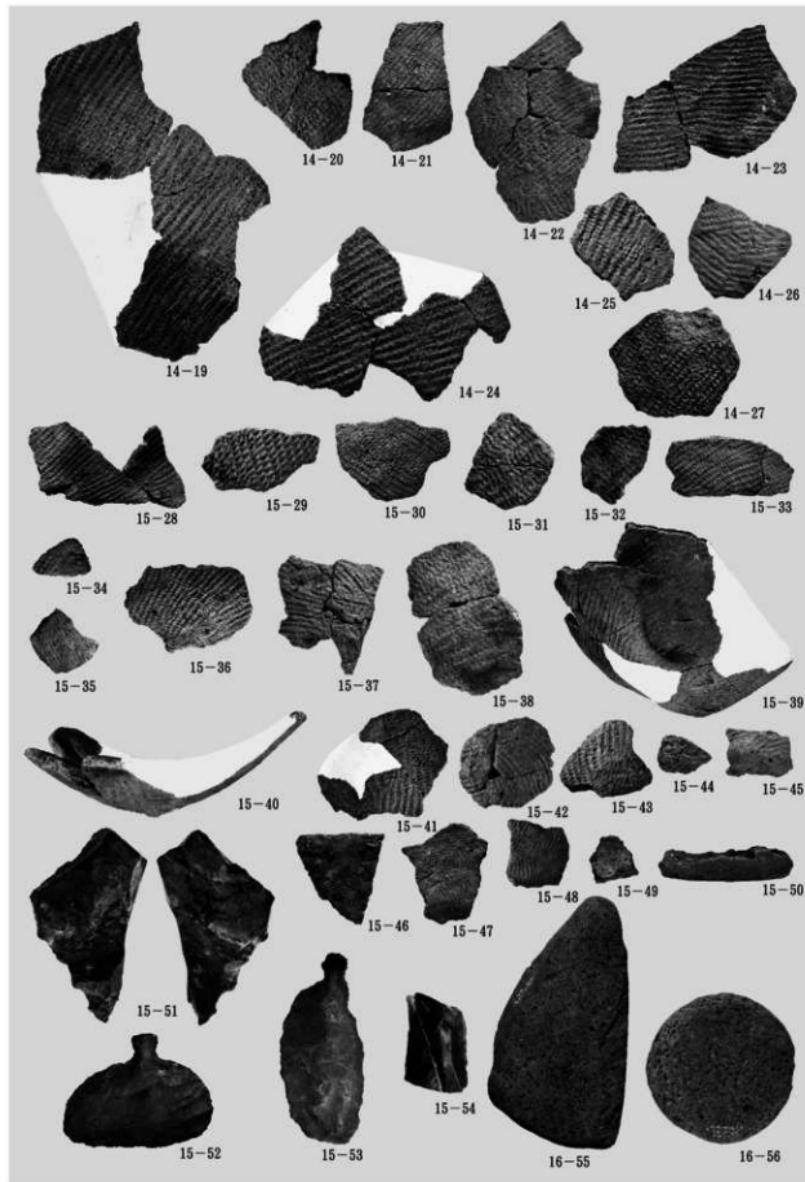


写真6 塙切沢(2)遺跡遺構外出土遺物(2)



第1号竪穴住居跡検出状況 (S E →)



第1号竪穴住居跡A-A'土層 (W →)



第1号竪穴住居跡カマドD-D'土層 (SW →)



第1号竪穴住居跡カマドE-E'土層 (SE →)



第1号竪穴住居跡カマドF-G'土層 (SE →)



第1号竪穴住居跡カマド火床面 (SE →)



第1号竪穴住居跡完掘 (SE →)



第1号竪穴住居跡遺物出土状況 (SE →)

写真7 塙切沢(3) 遺跡竪穴住居跡



第1号土坑土層(SW→)



第1号土坑完掘(SW→)



第2号土坑土層(NE→)



第2号土坑完掘(NE→)



第3号土坑土層(SE→)



第3号土坑完掘(SE→)



第4号土坑土層(SE→)

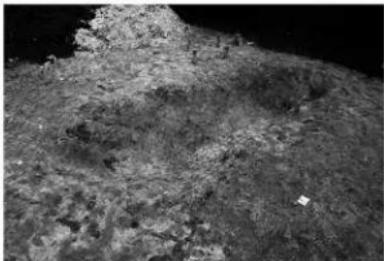


第4号土坑完掘(E→)

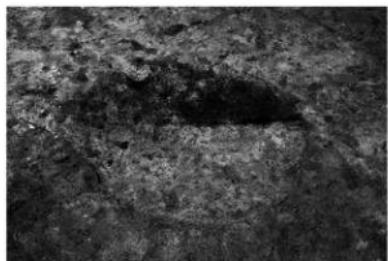
写真8 堀切沢(3)遺跡土坑(1)



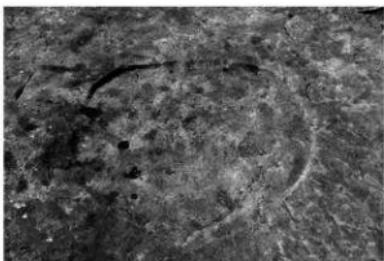
第5号土坑土層（E→）



第5号土坑完掘（S→）



第6号土坑土層（S E→）



第6号土坑完掘（S E→）



第1号焼土遺構土層（S E→）



第1号焼土遺構完掘（S E→）



B区遺物出土状況（N→）



B区遺物出土状況（N→）

写真9 堀切沢(3) 遺跡土坑(2)・焼土遺構



第1号溝状土坑土層(SW→)



第2号溝状土坑土層(SW→)



第3号溝状土坑土層(N→)



第4号溝状土坑土層(NE→)



第5号溝状土坑土層(NE→)



第6号溝状土坑土層(W→)



第7号溝状土坑土層(SW→)



第8号溝状土坑土層(NE→)



第9号溝状土坑土層(E→)

写真10 塙切沢(3)遺跡溝状土坑(1)



第10号溝状土坑土層 (N E→)



第11号溝状土坑土層 (S W→)



第12号溝状土坑土層 (S W→)



第15号溝状土坑土層 (S E→)



第16号溝状土坑土層 (N W→)



第17号溝状土坑土層 (N W→)



第18号溝状土坑土層 (N E→)



A区溝状土坑検出状況 (N→)

写真11 堀切沢(3) 遺跡溝状坑(2)

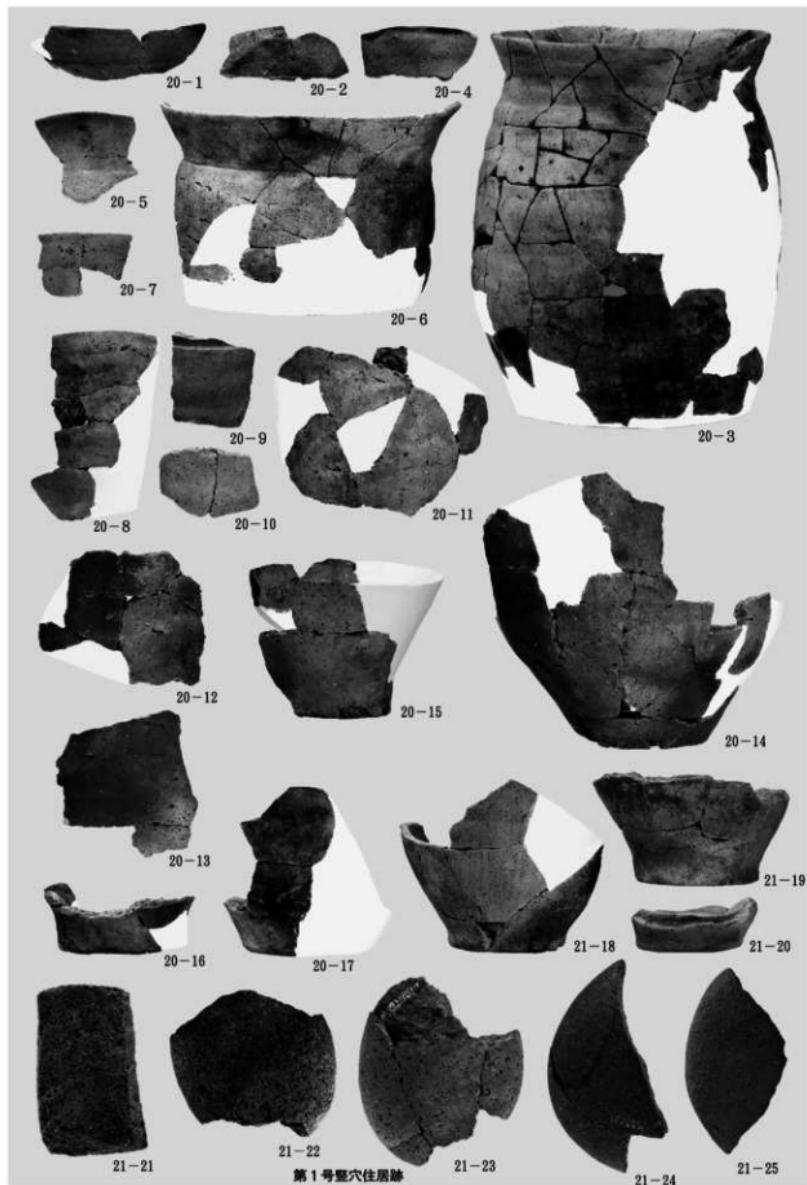


写真12 堀切沢(3)遺跡遺構内出土遺物

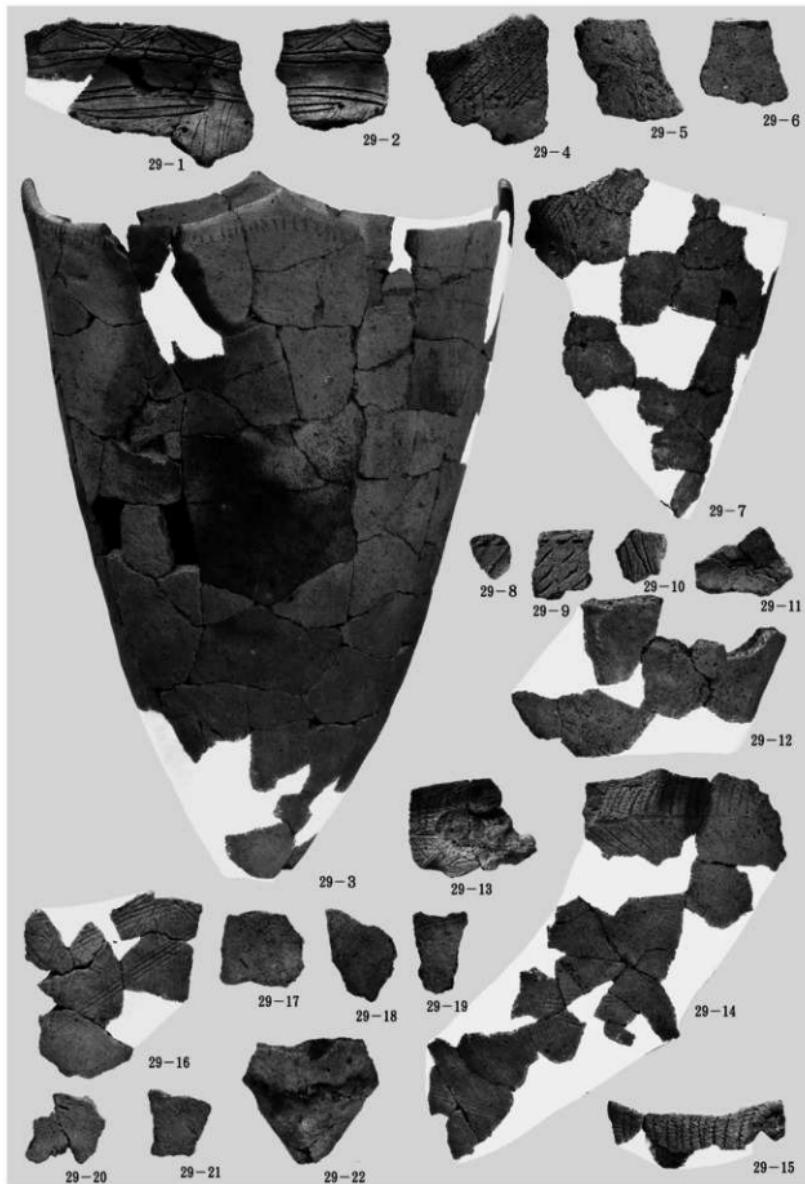


写真13 堀切沢(3) 遺跡遺構外出土遺物(1)

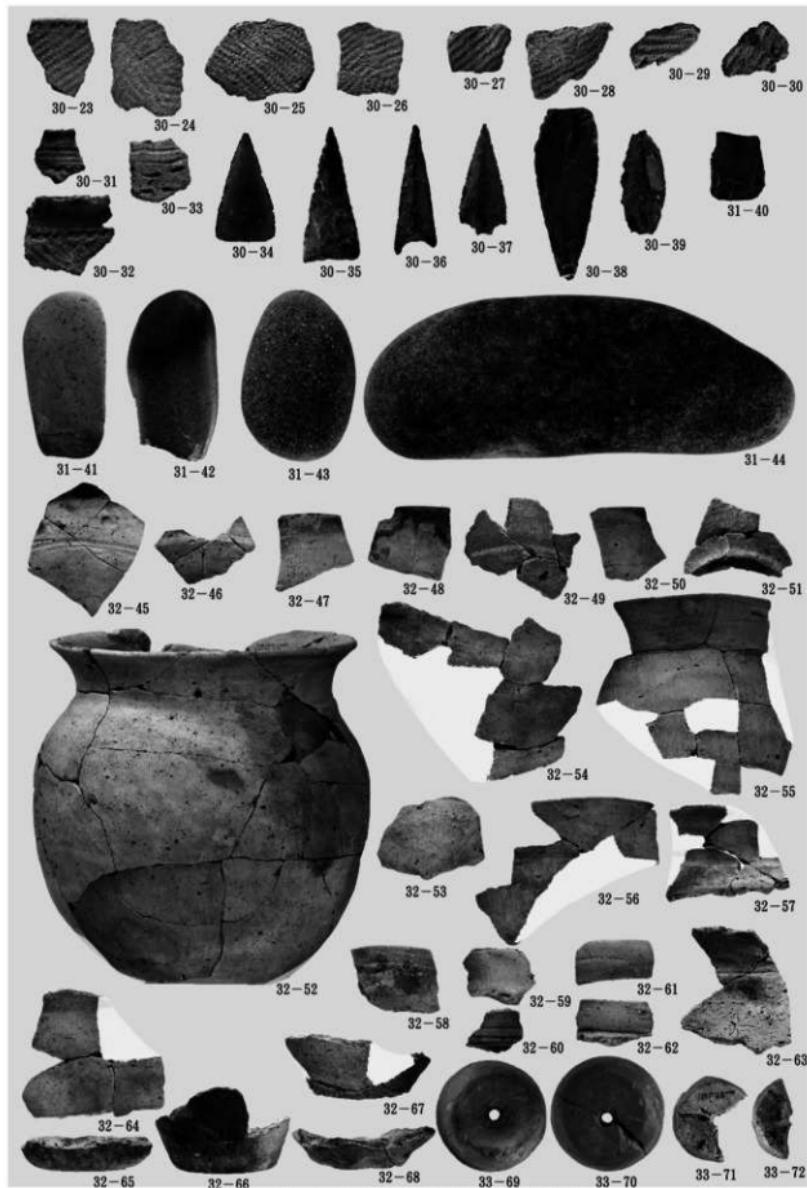


写真14 掘切沢(3)遺跡遺構外出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな 書名	ほりきりざわかっこにいせきに・ほりきりざわかっこさんいせきに 堀切沢(2)遺跡II・堀切沢(3)遺跡II						
副書名	一般国道45号上北道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告						
シリーズ番号	青森県埋蔵文化財調査報告書 第511集						
編著者名	平山明寿 能代谷征則						
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701						
発行機関	青森県教育委員会						
発行年月日	西暦2012年3月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
ほりきりざわかっこに 堀切沢(2) 遺跡	あおもりけんのむねきたぐらく 青森県上北郡六 戸町大字犬落瀬	市町村 02405	40°38'49" 40°38'59"	北緯 東経 141°21'23" 141°21'11"	2009.07.01 2009.07.31 2010.05.06 2010.10.15 2011.05.10 2011.05.27	1,632	一般国道45 号上北道路 建設事業に 伴う事前調 査
ほりきりざわかっこに 堀切沢(3) 遺跡	あおもりけんのむねきたぐらく 青森県上北郡六 戸町大字犬落瀬	市町村 02405	40°38'55" 40°39'06"	北緯 東経 141°21'17" 141°21'05"	2008.10.08 2008.10.31 2009.07.01 2009.07.31 2010.05.06 2010.10.15 2011.05.10 2011.05.27	11,585	一般国道45 号上北道路 建設事業に 伴う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
堀切沢(2)遺 跡	集落跡 狩猟場	縄文時代	竪穴住居跡 溝状土坑 2軒 3基	縄文土器、石器			
	散布地	時代不詳	土坑 ビット 1基 2基				
堀切沢(3)遺 跡	狩猟場 散布地	縄文時代	溝状土坑 土坑 ビット 16基 1基 1基	縄文土器、石器			
	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡 1軒	土師器、石器、土製品			
	散布地	時代不詳	土坑 焼土遺構 ビット 5基 1基 2基				
要約	堀切沢(2)遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡と溝状土坑等が検出された。竪穴住居跡は縄文時代前期前葉以前に廃止したと考えられる。遺物は縄文時代早期後葉と前期前葉の土器等が出土した。縄文時代前期前葉以前に小規模な集落が、中期未葉以降には狩猟場として利用されたと推定される。 堀切沢(3)遺跡では、縄文時代の土坑、溝状土坑と古代の竪穴住居跡等が検出された。縄文時代の土坑は早期の落し穴と推定される。古代の竪穴住居跡は8世紀中頃から後葉の年代が考えられる。遺物は縄文時代早期中葉と前期前葉の土器、および8世紀中頃から後葉の土師器等が出土した。縄文時代早期および中期未葉以降には狩猟場として、古代には小規模な集落が営まれていたと推定される。また、縄文時代早期中葉から前期前葉にも人々の生活の痕跡が確認された。						
	兩遺跡ともに丘陵縁辺部を利用してあり、縄文時代には時期ごとに地点を替えて遺物包含層が形成されていた。						

青森県埋蔵文化財調査報告書 第511集

堀切沢(2) 遺跡 II 堀切沢(3) 遺跡 II

—一般国道45号上北道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2012年3月28日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印 刷 東奥印刷株式会社
〒030-0113 青森市第二問屋町3丁目1-77
TEL 017-739-8951 FAX 017-739-8953
